機動戦士ガンダム　鉄血のオルフェンズ　The GOETHIA―LOGUE

Rick Mocky

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異なる幾つもの「シン」が混ざり合う時、誰も観たこともない「鉄の華」が織り成す、新たなストーリーが始まる。

罪を背負い、世界に侵食する者。

何かに導かれ、果てるべき命を拾い、束ねる者。

受け継ぎ、次代に繋げ行く者。

そして、「招かれざる客」として召喚された、「持たざる力」を持つ者たち。

彼等が、「鉄血の世界」と融合したその先には……

目次

LOG ”Shin” Prologue：ジェイルブレイク・トゥ・アンビション ―――――― 1
Intermissionl／登場人物紹介（随時更新） ―――――― 34
LOG―「侵」
第1話：煉獄帰りの軍神 ―――――― 39
第2話：謀略の宇宙（そら） ―――――― 97
第3話：激突！鉄華団 VS タービンズ・前編～衝突！～ ―――――― 156
第4話： 激突！鉄華団 VS タービンズ・中編～劣勢～ ――――――

ＬＯＧ ”Ｓｈｉｎ” Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：ジェイルブレイク・トゥ・アンビション

Ｌｏｇ ”Ｓｈｉｎ”
Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

ジェイルブレイク・トゥ・アンビション
Ｃｈａｐｔｅｒ－１：天上界
伝令：「伝令ッ！タルタロス大監獄より……　大罪人：『デイジー・パラケルス』が…脱獄されたとの事！今現在、警備隊と交戦中、ですがヤツらに太刀打ち出来ず…　エルヴィン様、どうか救援をォォッ…」
修羅場から生還したと思われる伝令が、一人の剣士：エルヴィンと名乗る男に報告した。
エルヴィン：「（あの難攻不落の大監獄《タルタロス》からいとも簡単に!?）分かった、ジュリアス様にも伝えてやってくれ。準備整い次第、大監獄へ向かう！
（確か、イーサンが警備隊に入ってたような…　仕方ない、行こう。）」

何かを思い出したかのように、彼は赤いロングコートを纏い、武器であるロングソードを携え、タルタロス大監獄へと馬を走らせた。

ー一後に、とんでもない事態に巻き込まれる事になるとも知らずに・・・・

Ｃｈａｐｔｅｒ―２：タルタロス大監獄にて・・・

『タルタロス大監獄』

地の底にあると云う、天上界を騒がせた罪人を収監する為、建立された監獄。鉄壁の守りもあり、『難攻不落の大監獄』なる二つ名で恐れられていると云う。

所謂テロリストや国家反逆罪などのいわゆる「危険因子」が多数収監されているのだ。

しかし、難攻不落の大監獄も、遂に崩れ去ろうとしていた。

数時間前にさかのぼる。

「何者か」が侵入、看守を手にかけたらしい。

怪しい一団Ａ：「看守共を仕留めたよ。どうするゥ？他の看守共に気付かれちまうよ？」

怪しい一団Ｂ：「なぁに、心配は無用なのでね。さて我等も急ぐとしよう・・・・・」

黒づくめのロングコートを纏った一団は、向かうべき『ある場所』へと向かった。

すると、彼らを遮るかのように、声が聞こえた。

???：「そこまでだ！ここから先は通さないッ！看守を手にかけてまで・・・・　貴様等は何

処へ向かおうとしている？」

怪しい一団A：「知ィるゥか、そんな事ォッ！御大層な大剣背負った『ガキ』に、俺たちの目論見なぞ分かってたまるかよ、エエッ？」

怪しい一団B：「クックックッ、貴様はここで果てて貰おうか・・・　急がせて貰うぞ。『アグナス』、あの剣士と遊んでやれ、殺してやっても構わない」

そう言った後、黒づくめの一団は、近衛剣士を制止を振り切り、目的を果たさんが為、タルタロスの『深奥部』へと向かった。

???：「抜かれたか・・・　ヤツらを追え！恐らく狙いは深奥部に囚われている『あの女狐』だ！何としてでも阻止するのだッッ！」

近衛兵団：「はっ!!」

近衛剣士が、配下の近衛兵に指示を飛ばした刹那・・・・・

警備兵：「（ザシュッ・・・・）うぐぅわァァッ!!」

警備兵：「（ズバンッ！）ごぉわァァッ!!」

間髪入れずに、無惨にも斬り刻まれて行く近衛兵たち。

その先にいるのは、黒い甲冑と黒いファーが目立つマントを纏い、両手には、『見覚えのある』ロングソードを携えている。

灰色の長髪に蒼い瞳・・・『彼』は、『眼前にいる剣士』を知っていたらしい。

???：「何でだよ? 嘘だと言ってくれよ? 何であなたと剣を交えなきゃいけないんだ・・・・

そして、何で『アイツらに魂を売って』しまったんだよ・・・・

アグナスさん!!!

アグナス：「我等が野望・・・ デイジー『奪還』の為・・・・

『イーサン・ユアン・エルヴィン』貴様にはここで・・・・・・『死んで貰うッ！』」

Ｃｈａｐｔｅｒ―３：解き放たれる悪意

タルタロス大監獄深奥部に到達した黒づくめの一団。

一団の目の前には、幾重にも封印が施された結界に囲まれた牢が見えた。

怪しい一団Ａ：「こんなにもガッチガチに封印かけられてんじゃないのよォ、「セルバンテさん」よぉ?こんなガッチガチな封印、てか鍵、破壊してやってくんない?」

怪しい一団Ｂ（セルバンテ）：「造作もない事よ・・・ こうしてくれる・・・（右手に、剣状に集束させた光を振りかぶり）フンッ！」

ズゴォォン!!じゃらじゃらじゃらじゃら・・・・

セルバンテが放った一撃で、牢があっと云う間に破壊された。すると・・・・・

デイジー：「あ～あ、「良く寝た」、と云うか、ずぅ～っと退屈してたんだよねぇ～。アタシの事、助けに来てくれたの？」

ブチ抜かれた牢から、紫のマジョーラカラーの長髪に、頭髪の色と相対する程透き通った白い肌に、すみれ色の瞳の女囚人：デイジー・パラケルスが姿を現した。

『天上界に騒乱を起こして破壊。後に彼女の王国を作りあげる』と云う、クーデターを興そうとしていた。

しかし、その目論見は看破され捕縛。国家転覆の罪に問われ、天上界の司法機関は彼女に対し、「人間で云う終身刑」に等しい判決：『タルタロス大監獄深奥部・無間獄入牢1世紀』を言い渡し、服役中の身である、筈だった。

獄中から彼女は「念」を飛ばし、彼女の仲間に対し、

「難攻不落の大監獄を破壊し、大罪を着せてブチ込んだアイツらにギャフンと云わせてあげちゃおうか♪」

と云うメッセージを飛ばし続けた。

その結果、集まったのは僅か１０人程度。いわゆる「デイジー一味」の連中共だ。

その仲間うちの中から、潜入に成功したのは、一味の中で、魔術や法術に長ける魔術師：「セルバンテ・ヨグ・バルボッサ」と、名は明かせぬが、筋骨隆々ではあるが、一部

オネェ口調を使う男。（在りし日は、とある海賊のＮｏ．２兼パイロットだったらしい。↑誰かと云えば、読者諸氏もお分かり頂けるだろうか？）

そしてもう一人は、イーサンと交戦中である謎の剣士：「アグナス・ハスター」。

残りのメンバーは、タルタロスの外で「待機している」、との事だ。

解き放たれ、自由の身になろうとしている悪意は、大監獄の壁を難なく突破し、外に出ようとしている。

まさに、「難攻不落の壁が崩壊する」瞬間であった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―４：「悪魔の心臓」

大罪人デイジーが解き放たれた。大監獄始まって以来の由々しき事態にまで発展した。

セルバンテ：「暫くだな、デイジー。退屈な牢生活は満喫出来たかね？」

デイジー：「退屈してたわよ、セルバンテさん。アタシのメッセージ受け取ってくれてありがと、てか「いつものメンバー」ばかりじゃん、もぉ～」

セルバンテ：そうカッカしても「事」は進まんぞ。外で他の連中が、あんたの帰還を待っているぞ」

デイジー：「そ、そうね。「やるべき事」が、アタシらにはまだあるから、ね？あ、そ

うだ!!アタシを解き放ってくれたお礼に、何か良いものあげる！」

セルバンテ：「ほぉ～う、「良いもの」とは何かね??」

デイジー：「ちょっと待ってて。「結構な物量を引っ張り出して来た」から、ちょっと離れてくれない？」

そう言った後、デイジーはセルバンテらに離れるよう指示を出し、指示のまま、彼らは離れた。

デイジー：「そんじゃ行くよ……　はぁァァッ!!!」

彼女の手から放たれたモノ、それは地上絵にも似たような魔方陣が監獄の廊下に顕現し、無間牢一帯を吹き飛ばした。

そこから出てきたモノは、まるで大きいタイヤを並列に繋げたような物体であった。

それを見たセルバンテは、驚嘆しながらデイジーに問う。

セルバンテ：「これは一体……」

デイジー：「アタシの「力」で、「別の次元から取り寄せたの」。まるで「意思を持った機械の心臓」のような代物なの」

セルバンテ：「確かに「脈動」は感じるが、これは何なのだ？」

（※セルバンテが言った「脈動」とは、「固有周波数」の事です。まだ現段階で「エイハ

ブウェーブ」と「エイハブ粒子」を理解していません。後々理解する、と云う事でｍ（＿＿）ｍ）

デイジー：「そうね……　この代物の名は……

『エイハブリアクター』

別名：「悪魔の心臓」と呼ばれる代物なの」

セルバンテ：「エイハブ、リアクター？この代物の名称がか？誰から如何にして聞き出したんだ？」

デイジー：「「アタシの分身」を天上界に派遣させて、ある人に吐き出させて、教えてくれたの。

その人の名は……　「エイハブ・バーラエナ」

「悪魔の心臓の創造手」よ！」

セルバンテ：「その為に「あの術」を使ったのか？ハッハッハッハッ、まったくお前は…　前評判通り、使える『女狐』な訳だ」

セルバンテが言及する「あの術」。即ち「分身精製」。本人とおなじスペックの分身を

精製する事が出来る。彼女はこの術を使って、天上界にいるエイハブ・バーラエナを捕まえて、リアクターについて問いただした。

さらにデイジーの術は続く。

デイジー：「リアクターだけじゃ「つまんない」から・・・「こうゆうの」は、どうかな??」

すると、エイハブ・リアクターの後ろから、黒いトンガリ帽子を被ったような、如何にも悪魔のような黒い巨人が召喚された。

それと同時に、１０基以上同じようなエイハブリアクターと、異形なる巨人たちが群れを成して現れた。

その中で、リアクターが巨人たちの「体内」に、それぞれ取り込まれていった。

セルバンテ：「ほぉ～う。「召喚したリアクターと巨人を融合錬成させる」とは・・・流石デイジー、使える女狐な事で・・・」

デイジー：「もぉ～さっきから「使える女狐」、「使える女狐」って、アタシの事、小バカにしてるつもり?」

セルバンテ：「小バカにはしておらんよ、「褒め言葉」として受け取る方が無難だぞ・・・」

デイジー：「さ・て・と、「手駒」の準備は出来たし、頭打ちのおバカさん達を潰して

おかないとね……　それっ!!」

デイジーが指を鳴らしたと同時に、召喚された巨人たちが光に包まれ、そして蜘蛛の子を散らすように、それぞれ散っていった。

時同じく、タルタロス大監獄へと向かうエルヴィン。

彼も、散って行く光を目撃していた。

エルヴィン：「なんだ、あの光は?……　イーサンが危ない、急がねば!」

Ｃｈａｐｔｅｒ―５：”アンドラス”

（デイジー：「アグナスさん、あなたに良いものあげるから、邪魔な剣士…　排除してくれない?」）

イーサンと交戦中のアグナスに、テレパシーで指示が送られて来た。

イーサン：「アグナスさん、何であの女狐の側についてしまったんだ?アンタなら、「ダニエル兄さん」の背中を預ける位の中で、ボクの憧れだったのに、何で裏切るような事を?」

互いの剣を重ねながら、イーサンは、「傀儡の身」となったかつての仲間に向かって問いかける。しかし……

アグナス：「……　貴様に返す言葉など無い。あるとするなら…（ガキィィン!）我

が主の宿願の為、貴様の命、我等に差し出す事だな！」

アグナスの冷徹なまでに意思の無い冷たい刃を弾き返し、イーサンが反撃に転じようとしたその時！

『ズゴォォン!!』

アグナスの周囲に紫色の光が降り注ぎ、光の柱が精製された。

柱の中からうっすらと巨人の影が……

イーサンは巨人の影を見つめながら退き、警戒しつつ身構えていたその時だった。

『ズガァァン！』

光の柱の中から、巨大な大剣が降り下ろされ、監獄2フロア分消し飛ぶ斬撃が発生、フロアを消し飛ばした。

アグナス：「この力、最高だ！我が意のままに動かせるとはな…　気に入ったぞ、憎きジュリアスを、天上界を潰す力を……　そしてデイジー「様」の宿願成就の為、その力、存分に振るうがいい……

”アンドラス”ッッ!!」

（イメージBGM：「無双OROCHI2 Ultimate」より「最終決戦／THE FIRST END」）

漆黒の羽を生やし、大剣を携えた殺戮の悪魔・「アンドラス」なる「巨人」が、翡翠色に似た眼を輝かせてそびえ立っていた。

アグナスはどうやら、「”アンドラス”」の内部：「コクピット」に座っていた、と云うより融合していた。

（コクピット仕様は、ビルドファイターズシリーズのようなコクピットインテリアに、鉄オルのMSのメインパネルを増設したようなもの。阿頼耶識／MMIのピアスは無いが、操縦棹を握った時点で機体と「一体になる」新世代阿頼耶識仕様。アンドラスはこの仕様のコクピットになっている。まだこの段階で、エイハブリアクターの概念浸透してません。）

アグナス：「成る程、あの女狐め、いい得物をオレにくれるとはな……」

イーサン：「何だ、あの巨人は……。だが、アグナスはあの巨人と「融合している」、とでも云うのか？」

イーサンが巨人と対峙している最中に、援軍が来た。

脱獄の急報を聞き、近くに駐留していた遊軍の一団だ。

遊軍隊長：「イーサン様、ジュリアス様の命を受け、馳せ参じましたぞ！」

イーサン：「ありがたい。だが、あの巨人：”アンドラス”」には十分注意してくれ」

遊軍副長1：「了解し・・・ うわぁ～、何だあの巨人は!?」

遊軍副長2：「さっきイーサン様が云ってた「”アンドラス”」だっつーの！何退いてんだよ、強がりのくせして」

イーサン：「とにかく、目の前のアイツを倒し、デイジーを捕らえる。君たちは巨人の足を崩し、中に取り込まれたアグナスを引きずり出すんだ」

イーサンの口調が何処かしら苦し紛れのような感じだった。それもそのはず、実の兄であるダニエルと共に肩を並べる位の剣の腕が立ち、且つ「面識」がある友人でもあり彼の目標とする人物だ。しかし今は違う。イーサンらの前に立ち塞がり、且つデイジーの脱獄に「関与している」と云う事実がそこにあり、彼の胸中には、「何故僕たちを裏切ったのか？恩を仇で返すような事を何故？」と云う複雑極まりない想いが交錯しているに違いない。

無論、遊軍の隊長格なら尚更理解していよう。

遊軍隊長：「複雑な心中、我々も分かります。アグナス様と兄上であるダニエル様との仲は・・・」

イーサン：「そんな事は分かってる！」

遊軍隊長：「し、しかし今は・・・・・」

イーサン：「ヤらなきゃ」ならないんだ……。デイジーに「魅入られる」ようなアグナスさんじゃないのは分かってる…。でも…。彼女らに加担している時点で、悪は悪。悔しいのは分かるけど……」

泣きたい感情に落ちるイーサン。

”アンドラス”の外部スピーカーから、「裏切り者」の声が聞こえて来る。

イーサン：『どうした貴様等、この”アンドラス”の姿を見て怖じ気付いたのか？やはり「ジュリアス子飼いの剣士団」も、たかだかその程度の強さしか持ってないとしか云えんだろうな？』

遊軍兵卒Ａ：「何を云うか！」

遊軍兵卒Ｂ：「大罪人の片棒担ぎ風情が！」

遊軍兵卒Ｃ：「ジュリアス様の大恩に半旗を翻すとは…。裏切り者め!!」

アグナス：『やかましいィィッ!!』

と同時に、”アンドラス”が大剣を降り下ろした。

ブゥオオオッ!!

凄まじい巨大な剣圧が、イーサン達に襲いかかる。

遊軍兵卒：「うぉおおわっ!?」

吹き飛ばされ、壁に叩き付けられ、地に伏せる一部の兵卒達。
微動だに動かないイーサンと遊軍達。
アグナス：『ほぉ～う、この剣圧に怯まず、立ち向かえる余裕があるとはな・・・・』
（デイジー：『アグナスさん、何遊んでるの？』）
何処からともなく聞こえて来る女の声。
ざわめくイーサン達。
彼らの目の前にすみれ色の光の球が出現、”アンドラス”は身体を直し浮遊、大剣を右手に保ちつつ下に構え、左手で光の球を携えた。その光の球の中から、デイジーとセルバンテ、更に謎の黒服の男の３人が姿を現した。
イーサン：「あ・・・　れ・・・　が・・・・　あの・・・・　女狐・・・　か？」
絶句する一同。天女が舞い降りるかの如く、神々しいまでの闇のオーラを放ちながら、彼女は巨人の手のひらの中にいた。彼女のボディーガードのように、両サイドをセルバンテと黒服の男が、並び立っていた。
デイジー：「あらあら～、皆さんお揃いで・・・　私の晴れ舞台、観に来てくれたのかしら～？」
イーサン：「そんな戯れ言に付き合っているヒマなんてない!!デイジー・パラケルス!!天界を破壊と混沌の渦に陥れようとする罪、断じて許さないッ！ジュリアス・アウグス

トの名の下に、お前を、ひいては彼女に加担するお前達を、ここで処断するッ！全軍、突撃用意、構えッッ!!

」

イーサンの号令により、武器を構える。

そんな彼らの抵抗する様子を眺めながら、女狐は笑みを浮かべながら、アグナスに頼み事を囁く。

そう、「悪魔のささやき」のように・・・・

デイジー：「アグナスさん、ここにいるの飽きたからさぁ・・・ どーんと「花火」打ち上げてく・れ・な・い？」

アグナス：『いいだろう。”アンドラス”《コイツ》の本気、如何なモノか試してみたくてな』

”アンドラス”のコンソールを操作し始めるアグナス。

尚も更に浮遊する”アンドラス”。そして、浮遊が止まり、空中で静止した。

—胸部装甲上下展開

—リアクター・多機能武装システム間への回路連結完了

—エイハブ粒子供給開始・・・ 正常

―リアクター出力正常
イーサン：「何が始まろうとしてるんだ？」
ドゥオーン!!
強力な重力波で、監獄一帯が押し潰されそうな状態に。
デイジー：「アグナスさん、まだなの!?」
アグナス：『急かすな！あと少しだ・・・　これで「忌々しき鎖」から、解き放たれよう！さぁ”アンドラス”よ！オレに示すがいい!!そして挙げるのだ・・・　反逆の・・・　狼煙をッッ！』

―エイハブ粒子臨界点まで膨張
―暴発抑止装置解除
―自動照準作動
―阿頼耶識システムによる姿勢制御・・・　誤差無し）
ターゲット・・・　ロックオン!!
”アンドラス”胸部・ガバッと開かれた「口」の内部に、紫色の光の粒子が収束されていく。同時に周辺の空気も吸収されていく。
遊軍隊長：「イーサン様、巨人の胴体に光が収束されております！」

遊軍副長：「あの巨人、「我々に向かって何かしよう」と思われますが？」
イーサン：「警戒を厳にせよ！（あの光は一体??）」
その光は、「恵みの光」ではなく、全てを奪い、刈り取る「破壊の光」だった…
アグナス：『受けるがいい……　デーモン・ブラスト!!』
グイーン……　ズドオオオン!!
粒子と空気が、胴体中央に圧縮され……
凄まじい勢いでビーム砲が放たれた。
高圧縮エイハブ粒子光線砲・「デーモン・ブラスト」だ。
デーモン・ブラスト、タルタロス大監獄に命中、そして……
ドガァァァン!!!
火山が爆発するかの如き勢いで大爆発し、大監獄をチリと化した。
時同じく……
ドガァァァン!!!

エルヴィン：「この爆発の方向は…　（!!）マズイ、急がねば!!」
焦燥感に駆られたエルヴィンは、馬を急がせた……
エルヴィン：「（生きててくれ、イーサン。それまで…　持ちこたえてくれよッッ!!）」

Ｃｈａｐｔｅｒ―６：タルタロス消滅

エルヴィン到着。

時既に遅し。

エルヴィン：「おいッッ！大丈夫か？」

警備兵Ａ：「エ、エルヴィン様・・・　申し訳・・・　ございませんッッ！（既に虫の息状態）」

エルヴィン：「何があったと云うのか？」

警備兵Ｂ：「デイジー・パラケルスが脱獄された模様、しかし・・・　彼女の一味が・・・・・・妙な巨人を召喚、事態は最悪の状況へと向かって・・・　ガハッ（血を吐く）」

エルヴィン：「しっかりしろ！無理に喋るんじゃない！後で回復薬やるから・・・　それより弟・・・　イーサンはどうした？」

警備兵Ｃ：「そ、それが・・・・・・」

警備兵が恐る恐る指差したその先には・・・・・・

『!!』

黒い巨人の剣圧で吹き飛ばしたガレキを喰らい、瀕死の重症を負った、イーサンの姿があった。

下馬し、イーサンのもとへと向かう。

エルヴィン：「イーサン！しっかりしろ!!イーサン！」

イーサン：「に…　兄さん…　ダニエル…　兄さん…　なの？」
イーサンは瀕死の重症、喋るのもやっとの状態。
エルヴィン：「そうだ、俺だ!!しっかりするんだ!!」
イーサン：「もう…　無理かも…　しれないし…（立ち上がり、剣を取りにいこうとする。）ウッ!!」
エルヴィン：「無茶なするな、いいから休め!!」
イーサン：「いいんだ……　ここは…　ボクが…　まも…　るん…　だッッ」
立ち上がっては倒れ、立ち上がっては倒れ、繰り返しながら剣を取りに行く。イーサンの足下には、赤く滴り落ちる「ナニか」が、足跡のように続いていた。
エルヴィンは、その「ナニか」の正体は理解していた。
そして、実弟に対し「無茶するな、いいから休め！」と声をかけた理由も……
エルヴィンは、弟のもとまで駆け寄り、抱えた。
エルヴィン：「イーサン！もういいから一旦退け！後は俺がやるから…」
イーサン：「もう…　いいんだよ！」
エルヴィン：「何でだよ！」
イーサン：「兄さんに…　辛い思いさせたくないから…」

涙を流す二人。そして……

エルヴィン：「ここで、お前を喪いたくないんだ！まだ気にしているのかよ？」

イーサン：「気には…　して…　ないよ。でも大丈夫。ボクは…　いつでも兄さんと一緒だから……　また…　いつか…『どこかで会える』時が…　来るから……　兄さん…　また…　あの時の……　つ……　づ……　き……　をッ……」

エルヴィンの腕の中で、イーサンは息絶えた。

エルヴィン：「嘘だろ……　嘘だろ？　イーサン……　イーサン……　もっと早く気づいていれば……　ウオオオオッッ！」

事切れた弟を抱えつつ、ただ慟哭するしかなかった。

そこに……

デイジー：「あはは、まだ足りないんじゃない？アンコール求めるなら、もう少し観客連れて来た方がいいんじゃない？」

エルヴィン：「（泣きながら）貴様か!!大監獄を吹き飛ばし、そしてッッ…　実の弟を手に掛けたのはッッ！」

デイジー：「じゃあ、さっきまで抗ったの、アナタの弟さんなの？」

エルヴィン：「貴様がデイジーか？ジュリアス様の命により、貴様を再び捉える!!」

デイジー：「それはムダだよ～ん♪」

”アンドラス”の掌の上にいるデイジーが、左手を上げると、後ろにブラックホールみたいな次元の穴が空いた。
デイジー：「アンタ達なんかに、二度と捕まるもんですか！
捕まえたきゃ、ここまで追って来なさいよォ～だ、じゃあね！」
穴の中に、異形の巨人が2体、エルヴィンを上から睨み付けるように見ている。
デイジー：「アグナスさん、何ボーッとしてるの、行くよ!!」
エルヴィン：「「アグナス」だと!?お前、裏切ったのか？おい、何とか言えよ!!」
アグナス：「……」
”アンドラス”が、穴の中に吸い込まれるように消え、同時に穴も消滅した。
エルヴィン：「アグナス… お前……」
更地と化した監獄の中心で、ただ呆然としているエルヴィンであった……。
Ｃｈａｐｔｅｒ―７：反撃開始
天界のとある高名な術者の屋敷に赴いたエルヴィン。過日のデイジー脱獄の件について話していた。
エルヴィン：やはり、「予見したとおり」の惨事になってしまったのか、エヴァンス」
エヴァンス：「そうだね… 予見した、と云うより、それ以上の大惨事になってしまったようだ… 「イヤな予感が的中してしまったようだ…」とジュリアス様が言ってた

よ」

陰陽師風な装束にネイビーの長髪に翡翠色の目をした少年術者、エヴァンス・イルバーンが、頭を抱えながらエルヴィンに言った。

エヴァンス：「しかもデイジー一味、「禁断の術」を使って逃亡したらしいよ」

エルヴィン：「「禁断の術」とは一体？」

一呼吸置いて、エヴァンスはこう答えた。

エヴァンス：「「次元移動」だよ」

エルヴィン：「次元、移動？」

エヴァンス：「そう！別の世界、別の次元に移動する術、まぁ「タイムワープ」と云えば分かるでしょ？」

エルヴィン：「お、おぅ…」

エヴァンス：「更に、別の次元からそれぞれ異なる物体や巨人を呼び出し、融合させる術も使ったようだね。多分デイジーの脱獄は、何かの「予兆」かもしれないね」

エルヴィン：「予兆？とは云え、やつらは何処まで逃げたんだ？」

エヴァンス：「いま調べているけど、う～ん……　あっ！やっと見付けた！どうやら……」

エルヴィン：「どこなんだ？」

エヴァンス：「どうやら……「太陽系」だよ。しかも「別の次元」のね」
エルヴィン：「「太陽系」？……奴らの逃亡先は、分かった。
しかし、あいつらに太刀打ちするにはどうすれば？」
悩むエルヴィン。しかし、エヴァンスの頭の中で、「答え」は既に出ていた。
エヴァンス：「君に良いものをあげるよ、ハッ!!」
（イメージBGM：ターンAターン／西城秀樹↑フルコーラス、慎んで哀悼の意を表します、RIPですm（＿＿）m）

すると、赤色の魔方陣が現れ、赤い炎の柱が湧き出た。
そして柱の中から、赤い鳥のような鉄の鳥が姿を現した。
エルヴィン：「これは一体？」
エヴァンス：「奴らの術を真似て、君にぴったりの「機体」、あいつらから奪ってきたから、君にあげる」
そう云うと、エヴァンスの右手から光の球を打ち出した。
光の球はエルヴィンを包み、赤い鳥に載せはじめた。
既に「コクピット」に座っていたエルヴィン。エヴァンスに話し掛ける。
エルヴィン：『何やら見慣れぬ機械が目の前にあるんだが……コイツをどう動かせ

ばいい？』

エヴァンス：「真ん中の画面に手を振れてみてよ。「起動」するから」

エヴァンスの指示通りに、コクピット正面の「メインコンソール」画面にタッチすると……

???：「システム起動。メインユーザー認識を確認。メインユーザー：ダニエル＝グレン・エルヴィン。ユーザー認識完了」

エルヴィン：『エヴァンス、何か画面から声が聞こえたが、何者だコイツは??』

エヴァンス：ごめん、召喚と錬成ついでに、君の為に、執事的な役割を為すＡＩを搭載したんだ。名前は「エルピス」、「希望」を意味するギリシャ語から付けてみたんだ」

エルヴィン：「「エルピス」か……。よろしく頼むぞ！」

エルピス：「こちらこそ、ご主人様」

エルヴィン：「何が何だか分からないが…　この機体を起動させてくれ！」

エルピス：「かしこまりました。

―機体起動シークエンス移行。

―『イオン熱核融合ドライブ』並びに『ＡＳＷ―Ｇ―３７：「ガンダム・フェニックス」リアクタードライブ』起動。

―『ミノフスキー』『エイハブ』両粒子、双方のリアクター内、正常数値を維持。

―『デュアルリアクタードライブ』起動完了、機体を起動します。

ご主人様、ちなみにこの機体は、エヴァンス様が「異世界」から「取り寄せた」機体：「ウイングガンダムゼロ炎」に、「ＡＳＷ―Ｇ―３７ガンダム・フェニックスのエイハブリアクター」を融合させた「ＭＳ《モビルスーツ》」です」

エルヴィン：「モビル、スーツ？ますます分からなくなって来たが……『エヴァンス、どうすれば良いのかさっぱり分からん！』」

エヴァンス：「大丈夫!!「既に操作方法を知ってる」ように「術」を掛けたから！」

と、エヴァンスが言った。その返事を受けてエルヴィンは、一度目をつぶり黙想。そして目を開けながらつぶやいた。

エルヴィン：「やはり・・・「俺はコイツの動かし方を知っている」状態になってる。エルピス、「あの女狐共」が逃げた先は、把握してるか？」

エルピス：「はい、既に把握しております。逃亡先の座標値、既に固定済みです」

エルヴィン：「導けるか？」

エルピス：「可能です。ですが、「次元を越える」為、かなりの高出力を要します。相当のリスクを背負う事になりますが・・・」

エヴァンス：『心配はないよ！』

エルピス：「エヴァンス様、何か策でも？」

エヴァンス：『この「機体」の力を使ってみるとか・・・　そんじゃ、召、喚ッッ！』
右腕を上に突き上げたと同時に、白銀の光の柱が現れ、エヴァンスが指を鳴らしたと同時に、中から１２枚の羽を持ったＭＳが姿を現した。同時にエヴァンスを取り込み、融合した。
エルヴィン：「お前も、ＭＳを取り寄せたのか？」
エヴァンス：『そうだよ～！万が一の為に、デイジーの真似して、異世界からＭＳを取り寄せたんだ。ちなみにぼくが乗ってるＭＳは、「ビルドストライクバーニングコスモス（長い為、以下ＢＳＢＣ）」と云うヤツなんだ』
エヴァンスが取り寄せたが浮遊した。
エヴァンス：『ダニエル、ゼロ炎起動出来た？』
エルヴィン：「どうやら、完了してるようだ。飛ぶぞ、エルピス！」
エルピス：「了解、ウイングガンダムゼロ炎、離陸します」
鳥の姿もとい、バードモードのＷゼロ炎が離陸、ＢＳＢＣのいる位置まで到達した。
エヴァンス：『着いたようだね、それじゃ行くよ。クロノ・アクロス、作動！』
ＢＳＢＣが両腕を前に構えると、背部の１２枚の羽から光が放たれ、エルヴィンを載せた炎の鳥に注ぎ込まれる。
エヴァンス：『エルヴィン、大丈夫だよね？多分ツラい戦いになるかもしれないけど、

ぼくは信じてるから、キミが無事に帰ってくる事を。道中…　気をつけてね！』

エルヴィン：『あぁ……　行ってくる!!』

ＢＳＢＣ　が両腕を真横に広げたと同時にＷゼロ炎が射出、黄金の光が、音速の壁を超えるように消えた。

エヴァンス：『ふう、無事に成功したようだね……　さて、「取り寄せた駒」を、太陽系に射出させようか。』

……

……

あ……

肝心な事、エルヴィンに伝えるの忘れたｏｒｚ」

Ｃｈａｐｔｅｒ―ＦＩＮＡＬ：Ｔｅａｒ―ｒａｉｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｏｒｐｈａｎ

（たいへん長らくお待たせ致しました、鉄血世界と「遭遇」します。イメージＢＧＭ：ＲＡＩＳＥ　ＹＯＵＲ　ＦＬＡＧ／ＭＡＮ　ＷＩＴＨ　Ａ　ＭＩＳＳＩＯＮ（フルコーラ

ス))

舞台は変わり、Ｐ．Ｄ．（Ｐｏｓｔ　Ｄｉｓａｓｔｅｒ）３２３年のとある夜。

火星の夜空に、流星雨が降ってきた。

時同じく、地球、月、デブリ帯、それぞれのコロニー圏の夜空を、流星の雨が、暗い空を彩った。

厄祭戦終結から約３２０年、「平和」な世界の夜空を彩った一夜限りの天体ショー。

後に「孤児の涙雨：Ｔｅａｒ―ｒａｉｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｏｒｐｈａｎ」と名付けられる事となる事は、この時点では誰も知らない。

この天体ショーは、「ただの天体ショー」ではないのだ。

それゆえに、ただの「流星雨」ではない。

実は、この「流星雨」には、「Ｐ．Ｄ．　の世界軸に存在してはならないモノ」が紛れ込んでいたのだ。中身も誰も知らない、いや知らなくてもいい。

（むしろ、「原作」のスピードを速めかねる事態にまで発展しそう。モビルアーマーがさぁ、モビルアーマーがさぁ↑やかましいわ（。。；）＼（――；））

時同じく……

マルバ：「ヤケにキレイな流星雨じゃねぇか…（と、ウイスキーの水割りを飲み、空を見上げる）」

ギャラルホルン火星支部・第3基地

クランク：「アイン、見えるか？この流星雨を……」

アイン：「はい、クランクさん。美しくて、言葉が出ません」

クランク：「まるで「孤児達が流した涙」そのものだな。しかし、私は「歪みきった正義」のもとで、ギャラルホルンが本来目指すべき「正義」の実像、描き直せるかどうか不安でならん。しかし隊長が、俺の教え子のオーリス、とはな……」

アイン：「クランクさん、なにゆえコーラル支部長に話をしなかったんですか？クランクさんなら、支部長と上手く話せば、隊長交代の件なら調整が利くかと…」

クランク：「「数週間後に監察局が、定期監査で、地球から直々に派遣される」との事だ。こんな辺境の星に、だ」

アイン：「なぜ今回、本部からわざわざ監察局が？」

クランク：「私には分かるんだ、なぜ監察局がこのタイミングで来るのか、そして…（その裏に隠された、とある民間組織と結託して得た不正とその報酬、火星支部に隠された「濡れ衣」をな……「ソレ」を消そうと躍起になって、コーラルめ、俺みたいな「マトモなヤツ」を蜥蜴の尻尾切りに宛がうとはな……）」

アイン：「クランクさん？どうしました？」

クランク：「いや、何でもない」

とあるオフィスで……

ノブリス：「ええ、分かりました。……　恐らく、「ご令嬢」が何かしら動き出すでしょうねぇ？……　二十歳にも満たぬ歳で、「ノアキスの７月会議《あの会議》」を成功させたものですからねぇ、「大手柄」でしたから……　将来性を見据えた上で「投資」させて頂きましたから、当時の協賛者として、たいへん喜ばしい限りです。……　いえいえ、とんでもございません。「先生」もお互いに頑張りましょうね。クリュセの治安正常化の為に、何か手伝える事があれば、このノブリス・ゴルドン、力になれればと……仰る通りです、おまかせ下さい！……　失礼致します。（ガチャッ）首尾はどうかね？」

ノブリス配下の殺し屋：「ゴルドン先生の「予想通り」、『「クーデリア・藍那・バーンスタイン」が動き出す』らしいですぜ」

ノブリス：「そうか……　バーンスタインの家に「送ったスパイ」に伝えろ、『引き続きクーデリア・藍那・バーンスタインの動向を随時監視せよ。』とな。

『革命の乙女』……　世の中を知らぬ純粋無垢な少女は存分に「利用できる《使える》！」その為に投資した「までの事よ」。ふふふ……」

バーンスタイン邸・クーデリアの自室にて

クーデリア：「綺麗な夜空……」
フミタン：「お嬢様、まだ起きていらしたのですか？」
クーデリア：「フミタン？どうしましたか？」
フミタン：「もうおやすみになられたか、と思いまして……」
クーデリア：「フミタン、私…　決めました！」
フミタン：「お嬢様？何を「決断」されたのですか？」
クーデリア：「明日の昼頃……　ＣＧＳ（クリュセ・ガード・セキュリティ）に向かいます！」
ＣＧＳ（クリュセ・ガード・セキュリティ）
???：「キレイな流星雨だなぁ……　そう言えば、三番組の子たちも夜勤だったよなぁ……　あ、「俺の部屋」入ってねぇか心配になってきたから、「動力室」戻るか。（あれ？さっきまで「頭がガンガンするくらい」痛かったのに、流星雨見てた時、痛くなかったのに……　また「疼き」そうだわ…）」
木星圏・歳星
ジャスレイ：「親父、今日の定例会お疲れ様でした。流石は親父、テイワズをまとめあげる才覚はあるだけの事よ」
マクマード：「ワシを高く評価してんのかい、ジャスレイ。（愛刀を抜刀し、眺めなが

ら）てんでばらばらだった連中を拾って面倒見て、ここまでのし上がって来たからなぁ・・・・」

ジャスレイ：「何言ってんですかい、親父。うちら幹部は、親父に忠誠誓い、盃交わした仲だぜ。親父の侠《おとこ》の器のデカさにガン垂れて、シャバの連中から『圏外圏イチコワい男』の二つ名が轟き渡るくらいだからさぁ・・」

マクマード：「そうやっておだてても、何も出て来ねぇよ」

ジャスレイ：「親父？」

マクマード：「そろそろ若いのに、チョイと試してぇ事があってなァ・・・・・・」

ジャスレイ：「あの白いスーツのやさニーチャンですかい？」

マクマード：「察しがいいじゃねぇか、ジャスレイ。タービンズに、ちょっとな・・・・・・」

場所と立場が違えど、美しい天体ショーを眺めていた。

それが・・・・ 新たなる変革をもたらす、「駒」となる存在である事を、まだ誰も知らない・・・・・・

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：Ｒｏｇｕｅ ”Ｓｈｉｎ”

完

Ｃｏｎｔｉｎｕｅ ｔｏ Ｎｅｘｔ ｌｏｇ・・・・・・

Ｉｎｔｅｒｍｉｓｓｉｏｎｌ／登場人物紹介（随時更新）

【異世界】

ダニエル＝グレン・エルヴィン

異名：「深紅の不死鳥」

デイジーを捕まえる為、鉄血世界にやって来た剣士。元々いた世界では「剣の達人にして騎士団長だった」との事。

エヴァンスから託されたウイングガンダムゼロ炎を駆り、鉄華団と行動を共にする。

イメージモデル：「仮面ライダー鎧武／ＧＡＩＭ」の駆紋戒斗／仮面ライダーバロン／小林豊氏（Ｂｏｙｚ　２　Ｍｅｎ）

エルピス

ウイングガンダムゼロ炎に搭載されたコンシェルジュＡＩ。

機体の状態や戦況把握等を引き受ける。

イメージボイス：増谷康紀氏（関羽／魏延／真・三國無双シリーズナレーター）

イーサン＝エルヴィン

ダニエルの実の弟。デイジー一味の襲撃に会い、兄の腕の中で息絶える。

アグナス・ハスター
デイジー一味に加担しているとされる剣士。ダニエルとは「面識がある」との事だが、イーサンを手にかけ、更に大監獄を壊滅。何故加担しているか不明。
デイジー・パラケルス
「女狐」の異名で恐れられている女囚。錬金術・妖術を使う。
「ある目的」の為に鉄血世界に逃走。
イメージモデル：「無双ＯＲＯＣＨＩ」シリーズの妲己（声もそのまま）
（名前由来：「デイジー：Ｄａｉｓｙ」は、妲己の中国語読みである「Ｄａ　Ｊｉ」をもじってみた。「パラケルス」は、錬金術師的要素を取り入れてみた。）

セルバンテ＝ヨグ・バルボッサ
デイジー一味の参謀格。魔術を使う。
時折、鼻にかけるような言い草をするとかしないとか・・・
デイジーを高く評価しているのか、していないのか本心は不明。
イメージモデル：「パイレーツオブカリビアン」のバルボッサ船長
イメージボイス：藤原啓二氏（「戦国ＢＡＳＡＲＡ」シリーズの松永久秀風）

エヴァンス・イルバーン
ダニエルたちの仲間で、法術師。錬成術など高度な術が得意。後述のジュリアスの部下。
イメージモデル：シン・アスカにリュウタロスを足して２で割った感じ
ジュリアス・アウグスト
エルヴィン・エヴァンスの主。
イメージモデル：『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の”冥王”シルバーズ・レイリー

【火星】
ＣＧＳ／鉄華団
エドワーズ・アーケイ
異名：「煉獄帰りの軍神」
もとＣＧＳ社長・マルバ・アーケイの息子。
三番組教官ではあるが、もと二番組副隊長。
子供の時ＭＷに轢かれる事故に遇うも生還。その際、頭に外部情報チップを埋設される。（その後遺症で、良く頭痛に苛まれるのが悩み。）
ＭＷ・ＭＳ　共にそつなく操作出来るが、「謎の送り主」から届けられたＧ―３ガン

ダムを駆る。
教練で三日月を追い詰めたり、ＧＨの武官級と対等に渡り合える程の錬度を持つ。
（反面、ビームサーベルを使いたがる為、良くダンジに怒られているとかいないとか・・・）
イメージモデル：「ＢＲＥＡＣＨ」の黒崎一護と「戦国ＢＡＳＡＲＡ」シリーズの前田慶次を足して２で割ったような感じ。
ダンジ・エイレイ
原典第１期では、ＧＨオーリス隊によるＣＧＳ夜襲の際、ＭＷごと蹴飛ばされて死亡。
しかし、何者かの手によりメディカルベッドに入れられ、九死に一生を得る。お真面目な性格補正と、ＭＳのメンテナンスもこなせる技術を「修得」して復活。エドワーズの弟子でもあり、突っ込み役。（「銀魂」のメガネポジション）
エドワーズ：「近々、俺のＧ―３乗せてあげようかな～♪そんでもってぇ～「ビームサーベル抜かせる」癖をｎ・・・・・・（　？▽？・）」
ダンジ：「きょーかん？（ーー；）まーた何か変なコト考えてませんか？（ーー；）」
ギャラルホルン（ＧＨ）
アルダ
ＧＨアーレス隊所属の武官。階級は三佐。
スティーブ・ヤン

異名：「木星の青龍」

ＧＨ木星支部所属の武官。階級は一尉。タービンズ専属の教官。広島弁全開の武闘派。愛用機はシュヴァルベ・グレイズ（だが、とある戦闘で大破寸前の所までボコボコにされる。只今整備中ｏｒｚ）。外部情報チップ埋設手術被験者で、テイワズ内のとある組織から取り上げた（本人曰く「アゴ割って懲らしめた後、頂いた」）ウイングガンダムを駆る。

イメージモデル：「新機動戦記ガンダムＷ」の張五飛

タービンズ

ステイシー・タービン

サラ・タービン

双子。スティーブが手塩に育てた弟子にして、斬り込み役。

アスカ・タービン

サラ・タービン

スティーブの弟子。主にアジーのフォローに回る事が多い。

ＬＯＧ―「侵」
第１話：煉獄帰りの軍神

Ｌｏｇ―「侵」
第１話
Ｃｈａｐｔｅｒ―１：火星の夜の夢
Ｐ．Ｄ．　３１５年の夏のある日の事、一人の「少年」が事故に巻き込まれ、瀕死の重症を負った。
学校は、夏期休暇中。家路へ向かう帰路、モビルワーカー（以降ＭＷ）に轢かれ、頭を強く地面に打ちつけられ意識を失った、と目撃者が言う。
その後、「少年」は、クリュセ市内にある『ノアキス記念総合病院』に搬送された。
そこに、一人の中年男性が、病院に駆け込んだ。
少年の父親にして、民間警備会社ＣＧＳ：クリュセ・ガード・セキュリティの社長・マルバ・アーケイだ。
マルバ：「先生、息子は……　エドワーズの容体は？」
医師：「アーケイさん、落ち着いて下さい。息子さんのエドワーズさんですが……

頭部に目立った外傷は無かったのですが……　意識がまだ戻らぬ状況です。」
マルバ：「そんな……　先生！何とかして下さい!!」
医師：「最善は尽くしますので、待合室で御待ちください」
医師はマルバを上手く宥め、吸い込まれるように救急治療室へと入っていった。マルバは、お願いします、と云いながら深々と頭を下げた。
俺の大事な一人息子だ、ここで喪う訳には、と思いつつ、待合室の椅子に座り、天を仰いだ。

「少年」：エドワーズ・アーケイの『意識』の中では……
エドワーズ：何か目の前が真っ暗だけと……
天の声：『君は、MWに轢かれてしまい、意識不明の重体の怪我を負ってしまったんだ』
エドワーズ：「怪我?俺は、死ぬのかよ?」
天の声：『そんなことはない！ぼくが君を「死なせたりしない」から、安心して。さあ、目を閉じてもいいかな?』
と、「天の声」の主の指示通り、エドワーズは目をつぶり始めた。
エドワーズ：「(何かが通り抜けてくような気が…　それに、何だ?頭に「何かが入ってるような異物感」が……)目を開けて良いかな?」

天の声：『いいよ』

エドワーズは、目を開けた。

エドワーズ：「はっ!!（……　また「同じ夢」か？　何か頭が痛む……　やはり「チップ」の副作用か？）」

（イメージＢＧＭ：　オリジナルサントラ１より「Ａｎ　Ｏｒｐｈａｎ，ｓ　Ｓｏｒｒｏｗ　」）

エドワーズは「夢」を見ていた。それを「夢」と認識した方が良いのか悪いのか、現実味を帯びた、過去の出来事を昇華させたような「夢」を……

ＣＧＳの仮眠室、エドワーズは夜勤中である。その間、一緒に当直勤務をしている一軍のトド・ミルコネンは、施設内の巡回に出ている。

トドが巡回から戻ってきた。

トド：「エド～、巡回したが、何もなかったぞ～」

エドワーズ：「お疲れ様です、ミルコネンさん」

トド：「次は、「坊っちゃん」の番ですぜ」

エドワーズ：「ありがとうございます」

トド：「しっかし、いいんですかい？かつての『二番組』の生き残りである坊っちゃんが、今や俺ら一軍の末席、そんな地位じゃ、納得いかんでしょ～？」

エドワーズ：「そんな事は無いと思いますけど？」
トド：「いやいやいやいや、坊っちゃんには「次期社長の椅子」が約束されてるんですぜ？まさか……「まだ気にしてる」んですかい？ササイとハエダの事で??」
エドワーズ：「気にはしてませんよ。ただ、あの二人、親父を上手く利用して、俺の意見を通さず、あいつらの言い分を素直に受け入れるしかない状態に。事あるごとに、俺か三番組の子やヒューマンデブリに「鬱憤晴らし」だ、マッチポンプ的な感じで八つ当たりだとか何とかやって、俺はそんな体質を望んでないのに……」
トド：「確かに……「ガキ共見捨てたくない」と云う想いが積もりに積もって、「三番組教官」と云う要職に就いた、訳ですよね？」
エドワーズ：「ああ。「一軍がもし倒れた時の為の最後の切り札」、阿頼耶識を施したあの子たちなら、ＣＧＳを守りきれるだろう、と思ってます」
トド：「さすが坊っちゃん。足元にも及びませんやい」
話が終わると、エドワーズは巡回に、トドは仮眠休憩をとった。
エドワーズはまだ気付いていなかった。アイツ（トド）が、影でこそこそと工作している事に……
その工作に気付かず、朝を迎えた。

Ｃｈａｐｔｅｒ―２：お届け物

（イメージＢＧＭ　：オリジナルサントラ1より「Ｂａｒｒｅｎ　Ｌａｎｄ　」）

夜勤・当直明けの朝、エドワーズは自分の部屋で寝ていた。彼の部屋は、動力室、もとい「ＡＳＷ―Ｇ―０８　ガンダム・バルバトス」が係留されている「格納庫」の脇に彼の部屋、もとい生活拠点がある。

（社長で実の父であるマルバから使って良い、との御許しを頂いている。）

エドワーズは、タブレット端末を立ち上げ、メールを確認した。

『エドワーズ・アーケイ様に、お届け物がある』との文言が、書いてあるメールがあった。

誰だよ、こんな辺境の地に？そんでもってこの俺に、荷物を贈る物好きは何処のどいつだよ、とさえ思った。

エドワーズ：「さて、ちょっくら取りに行くか」

エドワーズは、夜勤明けの体に鞭を打ちながら、地上に出た。

天気は晴れ。テラフォーミングされた火星特有の穏やかな風が吹いている。

ＣＧＳ基地の管制塔の真下に、「贈り物」が届いていた。

２０ｍくらいの縦長のトレーラーが止まっているではないか。

荷台の上には、丁寧にカバーが敷いてある。砂漠迷彩柄のカバーらしい。

エドワーズ：「（メールで云ってた「お届け物」って、この事なのか？しかし、ハエダやササイにばれたらなぁ……）おっ、ちょうど良いところに…　お～いダンジ君にビ

スケット～、ちよっといいかい？」
　エドワーズが三番組の少年兵を呼んだ。三番組の参謀格のビスケット・グリフォンと、年少組のダンジ・エイレイだ。
　エドワーズ：「悪ィけどこのトレーラー、ＭＷで引っ張ってくれないかなぁ？」
　ビスケット：「このトレーラーを、ＭＷで・・・・　大丈夫ですか？当直明けなのに、良いんですか？」
　エドワーズ：「まぁ確かにそうだが・・・・・・　ビスケット、君～・・・・・・　トレーラー運転出来たっけ？」
　ビスケットが「トレーラー」を眺めながら言った。
　ビスケット：「動かせる事は動かせますけど・・・・　教官、どこに入れた方が良いですか？」
　エドワーズ：「秘密の格納庫」に入れてほしいんだわ。「上役サマ」に嗅ぎ付けられたらマジ面倒だからさぁ・・・・・　とにかく、ビスケットはトレーラーの運転頼むわ」
　ビスケット：「はい！」
　エドワーズ：「そんで、ダンジ君は、俺をＭＷに乗っけて貰って、エスコート頼むね、ナビは俺がやるから。」
　ダンジ：「うっす！」

さらっと三番組の二人に指示を出し、ダンジが駆るＭＷ先導のもと、ビスケットが大型トレーラーを運転し、「秘密の格納庫」に移動、滞りなく搬入作業が終わった。
エドワーズ：「ビスケットにダンジ君、ありがとね～（＊?･▽?）ノ」
ビスケットとダンジを見送った後、擬装ハッチを閉め、トレーラーの「積み荷」を開けてみた。
勢い良くカバーを外した。
ばさッッ！
エドワーズ：「何だ･･･　これは??」
暫く絶句した。
トレーラーの「積み荷」、それは･････
見るからに１８ｍくらいあるねずみ色の巨人が、トレーラーの上に横たわっていた。外見は確かにねずみ色だが、左腕と思われる位置に灰色の十字架をあしらったシールドがマウントされており、背中あたりに、突き出た２本の棒状の構造物が着いている。エドワーズは、左腕のシールドに書いてあるロゴを観た。
エドワーズ：『Ｇ―３』･･　『Ｇ―Ｕ―Ｎ―Ｄ―Ａ―Ｍ』？何だこの機体？」
頭の中に、大量の疑問符が浮かびまくっているエドワーズは、トレーラーのはしごに手を伸ばし、登り始めた。あれよあれよと、巨人の左足によじ登り、足元に注意を払い

ながら、胸元まで歩を進めた。
エドワーズ：「（この機体・・・「２本角」なのかよ!?　動力室の「アレ」とは何か似てるような、似てないような・・・　何だコイツは?）」
ねずみ色の頭と２本角のようなツインアンテナに、黄色のツインアイ、さらにグレーのクチバシのような構造物を眺めながら、エドワーズは首をかしげた。すると・・・
グィィィン・・・
エドワーズの背中側、巨人の胸部付近から音がした。何かが開いた音だ。おそるおそる近付くエドワーズ。
そこには、誰も座っていない操縦席があった。ＭＷの操縦席と酷似している部分はあるが、「阿頼耶識」と接続する端子がない事に気付いた。
取りあえず座ってみようか、と云う感覚に陥り、巨人の操縦席に座ってみた。
エドワーズ：「（何か座り心地は良いな、こいつは。いつものように使っているＭＷや、稀に鹵獲する「ギャラルホルン製」の「モビルスーツ（以降ＭＳ）」とは、コクピットのインテリアが何か違うような・・・）やべ、何か眠くなってきた・・・」
エドワーズは座りながら眠りについた、コクピットで寝落ちである。
寝落ちしているのを他所に、操縦席が動き、「ハッチ」が閉まった。

―スタートアップシークエンス開始
―操縦者認識：エドワーズ・アーケイ…　認識完了
―教育型ＣＰＵ、埋設マイクロチップとの相互リンク開始…　相互リンク正常に完了
―熱核反応炉正常作動…　異常無し
―各スラスター・駆動系統…　異常無し
―推進剤残量：ＦＵＬＬ
―各種武装：使用可能

―ＲＸ―７８―３
―『Ｇ―３　ＧＵＮＤＡＭ』システム起動。
同時に、胸のダクトから排気音と、ツインアイに光が灯る「ギュオーン」と云う音がした。
エドワーズは……
死んだように…

爆睡中!!（ちゃんと呼吸してますし、睡眠時無呼吸症候群ではないので、アシカラズｍ（＿＿）ｍ）

Ｃｈａｐｔｅｒ―３：灰色の巨人、赤い大地に立つ!!そして邂逅

エドワーズがスヤスヤと眠りに着いた頃、地上では、ギャラルホルンのＭＳ・「グレイズ」３機、同ＭＷ隊数機がＣＧＳを襲撃。三番組が迎え撃つも、ＭＷ数機大破・年少組数名死亡・更には、一軍の御一行が、マルバと一緒に撤退する「作戦」で、上手く逃げ出す「じり貧」な事態が発生。三番組劣勢か、と思いきや、動力室に繋がれていたガンダム・バルバトスを起動、オルガが駆るＭＷを襲撃する、オーリス・ステンジャが駆る指揮官機仕様のグレイズを、メイス殴打・パイルバンカー一刺しで撃墜。その反動を受けオーリスは死亡。撤退を開始したＧＨサイドのＭＷ　隊を蹂躙、クランク・アイン両名が駆るグレイズ２機を追い込むも、起動したばかりのバルバトスが不調な状態である事に気付き、やむなく撤退、追い討ちを試みるも、バルバトスは「ガス欠」状態を起こし、且つ「パイロット気絶」の為機能停止、三番組「だけ」でＣＧＳは守りきれた。

地上の騒乱が静まって数時間後、エドワーズが起きた。

エドワーズ：「ふわぁぁ……　結局寝ちまったよ……　って、勝手に起動してるし!?何か頭ん中、ざわついてるし、ナニナニ…（コンソールを見ながら）コイツ、「G―3ガンダム（以降G―3）」って言うのかぁ～…　グレイズと同じ「MS」かぁ～」

コントロールグリップに手を伸ばすと……

グオオッ……

（イメージBGM：機動戦士ガンダムより「ガンダム大地に立つ」）

エドワーズ：『コイツ、動くぞ!?』

スムーズに立ち上がり、歩行を開始。隠しハッチを開け、火星の大地に……

「存在してはならない」ガンダムが立った！

ピピッ！

外に出て直ぐに、センサーが反応した。

エドワーズ：「むむっ？『11時方向にMS反応あり』？11時方向??　CGSの基地がある方向じゃねーかよ!?何があったかどうかは知らんが…　取りあえず向かうか。ついでにセンサーに出た「MS」も気になるし…　行くか」

アクセルを踏んで、バーニアに火が灯り、エドワーズが駆るG―3ガンダムは、CGS基地へと向かった。

一方その頃、CGS基地では、先のギャラルホルン（以降GH）の夜襲の事後処理を

始めていた。ＭＷの残骸を回収し、年少兵達が悔し涙を流しながら、拭いていた。
三番組年少兵Ａ：「イリアム…　ダンジ…　何で先に、逝ってしまったんだよォォッ！」
散っていった仲間達に思いを馳せながら、部品を拭いていた。
そんな哀しみを吹き飛ばすかのように、基地へと向かう灰色の巨人の人影と、ゴォォォッと、大気が震えるようなスラスター音が近づいて来た。ある年少兵が、手を止めてその人影を見つめていた。
三番組年少兵Ｂ：「何でまたＧＨがって……　何か違う！　隊長、オルガ隊長～！」
（イメージＢＧＭ：オリジナルサントラ１より「Ｓａｎｄｙ　Ｄｅｓｅｒｔ」）
オルガ：「どうした？またＧＨか？」
三番組年少兵Ｂ：「違います！何か全身灰色で、角を２本生やしたＭＳが、こっちに向かって来てますが…」
年少兵が、オルガに報告しているうちに、灰色のＭＳがＣＧＳ基地に到着。
エドワーズ：「基地に到着、やべッ、年少組たち踏み潰しちまいそうだ！」
慌ててブレーキペダルを踏み、地上施設内、三番組が作業している手前の所で静止、スラスターを逆噴射させエアブレーキをかけた。
「うわっ！」と驚く少年兵達。

ゆっくり着地させ停止。灰色の巨人の胸のハッチが開放され、その中から、三番組の誰もが知ってる、あの人が出てきた。

エドワーズ：「全く、何があったかと思えば・・・・ どうなってんだよ、コレ？」

三番組年少兵たち：「エドワーズ教官だーッ！」

三番組年少兵Ｃ：「教官ー、無事だったんですね！」

驚き、更に歓喜する年少兵たち。ヨッ！と軽く挨拶した後、巨人に備え付けのウインチ式昇降機に足をかけ着地。彼らの元に駆け寄る。施設の奥から、白髪で、褐色肌の成年が出てきた。

オルガ：「エドワーズ教官!?生きてたんですか？」

エドワーズ：「死んで悪いか、オルガ隊長。夜勤明け休みなんだぞ、って、聴いちゃくれないかｏｒｚ　それにしても、すごい有り様だな・・・・ 何があったんだ？」

オルガ：「実は・・・・・ ６時間前に、ＧＨの奴らが夜襲仕掛けて来まして、俺たち三番組だけで応戦してみましたが・・・・」

エドワーズ：「わぁかってるって、みなまで云うな。君らだけで凌げたのは見事な事だよ。それで親父、じゃなくて、社長は？」

オルガ：「社長は、一軍らと一緒にトンズラかましました」

エドワーズ：「はぁぁッ？トンズラだとォッ？（やはり、ハエタとササイの口車に乗っかって、一緒に逃げやがったな？あの２人、親父おだてたり、転がすの上手ェからなぁ…　これがあるから、ＣＧＳの汚点がこの子達まで…）それで、被害状況は？あと、俺がこっち向かう時に見かけたけど…　動力室のアレ、動かしたようだね。それで…乗ってるの、誰？」

オルガ：「被害状況に関しては、ビスケットから聞き出して下さい。そんで…　動力室に繋がってたＭＳに乗ってるのは……　ミカです」

エドワーズ：「三日月君が!?取りあえず、三日月君回収するから、オルガ隊長はそのまま事後処理続けてね！」

オルガ：「分かりました、教官」

エドワーズは、足早に巨人の方へ戻り、乗り込んだ。

オルガ：「それと……　教官!!」

エドワーズ：『どうしたの、オルガ隊長？』

オルガ：「年少組たちが云ってた「灰色のＭＳ」、教官のＭＳ　ですか？一軍の人達に見つかるとヤバくないですかぁ？」

エドワーズ：『大丈夫だって！バレないように上手く立ち回るからさ』

オルガ：「頼んます！」

そう云うと、巨人は猛スピードで立ち去り、三日月らを回収しに行った。

オルガ：「……　ミカが乗ってた「アレ」と云い、教官が乗ってるソレもそうだが……　ビスケット、あの２つ…「ＭＳ」なのか？」

ビスケット：「そ、そうだね…　姿形は違うけど……　ＭＳで、いいんじゃない？」

三日月、もといガンダム・バルバトスと、グレイズ３機がやり合った場所に到着。

（イメージＢＧＭ　：オリジナルサントラ１より「Ｖｕｌｎｅｒａｂｌｅ　Ｓｕｒｆａｃｅ　」）

エドワーズ：「うっわっっ……　見るからにエグいわ、コレ……　（スクラップになった指揮官仕様のグレイズにフォーカスする）見るも無惨な状態に……　それに……　（Ｇ―３ガンダム、左に方向転換。）動力室にあったアレに、三日月君が乗ってるのか？（コンソールに「ＡＳＷ―Ｇ―０８　ＧＵＮＤＡＭ　ＢＡＲＢＡＴＯＳ」と表示が）声かけてみるか？『三日月君、起きてるかい？』（コンソールに「スラスター残量：無し　パイロット生体反応：無し」との情報が……）良く動かせたなぁ、この機体。さては、ナディさんが上手く…　てなワケないか？「ガキの頃、ＭＳ軽くいじった位だ」とか言ってたなぁ…　さて、回収回収♪」

と、メイスを持ったまま「気絶」しているバルバトスを、よっこらせ、と肩に担いで、隠しハッチまで向かった。

エドワーズ：「三日月君・・・　親父からちょろっと聞いたけど、阿頼耶識のオペに三回耐えた唯一のサバイバーだし、三番組のエースだしなぁ・・・　ん？頭の中がざわついて・・・　ナニナニ？「阿頼耶識：ＭＭＩにおけるＭＳの情報量は、ＭＷの約５０倍」くらいするのかぁ・・・　起動時のキックバックがデカい為、場合によっては意識喪失もあり得るか・・・・　ヒューマン・デブリ組のリーダーの昭弘君と一緒に良く筋トレしまくってる姿、良く見掛けたし・・・・　鼻血吹き出すだけで堪えるだけで済ませる、なんて・・・　やっぱ三日月君は凄いよ。

否・・・・・・

『すげェよ、ミカは・・・・・・』

Ｇ―３で、バルバトスの回収を済ませた後、グレイズの残骸をしっかり回収。そこで、バトルアックスをちゃっかりブンドド、自らの武器として押収しちゃいましたとさ♪

Ｃｈａｐｔｅｒ―４：選手交代のお知らせです。三日月君に替わりまして・・・・・・

事後処理が済んだ後、バルバトスは動力室、もといドック入り。ナディ・雪之丞・カッサパの指示のもと、整備作業を開始。一方エドワーズは、Ｇ―３のメンテナンスを始めていた。推進剤の残量は、まだ余裕がある。熱核反応炉スゲーイモノスゲーイ、最ッッ

高だね！と、どこぞのてぇんさい物理学者並みに狂喜していた。
が!!
「腑に落ちない案件」があった。
・頼んでもないのに、G―3を届けた送り主は誰か？
・そして、件の事後処理を済ませて引き上げた後、見たこともないメディカルナノマシンベッドが置いてある。さっきまでなかったのに、誰がこのベッドを送ったのか？
この2点である。
1点目のG―3ガンダムはともかく、2点目のメディカルベッドが気になってしょうがないエドワーズ。
中を覗いてみると・・・・
エドワーズ：「ダンジ君!!何でこの中に？」
メディカルナノマシンベッドのガラス越しに、三番組のダンジが横たわっているではないか。
ダンジ：「エドワーズ・・・ 教官・・・ ですよね？」
（イメージBGM：オリジナルサントラ1より「Ｏａｓｉｓ」）
エドワーズ：「そうだ・・・ 良く帰ってきたな・・・」
ダンジ：「オレ・・・ 気付いたら、この中に入っていたんで・・・「ついさっきまで」MW

乗ってて、ＧＨのＭＳの攻撃にあって…　その後から、意識が飛んで……　覚えて、ないです」

エドワーズ：「阿頼耶識の副作用だな、それは。でも、君が生きてて何よりだ。神様に感謝しないとな」

ダンジ：「そう言えば…　ＣＧＳは、どうなりましたか？」

エドワーズ：「三番組で何とか防げたが…　一軍と親父は逃げ出した。」

ダンジ：「無事で、良かったんですね」

エドワーズ：「体調はどうだい？」

ダンジ：「何か知らないんですけど、体全体の傷みとか無くなって、元気になるような感じがします。」

エドワーズ：「お、おぅ、そう、なのか？（このメディカルベッド、瀕死のヤツでも回復出来るのか？）」

驚きを隠せないエドワーズ。そうこうしてる内に、ダンジは回復。ベッドの蓋が開いた。

さっきトレーラーを運び入れた時の姿のままではないか。

ダンジ：「教官！見てくださいよ！身体がピンピンして、元気になりましたよ！」

エドワーズ：「ソウカー、ゲンキニナッタノカー、ケッコーミチガエッテミエルゾー（

？▽？）」

一軍並みの肉付き具合にまで回復し、復活したダンジ。

「神の御業」とも云うべき力。ただただエドワーズは驚く事しか出来なかった。

エドワーズ：「まぁ良いとして・・・・ダンジ君、Ｇ―３ガンダムの整備、手伝ってくれるかい？」

ダンジ：「ウッス・・・・じゃなかった・・・ハイ、出来ますよ」

エドワーズ：「ソウ・・・・・ほんじゃ、一緒にやろうか？」

ダンジ：「ハイッ！」

確かダンジは年少組、ＭＷの整備とか教えた事ないぞ、とぼやきながら、Ｇ―３の整備を始めた。

エドワーズ：「誰がダンジ君をメディカルベッドに？一体誰が???そんで、ダンジ君、こんなにマジメだったか？」

ダンジ：「きょ～かん!!手が止まってますよ～」

エドワーズ：「あぁ、ゴメン！考え事してた・・・・」

時同じく地上では、三番組が一軍やマルバに対しクーデターを興した。結果、散々エドワーズを目の敵にしたハエダ・グンネルとササイ・ヤンガスの両名は、パンパンで粛

清。三番組でＣＧＳを回す事、となった。（事務方のデクスター・キュラスターと整備班のナディ・雪之丞・カッサパは残留となった。勿論トドも……　一軍に退職金等の流れは、原点通りです。マルバはまだ雲隠れ中ｍ（　　）ｍ）

三番組によるＣＧＳ乗っ取りクーデター成功から翌日…

館内放送：『監視班から報告！ＧＨのＭＳが１機、えー…　赤い布を持ってこっちに向かってる！』

（イメージＢＧＭ：オリジナルサントラ１より「Ａｓｐｉｒａｔｉｏｎ」）

地上・施設にいるオルガ達は外へ。一方エドワーズ達は…

ダンジ：「教官、またＧＨ来たみたいですけど、大丈夫ですか？」

エドワーズ：「ウ～ッシ、メンテ完了！ダンジ君、一緒に行くか？」

ダンジ：「は、はい…」

Ｇ―３のメンテは無事終了。足早に乗り込むエドワーズとダンジ。

ダンジ：「複座式、ですか？」

エドワーズ：「まぁな。振り落とされるなよダンジ君。しっかり捕まってるんだぞ」

ダンジ：「ハイッ！」

エドワーズ：「さて、さっき拾ったバトルアックス持って…「エドワーズ、行きまーす！」ってね♪」

と、フルスロットルで出撃するG―3。
地上では……
タカキ：「それで…　何なんすか、あれ？」
雪之丞：「（赤い布？）ありゃあ、「決闘の合図」だな…」

厄祭戦開戦前の時代：いわゆる「B．D．：Before　Disaster」暦の頃は、大抵の揉め事がある際、決闘で優劣を決めていたらしい。P．D．　歴になって以降、MSを保有しているGHでも決闘は盛んに行われている。人対人も然り、況してやMS同士も然り……
クランク：『私は、GH実動部隊所属、クランク・ゼント！そちらの代表との1対1の勝負を望む！』
シノ：「勝負って、マジかよ…」
クランク：『私が勝利したなら、そちらに鹵獲されたグレイズと、そしてクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡して貰う！』
ビスケット：「お嬢さんを？」
トド：「ほら見ろ！やっぱりだ！あっちはお嬢さんが目当てなんだ！」
クランク：『勝負が着き、グレイズとクーデリアの引き渡しが無事済めば、そこから先

は全て私が預かる。ＧＨとＣＧＳの因縁は、この場で断ち切ると約束しよう！』

雪之丞：「はぁ？なんだその条件は？（一方的じゃねぇかよ。）」

ユージン：「俺らが負けてもお嬢さん渡すだけ」で、「全部あのオッサンが良いようにしてくれる」ってか？」

ビスケット：「でも！そうしたらクーデリアさんが・・・・」

クーデリア：「行きます!!」

一同驚く。

クーデリア：「勝負などする事はありません！私が行けば「全てが済む」のでしょう？無意味な戦いは、避けるべきです！」

トド：「おぉ、そうそうそう！ついでによ、交渉もしておカネの方もガッツリと・・・（そして、得たおカネは「ダンナ」に渡しておこうかな～っと、ぐへへへへ・・・・）」

オルガ：「どうなるか、わかんねーんだぞ？」

ビスケット：「そ、そうですよ。あいつらはあなたを殺そうとして・・」

クーデリア：「既に、多くの人は死にました・・・・」

ビスケット：「クーデリアさん！」

フミタン：「お嬢様？」

ビスケットの発言を遮り、クーデリアは堂々と言い切る。

クーデリア：「それに、私は「ただ死ぬ」つもりはありません。何とか話を聞いて貰えるよう頑張ってみます」

オルガ：「フ・・・（言ってくれんじゃねぇかよ、この嬢ちゃん）」

ビスケット：「無理だよ、そんなの。何せあのＧＨですよ？「法と秩序の番人」だし・・・」

トド：「まぁまぁ本人もそう言ってんだからよ！お嬢さんはねー、あの口が達者だしねーあの・・・」

オルガ：「そのつもりはねぇ！」

トド：「あぁ～!?（やっちゃうの、マジでぇ～？）」

オルガ：「あのオッサンの話がどこまで本当か分からねぇしな。簡単には乗れねぇよ・・・・・・ ミカァッ！」

三日月：「ん？」

オルガ：「やってくれるか？」

三日月が「いいよー」と返そうとした瞬間・・・・・

エドワーズ：『オルガ隊長、三日月君を休ませた方が良い！ＭＳ「も」だ！まだ身体が慣れてない上に、コンディション劣悪な状態で決闘挑んだら・・・ 負けるぞ』

オルガ：「エドワーズ教官!?」

駆け付けたＧ―３を見て驚く一同。
オルガ：「教官、ミカを行かせてあげて下さい、これは俺たちが落とし前をつけるべき事で・・・」
エドワーズ：『教官命令だ！ここでエース失って、後々困るのオマエらだぞ？ここは、教官の俺に任せておけ。ナディさん！バルバトスはドック入りさせたら、超・入・念にメンテしておいて欲しいな。それと三日月君には、休息するよう釘刺しておいて貰えないかな、「エドワーズ教官が心配してる」と云う言葉を添えて、頼むよ』
雪之丞：「エドワーズの・・・・・　マルバの息子の頼みじゃなぁ・・・・　ナシ付けとくわ」
エドワーズ：「ＧＨ火星支部配属のイチ将校が相手か・・・・」
ダンジ：「教官、何か楽しそうですけど？」
エドワーズ：相手にとって不足無し！『そこなグレイズのパイロットに告ぐッ！この決闘、慎んでお受け致すッッ!!』
クランク：『・・・・・・　感謝！』
一方その頃、（原作の流れだったら決闘に出て、クランクを、ありがパンパンする筈が、）『教官命令』と云う楔を打ち付けて、ガンダム・バルバトス共々「静養」する事となった三日月・オーガス。
雪之丞：「・・・　と、云うワケだ。エドワーズが、三日月の代わりに、決闘を受ける事に

なった。「とにかく休め！」ってな。」

三日月：「教官がそう云ってたなら……　しょうがないね。何でバルバトスの事も気にしたんだろう？」

雪之丞：「分かんねぇよ、俺には。ただ、あの場で「身体が慣れてない」・「劣悪なコンディションで決闘に挑んだら負ける」と云う臨機応変で、的を得たようなアドバイス。流石マルバの息子だよ。ほれ、エドワーズから詫びの栄養食だ（三日月に投げ渡す、右手でキャッチする）「火星ヤシだけじゃ持たないだろ。」と言ってたぞ」

三日月：「ありがと、おやっさん。教官、俺の事、気にしてたんだ……（栄養食を食べる。）ハエタたちと違って、教官は、いつも俺たちの事を信じている所があるし、指示も正確だし、守ってくれる所もある。いつも俺たちの、かなり先を進んでるような気がするんだ。「あの時」もそうだった……」

ーーーGH夜襲から遡る事半月前、CGS：ブリーフィングルーム……

ハエダ：「「社長の息子」で、且つ「二番組の生き残り」の分際が、でしゃばんじゃねぇよ!!」

エドワーズ：「三番組に、なんて酷な事を？本来なら、一軍である俺たちが前線で、三番組が後方支援に回るのが、普通だと思うが……」

ササイ：「お前が、俺たちが立てた策に、「口答え出来る権限がある」とでも思ってん

のか、ええ？」

ハエダ：「ＧＨ顔負けの、統率が行き渡ってた、あの二番組の生き残り、と云う事で、あえて俺ら一軍に加え「させてやった」んだぞ。ま、俺らにとっちゃ、「目の上のタンコブ」みたいな感じだったけどな♪」

エドワーズ：「まだ言ってるのかよ？確かにあの時は、ＣＧＳ　始まって以来の「大惨事」だったし、親父も釈明するのに必死だった。それを知らないお前らが言える事かよ？」

ササイ：「てっめ・・・（エドワーズの胸ぐらを掴む）ふざけんじゃ、ねぇよッッ！（エドワーズの顔面めがけて殴打。テーブルがひっくり返り、壁まで吹き飛ぶエドワーズ。）

二番組の副隊長だったオメーに指図されたかねーんだよ、ヴォケェ！（エドワーズ、ササイを上から目線で睨み付ける）オォイ、何だよその目は？何か文句あんのか？」

一軍メンバーＡ：「ササイさん、その辺にしといてやって下さいよ！エドワーズの坊っちゃんの「異名」、知っててやってますよね？逆に俺たち怖くなって来たんスけど・・・」

青ざめてドン引きする一部の一軍メンバー。それもその筈、彼らは知っている。ササイがぶん殴ったエドワーズは、「タダ者ではない」と云う事を・・・

一軍メンバーＢ：「（割って入って、ササイを宥める）ササイさん！もし社長がいたら、俺たちのクビに関わる事に・・・」

ササイ：「わぁーったよ!!俺らの仲間の顔色みて、ヤバい事に成りそうだし、もしも社長が入って来たら……　もういい！今日はこの辺で……　勘弁してやるよッッ！」

ハエタ：「フンッ！ヒューマン・デブリとつるんでるようだし、ま、「三番組教官」と云う閑職に廻しといて正解だったわ。（エドワーズに詰め寄る）可愛い可愛い「教え子たち」が、見るも無惨に死んでいくサマ、ここで、指加えて見てるんだな！　行くぜオメーらァッ！」

一軍メンバー：「うーい!!」

そそくさと立ち去る一軍メンバー。

その傍らで、直立不動の姿勢を取っていたオルガ・三日月・ビスケットの３人。

数分後……

ビスケット：「大丈夫ですか、教官？」

三日月：「また殴られたみたいだね。やり返さないの？」

エドワーズ：「イッッテェ～……。相変わらずアイツら変わんねぇなぁ……「力でねじ伏せる」だなんて。いつもヒューマンデブリ共を立たせて、マッチポンプだ、やれ毒抜きだ、挙げ句の果てに「一軍からの愛のムチ」名目の鉄拳制裁、ハタからみたら、立派な「虐待」だよ、マジで。ちょうど良い機会だから、ぶっちゃけ聞くけど、悔しくな

いか？」

ビスケット：「確かに……　慣れてしまった部分はあるけど…　悔しいですよ、教官」

エドワーズ：「だよなぁ……　流石参謀。良く分かるやん！オルガ隊長は、どうなの？」

オルガ：「悔しいのは分かりますが…　隊の皆を守る為なら…」

エドワーズ：「「悔しい」って、素直に言えば良いじゃん。顔に出てるぞ。三日月君は？」

三日月：「うーん……　分かんない」

エドワーズ：「無関心だなー、相変わらず。良くも悪くも「凄いよ」三日月君は。でもな、俺は、君たちを、一軍の良いようには使わせない、絶対に、「教官」として、君たち三番組を守る責任があるから。閑職だ、閑職だと、アイツら抜かしてるようだけど、俺にとっては、「要職」だと思ってる。力でねじ伏せるヤツらの末路なんて、たかが知れてるし、ロクな事しかないからねぇ…」

三日月：「教官がいつか言ってたよね、たしか「インガ何ちゃら」って…　オルガ、何だったっけ？難しくて分かんないや？」

オルガ：「ミカ、そこ俺に聞くとこか？俺も…　分かんねぇよ。ビスケット、分かるか？」

ビスケット：「オ…　オ…　オ…　オルガ、行きなり聞かれてもォｏｒｚ」
エドワーズ：「「因果応報」だろ？」
三日月・オルガ・ビスケット：（顔を見合わせながら）「「それだッッッ!!!」」
エドワーズ：「ま、いつかそのツケは、身をもって味わう事になるだろうよ、俺や三番組にしたような仕打ちでね、いや「それ以上の」、かな？」
何か気まずい空気になるブリーフィングルーム内。
エドワーズ：「（手を叩きながら）ハイハイハイハイ、重ッ苦しい空気、一旦忘れて忘れて～。後で親父に掛け合うし、何とかしてやるから、取り合えず教練に戻るぞ～。オルガ隊長、今日は昨日の模擬戦のおさらいしよっか（？０？）／♪」
暫く沈黙が続き、オルガとビスケットが驚愕した。
オルガ・ビスケット：「ええぇぇぇ!?Σ（。Д。）」

オルガ：「（ д、 ||| ）……（この期に及んで教練ですか、教官。いい加減に「止まって」下さいｏｒｚ）」
ビスケット：「（ д、 ||| ）……（オルガ以上に、ブレーキが必要かもｏｒｚ）」

三日月：「オルガー」

オルガ：「ん？どうした、ミカ」

三日月：「「おさらい」って……　何？」

オルガ：「そこから説明しねぇとダメかよ。（。。　；）／（――；）
（そう云うオメーもだ、ミカ。教官にナシ付けないと…　ダメか（ ﾟ д ﾟ、 ――――））」ーーー

時間を戻して、決闘の戦場では……

ダンジ：「教官、勝てますか、あのＭＳに？」

ダンジがエドワーズに尋ねる。

エドワーズ：「いっちょカッコつけて「受ける事」となっちまったし……　ＭＳでの実践、始めてだもんな～。更には、コイツ動かすのも始めてで、これが初陣。どうかしてるぜ」

ダンジ：「「タコ殴りにする」なんてどうですか？」

エドワーズ：「ＭＷでやってる戦法じゃ通用しないぞ、ダンジ君。相手は、訓練が行き届いてるし、見るからに「相当の手練れ」だからな…　要するに「三日月君や昭弘君・ノ

ルバ君と云ったエース級のパイロットと相手にしている」ようなモノだ。ダンジ君のレベルだと、多分ボロ負けだろうね（　？▽？）」

ダンジ：「きょうか～ん、キッパリ言わないで下さいよぉぉぉ（ＴＴ）模擬戦の時の結果と一緒にしないで下さいよぉぉぉ（ＴＴ）」

エドワーズ：「ゴメンゴメン！思い出しちゃった？」

ダンジ：「はい（ＴＴ）」

エドワーズ：「そんな事は、忘れる忘れる！一先ず決闘な。良い機会だから、よーく見ておくんだぞ！」

ダンジ：「はいッッ！」

エドワーズ：「神様が、ダンジ君に与えてくれたご褒美・・・君だけの・・・・・「特別教練」・・・・　始めるとするか！」

ダンジ：「よろしくお願いしますッッ！」

バトルアックスを右手に持ち、構えるＧ―３。

双方準備が整ったようだ。

クランク：『ＧＨ火星支部実動部隊・クランク・ゼント!!』

バトルアックスを構えるグレイズ。

エドワーズ：「ＣＧＳ：クリュセ・ガード・セキュリティ、一軍末席兼三番組教官・元

二番組「副隊長」・社長：マルバ・アーケイが実の息子：エドワーズ・アーケイ！」
ダンジ：「同じく、三番組年少兵…　ダンジ・エイレイ！」
オルガ：「ダンジ!?生きてたのかッッ!?」
三番組年少兵Ａ：「ダンジが!?」
三番組年少兵Ｂ：「生きてる!?」

ざわつく三番組一同。それを気にもせず、決闘が始まる！
（決着が着くまで、イメージＢＧＭ：無双ＯＲＯＣＨＩ２　Ｕｌｔｉｍａｔｅ　より「対決　ーＳＩＮＣＥＲＥ　ＭＡＴＣＨー」）
クランク：『参るッッ！』
ブーストダッシュで、躍りかかる。
エドワーズ：「『来いッッ！』ダンジ君、暫く衝撃に備えなよ！」
ダンジ：「はいッッ！（神様が、ボクに与えてくれた「ご褒美」、ムダにはしないッッ！）」
Ｃｈａｐｔｅｒ－５：お前は俺たちの「教材」になれ！
（イメージＢＧＭ：無双ＯＲＯＣＨＩ　２　Ｕｌｔｉｍａｔｅより「対決ーＳＩＮＣＥＲＥ　ＭＡＴＣＨー」）

ブーストダッシュでＧ―３に接近するグレイズ。
決闘が始まった。
ガァァンッ！
鉄と鉄がぶつかり合う音がこだまし、斬り合いが始まる。
エドワーズ：『ナニュエ単身で、ここに来た？理由を聞かせて貰おうか！』
つばぜり合いになる。
クランク：『決闘中に、思索とはな？余裕があるようだが？』ガァン！
グレイズが弾き返し、Ｇ―３後ろに下がる。再び双方構え直す。
エドワーズ：『貴公、確か「ＧＨ火星支部実動部隊所属」とか言ってたな？階級は？』
クランク：『・・・・・　二尉だ。何故階級を問い質すような事を？』
エドワーズ：『さぁね、「何となく聞いて見たかっただけ」だ。それに、過日の夜襲、貴公も与していたようだな？だが、何故単騎でここに来た？』
クランク：『本来なら、コーラルが・・・・　我々の上司が詫びに出る筈だが・・・・・』
ガァァン！再び打ち合う。

エドワーズ：『どうしたどうした？刃に迷いが生じてるぞッッ！』
ガァァンッッ！

今度は逆にグレイズを弾き飛ばした。仰け反るグレイズ。
エドワーズ：『これが、「法と秩序の番人」として、四大経済圏を守護するべき守り手の「清廉潔白たる正義」のかたちが、これかよ？たかがイチ民間警備会社を、一個小隊とＭＷ数機編成組んでまで夜襲、挙げ句の果てには、「革命の乙女」と名高き、ノーマン・バーンスタイン代表の愛娘たる、クーデリア嬢の身柄引渡しの要求。誰の命令でこれを？』
クランク：『……』
エドワーズ：『「言えない」って事は、「上から」の指示でやった、と云う事だな？・・・「二尉」であるアンタが、何故！上司に反論出来なかった？やっぱ、図星だろ？』
クランク：『ぐぅ……』
エドワーズ：『そうやって、暴走を止める事が出来なかった結果、力も罪もない弱者を・・・　アンタらが踏みにじって行くんだろうが！』
ブーストダッシュで詰め寄る。
ガァァン！
再びつばぜり合い。
クランク：『貴様、「教官」と言ってたな。教官風情が、何故に決闘に望んだ？』
エドワーズ：『「護るため」だよ。コイツら子供達を』

クランク：『まさか、青年なのか？』
エドワーズ：『スキありィィッ!!』
グレイズの胴体に、G―3の右の逆袈裟斬りが入った。
クランク：「『ぐぅぅぅッ！』グハッ!!（少量吐血、深く入ってない為、大事には至らず。）」
エドワーズ：『俺の背中（後ろ）には・・・　明日をも知れぬ命の中、敢えて銃器を握らざるを得ない選択をした子供たちがいるんだ。今を生きるのに、精一杯な子たちだっている。なのにアンタらは・・・・・　そんな現状なんか知らずに、土足で踏みにじり、破壊の限りを尽くした。アンタらが、ウチに夜襲仕掛けたのが最たる例だッッ！』
ブーストダッシュし、タックルを仕掛けるG―3。
クランク：『先程から、綺麗事を並べ立てて・・・　それが貴様の・・・「正道」かァァッ！』
負けじと、タックルを仕掛けるグレイズ。
双方正面衝突、かと思いきや・・・
クランク：『もおらッたァァァッッ！』
エドワーズ：『グァッ!?』
シールドをパイルバンカーのように水平に構え、G―3のバトルアックスを弾いた。
その反動でよろけ、倒れるG―3。

オルガらがいる方向へ吹き飛び、突き刺さる。
バトルアックスが吹き飛んだ先では……
オルガ：「決めた！俺たちの「新しい名前」だ…　「鉄華団」。」
クーデリア：「えっ？」
オルガ：「俺たちの新しい名前…　ＣＧＳなんて「カビ臭い名前」を名乗るのは癪（しゃく）に障（さわ）るからな」
クーデリア：「「てっか」…「鉄」の「火（ひ）」ですか？」
オルガ：「いや、「鉄」の「華（はな）」だ。「決して散らない鉄の華（はな）」…　だ」
視点を戻して、決闘は大詰め。
ダンジ：「教官！このままじゃ俺たち負けますって！」
アラートが鳴り響くコクピット。
慌てるダンジ。
エドワーズは考えていた。起死回生の策は必ずある、と云う事を。
クランク：『この決闘、私の勝ちだな!!』
頭部センサーが、ガバッと開き、メインカメラが露出、バトルアックスを大上段に構え、切りかかろうとする。
ダンジ：「教官、教官！」

エドワーズの脳内に「電撃」が走った。
そして、彼がとった行動は??
ブゥオン!!ズガァンッッ!
グレイズの左脇腹を、淡いピンクの「光の線」で貫いたではないか!
クランク：「何?.ビーム、兵器、だと?.この時代には普及してない兵力を.... CGSが保有していたとでも????（あり得ん!）」
膝をつき、倒れこむグレイズ。勝敗は決した。
「光の刀身」を納め、背中に束を納めるG―3。
降伏信号を打診し、先にクランクが出る。
コクピットハッチが開き、エドワーズとダンジが出てきた。
（イメージBGM： オリジナルサントラ1より「Ｒｅｉｎｃａｒｎａｔｉｏｎ」）
クランク：「やはり..... 俺の教え子と同じだな」
エドワーズ：「教え子? 貴公、やはり俺と同じ教官だったのか?」
クランク：「そうだ.... お前の後ろにいるのは... やはり子どもなんだな。」
ダンジ：「おまえらが襲ってきたせいで、ぼくたちの仲間が、仲間が...」
エドワーズ：「ダンジ君!!その辺にしておきなさい!」
ダンジ：「教官、悔しくないですか?」

エドワーズ：「確かに悔しいさ！でも……　そう云えば、決闘開始前に、貴公が敗北した場合の条件を提示してなかったな」

クランク：「フ…　すまない…　君たちを馬鹿にした、訳じゃないんだ。その選択を俺が持たなかった…　それだけだ…」

エドワーズ：「つまり、貴公が言いたかったのは、こう云う事だろう？」

クランクに対して、エドワーズの「口撃」が始まった。

エドワーズ：「上官であるコーラル・コンラッドの命に背き単騎出撃、自らの身をもって、「決闘」と云う「綺麗な形で」過日の夜襲の清算をしたかった」事。「勝利条件であるグレイズとクーデリア嬢の身柄引渡しが叶わず、万一火星支部に戻っても、待っているのは総員罰直、良くて別部隊に左遷、悪くて除隊処分」「軍法会議にかけられても可笑しくない状況」だ、そうだろ？」

クランク：「確かに、お前が言っている事に間違いはない。部隊全体の問題になってしまうからな…　それに…　ダンジ君。」

ダンジ：「え？」

クランク：「君の言う通り、おじさんたちは、取り返しのつかない、悪いことをしてしまった。謝らなければならないのは、おじさんの方だ、ガハァッ！（吐血）もう長居は

無理なようだ…　責任は全て俺が抱えたまま…　ウッ、がはッ!!」

ダンジ：「教官、あのおじさん死んじゃいますよ、「あのベッド」に入れましょうよ～!」

エドワーズ：「分かってる…　ダンジ君、銃を貸しても良い？」

ダンジから銃を借りるエドワーズ。（まさか???）

クランク：「介錯を…　手を貸してくれるのか？」

エドワーズ：「あぁ…」

クランク：「俺はもう…　自分で終わる事すら出来ない……」

クランクに向けて銃を構え、一呼吸間を置くエドワーズ。

エドワーズ：「……　ＧＨ火星支部実動部隊所属、クランク・ゼント二尉、最期に言い残す事はあるか？」

銃を構え、閉眼するエドワーズ。休めの姿勢を取るダンジ。

クランク：「俺を「終わらせてくれる」のか…（閉眼する）ありが…」

パンパンパン!!!

クランク：「!!何故、俺を撃たなかった?」

（イメージＢＧＭ　：オリジナルサントラ1より「Ｍａｋｅ　Ｙｏｕ　Ｂｅｌｉｅｖｅ」）

眼を開けたクランク。向けられた銃口の先を見ると・・・・

グレイズの左脇腹、先程の決闘で、Ｇ―３が貫いた部位に向かって、銃を放ったのではないか！

エドワーズ：「クランク・ゼント。この時点で「ＧＨとしてのクランク・ゼント」は、今ここで「射ち殺した」。もう貴公、否、あなたはもう、原隊復帰しなくて良いです。ＩＤ上、「死亡扱い」として出しておきますから・・・・ あなたは、軍人として、否、ここ最近の大人たちの中では、至極全うな部類に入ってる。トンズラしでかした親父よりマシだ。

あなたをここで「終わらせる」事すら、馬鹿馬鹿しくなって来た」

クランク：「何が・・・ 言いたいんだ?」

エドワーズ：「そうだな・・・・・ 捕虜にするのは勿体ないからな・・・・・・ クランク・ゼント、いや・・・・ クランク「さん」、あなたを俺たちＣＧえ、ウッ・・・」

ダンジ：「教官、また頭痛ですか？」
エドワーズ：「取り乱して失礼、鉄華団の為に、「教材」として、協力して貰えませんか？」
クランク：「「教材」だと？面白い事を云う青年だ。良かろう、捕虜、としてではなく、「教材」か・・・ クランク・ゼント、お前達の為に、尽力しよう!!」

赤く染まった火星の夕焼け空に、暖かい風が吹いた。

エドワーズ：『オルガ隊長、そろそろバルバトス出しても良い頃合いだから、グレイズの回収始めようか？三日月君もイイ感じだから・・・』
Ｃｈａｐｔｅｒ―６：特別教練！三日月君を鍛えよう♪
クランク・ゼントをエドワーズの仲間に引き入れた時と同時に、クーデリアは「鉄華団」に対し、地球までの警護を「発注」した。（内容は、原典通りの為割愛しますｍ（＿＿）ｍ）
Ｇ―３のコクピットでは・・・・・
ダンジ：「教官、カッコよかったですぅ～、シビれちゃいました～（ ？▽？）」
エドワーズ：「ま、まぁ、な・・・・・ 初陣で、これだけ動けたならいいんじゃない？そ

れに、クランクさんを「ベッド」に入れておかないとね」
と、クランクを抱えたＧ―３は隠しハッチへと帰っていった。
三日月：『オルガー、遅くなってごめん。「動かしても良い」と、教官からＯＫ貰って来たよ。』
オルガ：「悪りいなミカ。あのＭＳを回収して、シャトルの方まで持っていって欲しいんだ。頼めるか？」
三日月：『いいよー』
と、クランクが乗ってたグレイズを、ヨッコラセと右肩に担ぎ上げ、シャトルが停まってる場所まで運びだした。
（ちなみに、バルバトスは第１形態にグレイズの左肩アーマーを取り付けた、クランクとの決闘時の姿。または「第１．５形態」）
一方、エドワーズ達は・・・・
（イメージＢＧＭ：　オリジナルサントラ１より「Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄ　」）
エドワーズ：「成程ね、あの時とっさに出た武器・・・「ビームサーベル」だったのかぁ・・・・「まだ武器がある」と云うが、何処にあるんだろ？」
Ｇ―３のコクピット内で、何なら四苦八苦しているエドワーズ。
ダンジ：「何処かにあるんじゃないですか？ＭＷの兵装使ってみるとか、どうですか

?」

エドワーズ：「無理な事言うね、チミは。(。。；)＼(――；)

「ナノラミネートアーマーは、ビームを弾く特性がある」と云うのは聞いた事あるが、コイツの「ビームサーベル」は、ナノラミネートアーマーを、いとも簡単に貫いたからなぁ・・・」

ダンジ：「あれは凄かったですよ～。でも、どうしましたか、首傾げて？コンソールと、にらめっこしてますけど・・・・」

エドワーズ：「ビームサーベル」強力過ぎるからなぁ・・・・　エイハブリアクター積んでるＭＳには使え、そうにないかぁ・・・・」

悩んでいる２人。するとそこにクランクがやって来た。

クランク：「奥の手として温存する」と云うのはどうだ？」

エドワーズ：「奥の手・・・・・　それ良いかも、てか、クランクさん!?大丈夫ですか？ベッドから出てしまっても？」

クランク：「大丈夫だ。１時間で完治したから充分な位だ。ほう、これが「Ｇ―３ガンダム」のコクピットか？グレイズとは違うな？」

エドワーズ：「はい、最初は戸惑いましたが、頭に埋め込まれたコイツのおかげで、乗り切れましたんで・・・」

額を指差すエドワーズ。
クランク：「まさか・・・・　記憶チップを埋め込まれているのか？」
エドワーズ：「知ってるんですか、クランクさん？」
クランク：「あぁ、そうだ。かつて、ＧＨのある「没落」貴族の家の当主が、記憶チップの埋設手術を行ったらしい。埋設は成功したものの、杖を突かなければ、歩行もままならぬ状態になったらしい」
（月鋼のヴォルコ・ウォーレンの事です。）
エドワーズ：「そんな事が・・・・・　でも、イイアドバイスありがとうございますッ！」
クランク：「なに、礼を云うのは俺の方だ。こんな俺を、引き入れてくれて感謝している」

翌朝、火星を発つ数時間前、外にバルバトスとＧ―３が佇んでいる。これから、三日月に対して「特別教練」を行う、との事だ。
エドワーズ：『いいかい三日月君。ＭＳ戦は、今まで乗ってたＭＷと違って、戦闘の進め方が違うんだ。そこで、だ。三日月君には、俺との特別教練を受けてもらうよ♪』
三日月：『何か、イヤな感じがするけど・・・・・・　まさか教官、バルバトスと目の前にいる教官が乗ってるＭＳと、戦うの？』

エドワーズ：「（モニターを観ながら）流石三日月君、分かってるじゃないの・・・　って、何で上半身裸なん？」
三日月：『教官知らないの？ＭＷ乗ってた時、覚えてない？』
エドワーズ：「あぁ、阿頼耶識ね、そうだったそうだった」
三日月：『バルバトスのコクピット、俺が乗ってたＭＷのヤツそのまま移植したんだ。』
エドワーズ：『（親父が「必要ない」とか云って、取り外してたからなぁ・・・）さあて三日月君、始めようか！」
アサルトナイフを両手に持ち、構えるＧ―３。
三日月：『教官とやるの、めんどくさいからなぁ・・・　仕方ない、本気で行くよ！』
（イメージＢＧＭ：原典１期より「Ｉｒｏｎ　ｂｌｏｏｄｅｄ　ｏｒｐｈａｎｓ」）
ブーストダッシュで躍りかかるバルバトス。
Ｇ―３を視界に捉えた時、メイスを降り下ろした。
ガンッッ！
地割れのようなインパクトが大地に伝わる。
回避するＧ―３。
エドワーズ：『もぐら叩きかよ、今の一撃。』焦ったわ～。マトモに喰らったら、中破モノだろー・・・　って、オイッ！どストレート過ぎるぞ!?」

三日月：『前がさぁ……　ガラ空きなんだけど？』
バルバトス、ブーストダッシュでＧ―３にチャージを仕掛ける。
エドワーズ：『攻め方が単調過ぎるぞ、三日月君。一転突破も立派な攻め方のひとつだ。しかし欠点はある…　こんな感じに…　なッ！』
メイスのインパクト面を、右アサルトナイフで受け止め、下段に下げた。メイスの重みで、バルバトスが前によろけ、うつ伏せに倒れ込んだ。
その光景を観て、オルガ達は……
オルガ：「一方的にやられてんじゃねぇかよ、ミカ」
シノ：「教官さぁ…　実は…　ツエーんじゃねーの？」
ユージン：「ヨエーと、俺たちの教官務まらねーだろ、シノ（。。；）／（――；）良く、注意されまくってたよな、教官に」
シノ：「あ、ははは…　そうだったっけ？（^ o^ ；）」
昭弘：「お前、目立ちすぎだから、真っ先に討たれるぞ。実際の戦場だったら、敵の良い的だ」とな…」
シノ：「そう云う昭弘も、「後手後手に回りすぎてる」とか何とか…」
昭弘：「お前と一緒にするな！（。。；）／（――；）」
ビスケット：「戦い方も違うんだね、オルガ」

オルガ：「良い機会だ、存分に鍛えて貰いな、ミカ。あの一軍でさえも、震えて逃げ出す位だからな…　教官が「本気出した」時は、かなりヤベェからな…」

打ち合いは続く。バルバトスの単調且つ粗削りな攻撃を、受け流してはカウンターを畳み掛け、圧倒的な強さを見せ付けるG―3　。そして……

エドワーズ：『ここでギブアップ？まだ早いでしょ。君はこれから、未だ見ぬ強敵と戦う事となる、例え相手がGHだろうと宇宙海賊だろうと…　そこで倒れてて良いのかい？三日月君の「いのち」は、「誰に預けてる」んだっけ？このザマじゃあさぁ……　悲しくなるなぁ……』

ハエタやササイのような上から目線で、バルバトスを見下すG―3。

三日月：「あんたに…　そこまで…　ボロクソに…『言われたく…　ねェよ!!』」

メイスを拾い、勢い良く振りかぶり、G―3の下腹部に、メイスが炸裂。

エドワーズ：『うごぉぉぉぁっ!?』

炸裂させた後、バルバトスがジャンプ。

三日月：『オルガの道を邪魔するヤツは、例え相手が教官だろうと…　徹底的に…叩き潰す!!』

三日月、ついに「心のリミッター」を解除。

もう殺す気満々の状態で、大上段からのメイス幹竹割りを仕掛ける。

慌てるオルガ達。

ビスケット：「ヤバイよオルガ。三日月、完全に教官仕留める気だよ…　（＞＿＜）」

オルガ：「…　（はは、ははは……）」

シノ：「どーすんだよ、オルガ。三日月止めねーと、取り返しつかねー事態になるぞ！（＞＿＜）」

オルガ：「…　（分かってるけど……）」

ユージン：「三日月を大人しくさせるのに、結構時間かかるの知ってるだろ、オルガ！（＞＿＜）」

オルガ：「…　（あんな状態のミカ見たことねぇし、どうすりゃ……　プレッツェルの婆さんみたいに、上手くなだめる事出来ねぇんだぞ…　ｏｒｚ）」

あたふたするオルガたち。

オルガ：「……　（落ち着け、オルガ・イツカ。俺は「鉄華団団長」だぞ。こんな所で、しかも「最悪」な形で終らせては…）」

ビスケット：「多分手遅れになるかもしれないよ、オルガ！（＞＿＜）」

オルガの「心のリミッター」が外れた、（「希望のはな」、ではありません、アシカラズｍ（＿＿）ｍ）後頭部にデカい汗と一緒に……

オルガ：「（な…　な…　な…）な……　ぬぅぅあにいやってんだ、ミイカァァァッッ

!!教官殺してどーすんだァァァッッ！（／≧◇≦＼）」
オルガの心の叫びも虚しく、G―3絶命か!?と誰もが思った次の瞬間！
ガァァン!!
即座に左腕にシールドを装備、メイス幹竹割りを防ぎつつ、受け流した。
三日月：「やば、立て直さないと…」
ブゥオンッッ！
三日月の右の首もとに、「何かが触れてる感覚」を感じた。
エドワーズ：『短時間で俺をここまで追い詰めて、しまいに「コレ」を抜かせてしまうとはな… まったく、我ながら恐れいったよ…… やっぱり、凄いよ、三日月君は…（否、「すげェよ、ミカは…」）』
三日月：『久々に怖かった。やっぱ、教官には…… 敵わないや』

オルガの心の叫びと同様、別の場所でも「心の叫び」が聞こえたとか、聞こえなかったとか。しかも、モニター越しで……

ダンジ：「何ここでビームサーベル抜いちゃってるんですかァ？

て言うか……

何やってんですか、きょォォかァァァんッッ！（ＴＴ）」

Ｃｈａｐｔｅｒ―７：いざ地球へ！

特別教練終了後、秘密の格納庫に戻るエドワーズとＧ―３。

Ｇ―３をドックに収容し、降りてきた。

開口一番に来たのは、ダンジだ。

ダンジ：「きょーかーん、何でビームサーベル抜いちゃったんですかぁ～？（＞＿＜）」

エドワーズ：「仕方ないだろ。本気で死ぬ所だったんだぞ～。でも、咄嗟に反応出来たし、ま、首の皮１枚繋がったんなら、結果オーライでしょ♪」

ダンジ：「どや顔決めて言える結果じゃなかったでしょ、そこは。観てる方の身にもなって考えて下さいよぉ…　ヒヤヒヤしましたからぁ…　クランクさんも何か言って下さいよぉ～（＞＿＜）」

クランク：「確かに、ダンジ君が言ってたように、危なげな部分が見られたが・・・　最後の所で起死回生のビームサーベル、お前らしいな、エドワーズ」
エドワーズ：「いやいやいやいや、ＭＳ操縦歴が長いクランクさんにそこまで言われても・・・　何と云うか、照れますなぁ（＾ｏ＾ゞ」
照れるも何も、模擬戦闘ではなかったら、確実にエドワーズは、火星のチリと化していたのかもしれない。
エドワーズ：「さて、オルガ達と合流しますか」
と、再びＧ―３に乗り込もうとした時・・・
オルガ：「やっぱりここにいましたか、教官」
エドワーズ：「あら、オルガ隊長？来ちゃった、のね？（まぁ、いいけど。一軍と親父いないし、まぁいいやｏｒｚ）」
何と、オルガら鉄華団員とクーデリア・フミタンと、トドがわざわざ出向いて来てくれた。
エドワーズ：「ほう、「鉄華団」ね。改名したんだ・・・」
オルガ：「はい、俺が決めました。「ＣＧＳ」と云う縛りから逃れたい一心で、決めました」
エドワーズ：「成程ね・・・・　お前達の力で、この「大仕事」出来るのかぁ？ましてや、

ＧＨの奴らに狙われる事は、目に見えてるしな。そんで、慌ただしい空気出まくりだったけど、行くのかい、「方舟」に？」

オルガ：「はい。実は「方舟」の方には、昭弘達を先に行かせました。後は俺たちだけです」

エドワーズ：「シャトルに積んだ」のはそう云う事だったのね。納得納得・・・・　あ、ちなみに着いてきたのが、あの・・・」

エドワーズが、オルガの右横にいる女性２人に目が行った。

オルガ：「教官、紹介するのが遅くなりましたが、俺達鉄華団に、仕事を依頼した・・・・」

クーデリア：「クーデリア・藍那・バーンスタインです。そして、私の侍女のフミタン、フミタン・アドモスです」

フミタンは軽く会釈した。

エドワーズ：「音に聞く「革命の乙女」、ノーマン代表の御令嬢様にお目通り出来る事、恐悦至極にございます。」

クーデリア：「私も貴方についての噂、耳にしておりますよ、マルバ・アーケイの実の息子：エドワーズ・アーケイ。またの名を「煉獄帰りの軍神」と云う異名、でしたよね、フミタン？」

フミタン：「間違いはありません、お嬢様」

「え、知ってたの？」と云う目で、ドン引く鉄華団員。トドも然り。

クランク：「お前が噂の「軍神」だったのか？」

エドワーズ：知らなかったんですか？クランクさん、そう云うアナタもあるじゃないですか、「紅き猛虎」と云う異名が」

ダンジ：「えーッ！クランクさんも「異名持ち」だったんですかァァァ？（＼＿／）」

クランク：「２０年前の話だがなｆ（^ ^ ；」

照れるクランク。

オルガ：「それもそうだが、ダンジ。良くぞ無事に生き残ってくれた」

ダンジ：「オルガたい・・・ じゃなかった、団長。「ある人」に助けて貰ったおかげです」

オルガ：「「ある人」？誰だ、ソイツは？」

エドワーズ：「俺から説明した方が良いかな？」

オルガ：「教官？」

エドワーズ：「あぁ確か、Ｇ―３ガンダムを試運転して帰ってきたら、何故かメディカルベッドがあって、その中に、ダンジ君が入っていた訳なんだ」

オルガ：「何か分かんなくなりそうだが・・・ 無事だ、と云う事にしておくとして・・・ 教官、俺達と一緒に、地球へ行きますか？」

エドワーズ：「決まってんでしょ！俺の教え子達が行く、て云うのなら、行くしかないでしょーよ!!」
年少組：「わーい!!」
エドワーズ：「ただ、オルガ隊長、否・・・・ オルガ団長。この「条件」を呑んで貰いたい。」
オルガ：「どんな「条件」ですか？」
エドワーズ：「観て分かるように、「もと」ＧＨ将校・クランク・ゼントを捕虜、じゃなかった、俺の「仲間」として引き入れている。ヤツらには、「クランク・ゼントは死亡している」と云う情報を「与えた」んだ。多分躍起になって来るだろうね」
（一方その頃・・・・・・
アイン：「ヘクシュン!!」
アーレス隊武官：「アイン、大丈夫か？」
アイン：「大丈夫ですよ・・・」）
エドワーズ：「ヤツらにバレないよう、上手く立ち回りをお願いしたい。出来るよな、団長」
オルガ：「教官の・・・・ エドワーズさんの頼みであれば・・・・ 引き受けてやるぜ、じゃ

なかった、引き受けましょう！」
ダンジ：「やったー！教官と、クランクさんと一緒に、地球へ行ける～！」
クランク：「そうと決まれば、エドワーズのＧ―３ガンダムを、シャトルに積まなくてはならないようだが、間に合うか？」
エドワーズ：「そんな心配する必要ないですよ、クランクさん。鉄華団が出た後、俺達もシャトルで「方舟」に向かい、親父の舟・「ウィル・オー・ザ・ウィスプ」に搬入する。鹵獲品はもう既に積んであるようですし・・・・ オルガ団長、ＣＧＳ三番組の頃からの付き合いもあるから、改めて宜しく頼む。呼び方は・・・ まかせるよ」
オルガ：「ありがとうございます、教官」
そんなこんなもあって、エドワーズご一行様と合流した鉄華団。
地球へ向かって、いざ出発!!と、上手く行くワケがないと、頭の隅っこで思っているエドワーズであった・・・・

ＬＯＧ―「侵」第１話：煉獄帰りの軍神

Ｃｈａｐｔｅｒ―Ｅｘｔｒａ：異世界からの客

時同じく、火星軌道上

空間の歪みから、赤い鳥が出てきた。
エルピス：「クロノ・アクロス完了。逃走先の太陽系に到着しました」
エルヴィン：「着いた、のか？」
ピーピーピー
アラート音が鳴る。
エルピス：「エイハブウェーブ反応確認。ご主人様、「ヤツ」がここまで追って来ました。」
エルヴィン：「「ヤツ」・・・・”アンドラス”か・・・・」
（イメージＢＧＭ：Ｗｉｎｇｓ／山本彩←さやねぇの卒業ワンマン大成功を祈ります。さやねぇ・・・　止まるんじゃねぇぞ・・・・・　）
赤い鳥の後を追いかけるように、黒い羽のＭＳが姿を表した。
別の次元で、大監獄を吹き飛ばしたＭＳ：”アンドラス”だ。
アグナス：『ついてきたのか、忌々しいヤツめ。返り討ちにしてくれる』
大剣を「召喚」、エルヴィンが駆る「フェニクス」に襲いかかる。

ピーピー
再びアラート音が。

エルピス：「ご主人様、危険です」
エルヴィン：「分かってる！」
”アンドラス”の斬撃をひらりとかわす。ＭＳ形態ではない為、攻撃があたらないのは当然の事だ。
アグナス：『どうやら「越えた」分の燃料が尽きたようだ。次に会うときは、必ずッ！』
（ズゥゥン）
空間に溶けるように、”アンドラス”が消えた。
エルピス：「推進剤残量、僅かになりましたので、イオンドライブに切り換えます」
エルヴィン：「一体・・・「あの女狐」は、この世界で何をしようとして・・・・・」
エルピス：「生命維持装置作動、フェニクスリアクターをスリーブ状態に設定、救難信号を発信します。」
果たして、「異世界からやって来た客人」は、合流出来るのだろうか？
エドワーズ：「ウッ!!（何か、いつも以上に頭が・・・・・・）」

Continue to the NEXT LOG……

第２話：謀略の宇宙（そら）

ＬＯＧ―「侵」：第２話

Ｃｈａｐｔｅｒ―１：イサリビ乗船

オルガ達を乗せたシャトルが発射して、暫くした後、別のマスドライバーからシャトルが発射した。

火星の衛星・ダイモスに建造された宇宙港「方舟」へと向かうシャトルだ。

厄祭戦時に使用されたマスドライバーを、Ｐ．Ｄ．　暦になっても、まだ使えるから凄いのである。

シャトルは、ＣＧＳが使っていたシャトルを使用しているのである。Ｇ―３とメディカルベッドを積み込んでおり、乗り込んでいるのは……　あの３人だ。

クランク：「まさか、シャトルまで持っていたとはな…」

エドワーズ：「親父が、多めに購入したんだ。ウィスプに積み込んだりする為に使ってたからね。」

ダンジ：「教官、宇宙行くの始めてですよ～。」

エドワーズ：「そうか、宇宙はとてもキビシー環境だからなぁ……」
そうこうしてるうちに火星の大気圏突破、「方舟」まであと少し。
エドワーズは、ＬＣＳ回線を開く。
エドワーズ：「ウィル・オー・ザ・ウィスプ聴こえるか。こちら輸送シャトル「キャメロット」。搬入要請願う、どうぞ。」

チャド：『こちらウィル・オー・ザ・ウィスプ、改め「イサリビ」舵手のチャド・チャダーン…… ヴェΣ（。Д。）、エドワーズ教官？Σ（。Д。）』
エドワーズ：「その声は…… チャダ君かぁ。ちゃんとお茶は飲んでるかね？（ ？▽？）」
チャド：『通信機越しでイジるの止めて下さい、教官。シャトルに積み込んである荷物の搬入ですよね？』
エドワーズ：「ああ、まだオルガ達とは合流してないな？」
チャド：『まだです。』
エドワーズ：「よし、もう少しで着くから、後部のハッチ展開して待っててよ～。」
チャド：『イサリビ、了解しました。通信終わります。』

回線が切れ、通信が終わった。

エドワーズ：「舟の名前」まで変えたか……　いいね～、オルガ。サイッッコーだね、ぐへへへ……（？▽？）」

ダンジ：「教官、何か楽しそうですけど？」

クランク：「ダンジ君。エドワーズは、いつもあんな感じなのか？」

ダンジ：「はい…　こういう時に限って、何かヤバい事考えてたりするので……　でも、やる時はやりますからね。」

そうなのか、と呆気に取られるクランクを余所に、シャトルはイサリビに到着。雪之丞の支持のもと、先着したデブリ組・年少組の働きにより、無事に搬入作業が完了した。

エドワーズ一行の部屋は、イサリビ内格納庫に近いブロックに宛がわれた。本来なら、マルバの部屋として使われるべき部屋であったが、調度品は無く、ただの物置部屋同然になっていた。そこに、メディカルナノマシンベッドとか、エドワーズの着替えやら何やらを置いただけでも結構スペースが余っている。まぁ、一人じゃ退屈だし、多ければ良くね？と考えていた。

クランク：「ここで、大丈夫なのか？」

エドワーズ：「大丈夫ですよ、これくらいあれば。もとを正せば、厄祭戦時に、多く建造された「強襲装甲艦」ですから。ＧＨの方で運用されてる「ハーフビーク級」、「スキップジャック級」、更に「ビスコー級クルーザー」とは違って、簡素な作り方ですからね……」

クランク：「かなり詳しいな。やはり「チップ」の恩恵か？」

エドワーズ：「まぁ、そうですけどもね。」

談笑をしているエドワーズ一行を尻目に、イサリビは静かに出航、合流予定宙域へと向かった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―２：漂う悪意

一方その頃、オルガ達を乗せたシャトルは「方舟」付近に到達、火星での細かい手続き等、細々した手続きはデクスターに任せて出立したので、まぁ大丈夫だろう。

そして、オルクス商会との契約は成立。しかしこれは、鉄華団を釣り出し、一網打尽に叩き潰し、クーデリアの身柄を確保しようとするＧＨ火星支部長：コーラルの「本懐」。

数日後に、ヴィーンゴールヴより監査官が来る。ここで、「手柄」を挙げねば！といき

り立つコーラルの野心が、火星の成層圏を黒く染め上げようとしていた。
時同じく、火星へと向かう1隻の艦船がある。監査局のビスコー級クルーザーだ。
ガエリオ：「お前が睨んだ通り、クーデリア失踪の件…「コーラルが絡んでいた」ようだな。そのコーラルの「下衆な申し出」を、お前が受けるとは思わなかったよ。」
マクギリス：「「下衆」か…　確かにな…」

ーーークランクが、単独で決闘に挑んだ時間まで遡る。
監査局のクルーザーと、火星支部間のＬＣＳ通信でのやり取り。
マクギリス：「それで…　急な話とは？」
コーラル：『是非とも監査官に、御同道願いたい作戦があってね…』
ガエリオ：「作戦？」
コーラル：『クーデリア・藍那・バーンスタインが、「調停」の為に地球へ旅立つのは君たちの望む所ではなかろう。この手柄を君たちに譲ろう、と言っているのだよ？』
はぁ、と溜め息を付き、ガエリオが返答する。
ガエリオ：「1度は自らの手柄にしようと、中隊まで動かした癖に、「手柄を譲る」とは、良く言ったものだなぁ…」
マクギリス：「（火星支部の）失態の穴埋めに必死なのだろう。笑ってやるな、ガエリ

オ。」

ガエリオ：「お前、何を考えている？」（まさか、「クーデター」とか、そんな野暮な事、考えてないだろうな？）

マクギリス：「今やクーデリア・藍那・バーンスタインは、火星独立運動の象徴だ。その小娘１人を「飼い慣らす」だけで、火星の市民を黙らせる事が出来るなら、「利用価値はある」、と思わないか？」

ガエリオ：「成程。「身柄を押さえ、我々の手のひらの上で囀ずって貰う」訳か……」

コーラル：『君たちには、とても申し訳ない事だが、火星支部の威信の為、宜しく頼むッ！』

通信を切り、別の回線に繋げるコーラル。繋げた先は……

鉄華団と契約を取り交わした「筈」のオルクス商会の会長・オルクスだ。

オルクス：『お手を煩わせずとも、我が社の船がクーデリアを捕らえましたものを…』

コーラル：「これは「政治的な問題」だ！手順に意味がある。「結果だけの話」では無いのだ！そこを履き違えるなよ！」

監査局とのやり取りの後、焦燥感にかられながら話すコーラル。火星支部長の椅子が危うい。先の失態、如何にして挽回すべきか?その事しか頭にないコーラル。それを「帳消し」にする為の策として、ある所から話が来た。

火星圏では有名な豪商、ノブリス・ゴルドンからの資金援助と、斥候からもたらされた指令だ。

【革命ノ乙女ヲ、赤イ空ノ果テニテ始末スベシ!】と。

その為に、息のかかった手の者を手配したのだ。オルクス商会を鉄華団に差し向けたのである。更に「内通者」として、元ＣＧＳ一軍・トド・ミルコネンに数ギャラーの仕事料と云う「袖の下」所謂「賄賂」を渡し、挟撃を仕掛け、「混乱に乗じてクーデリアを捕らえ、オルクス商会経由でＧＨに差し出す。併せて、鉄華団を消す」と云う手筈である。

オルクス：『浅学ゆえの発言、御容赦を…』

コーラル：「良い！情報提供に感謝している。」

オルクス：『今後も、我がオルクス商会の輸送航路をご贔屓にお願いします。』

コーラル：「分かっている…「来期」は任せる。」

回線を切り、火星を眺めながら呟く。

コーラル：「後はクーデリアを確実に始末するだけか……」（フッ、ノブリスのカネさえ手に入れば、どうとでもなる…）ーーー

その悪意に気付く由もなく、シャトルは一路、オルクス商会と落ち合うポイントへ向かう。

フミタン：「いよいよですね、お嬢様。」

クーデリア：「ええ。（行ってまいります。お母様…　お父様。）」

Ｃｈａｐｔｅｒ―３：Ｇ―３、宇宙デビュー戦

エドワーズ：「船の名前をマジで変えたか…　「イサリビ」ね…　ったく、味な事してくれるぜ、オルガ。ま、「決別する」意味合いがあって、良いんじゃないの？」

と、格納庫でＧ―３をメンテしながら話すエドワーズと、その横で、せっせこ手伝うダンジとクランク。

クランク：「しかし、彼らだけでこの装甲艦を、上手く操舵出来るとはな…」

エドワーズ：「ヒューマンデブリとは云えども、彼らには船の操舵方法もしっかり教えましたからね。」

ダンジ：「教官の教え方が、上手い事もありますからね。」

エドワーズ：「そんなに誉めても、何も出てこないからね。（((^ _ ^ ;)」

３人の会話に、雪之丞が入ってきた。
ダンジ：「おやっさん、どうしましたか？」
雪之丞：「ちょいとコイツが気になってな。」
エドワーズ：「あ、Ｇ―３ですか？」
雪之丞：「あぁそうだ。整備班のガキ共がお手上げの中、お前さんたちが、ぱぱっと整備してるようだしな。それに、ダンジも手伝ってるようだが大丈夫か？」
ダンジ：「大丈夫ですよ！おやっさんもどうです？」
雪之丞：「悪りィ、遠慮しとくよ…」
整備中、Ｇ―３の後ろに並んでるグレイズに気が付いたクランク。
クランク：「カッサパ、とやら… 後ろのＭＳは、俺が乗ってたグレイズだが、これは一体……」
雪之丞：「ま、「質にかける」名目で、使えるパーツをかき集めて作ったジャンク品だ。急造で仕上げたから、色にバラツキがあるけどよ…」
クランク：「そんなに、酷しい台所事情なのだな…」
雪之丞：「そりゃそうさ、塗料が安価な白しかなくてな… お前さんがいたＧＨと違って、ウチはカツカツだからなぁ… だが、エドワーズの「Ｇ―３ガンダム」とか言ったっけな？ナノラミネートとは違う、別の材質で出来てるみたいだが？」

エドワーズ：「ルナ・チタニウム合金」で、出来てるらしいんですよ。」
雪之丞：「るな、るな・ちたにうむ？何じゃそりゃ？」
クランク：「始めて聞く名前だな。」
エドワーズ：「ま、ガンダム・フレームに使われてるであろう「高硬度レアアロイ」、分かりやすく云うと、「レアメタルの一種」として、認識した方が良いかもしれないね。」
ヤマギ：「おやっさ～ん、ここにいましたかぁ～。あと、エドワーズ教官とクランクさんは、ブリッジに来て欲しいと、昭弘さんが呼んでますけど・・・」
エドワーズ：「分かった、すぐ行く！ナディさん、Ｇ―３は推進剤をチャージするだけなんで、お願いしますね。クランクさん、行きますよ！」
クランク：「うむ、行くとしよう！」
ダンジ：「教官！ぼくも行きますよ！」
雪之丞：「お、おい、エドワーズ！どこに挿入口があるんだぁ？」
足早にブリッジへと向かうエドワーズ一行。

雪之丞：「・・・・・「自分で探してね♪」とでも言ってるようなもんだぞコレは。」
ヤマギ：「おやっさ～ん、どうしました？」
雪之丞：「いや・・・　何でもない。とりあえず、手探りでも良いから、Ｇ―３の整備、始

めるぞ～。」

ヤマギ：「そう、ですね……　やりますか。」

ブリッジルームに到着したエドワーズ一行。

エドワーズ：「どうしたんだ、昭弘君？」

昭弘：「コイツをみてくれないか？チャド、モニターに映せるか？」

チャドに指示を出す昭弘。メインモニターに映し出されたものとは……

チャド：「３０分前に救難信号を受信。エイハブウェーブ・ＬＣＳ通信は感知出来なかったようで、それに近い周波数で傍受しました。」

モニターを眺めながら、頭を抱えるエドワーズ。例の「頭痛」だ。

エドワーズ：「何か知らないが、頭のなかで声が響くんだ。「助けてやってほしい」と。」

昭弘・チャド：「「何ッ？」」

エドワーズ：「とりあえず、信号の発信先まで接近出来るかい？それに…　後部ハッチ展開、収容を視野に整備班はスタンバイを！」

雪之丞：『分アったよ、準備入るぞー！』

整備班員：『うっ～っす！』

急遽、救難信号を出し続けていた「ＭＳ」を確保、イサリビに収容された。

エルピス：「ご主人様、ウイングガンダムゼロ炎、「民間の船舶」にて収容されました。今現在、推進剤補充中です。」
エルヴィン：「エルピス、ゼロ炎は任せる。」
エルピス：「私も行きます。」
そう云うと、エルヴィンの左ガントレットにある端末が起動、ゼロ炎のコクピットハッチが開放、格納庫に降り立った。
エルピス：ご主人様、ここは強襲装甲艦「イサリビ」の格納庫です。救難信号を傍受され、我々を救出したようです。」
エルヴィン：「そう…　か？追手はここまで…　来ない…　か…」
バタッと倒れるエルヴィン。
「誰か」が倒れた音に気付いた整備班の少年兵。
整備班の少年兵Ａ：「おやっさ～ん、救出したＭＳの側に、人が倒れてますけど…」
雪之丞：「取り合えず、食堂連れてけ～。」
整備班の少年Ａ：「ウッス！」
見ず知らずのパイロットは、食堂に担ぎ込まれた。
再び、ブリッジでは？
チャド：「そう云えば教官、オルクス商会と契約結んで、低軌道航路船に拾って、「方

舟」へ行く、と云う手筈になってる筈ですが・・・」
エドワーズ：「その話、なんか上手すぎないか、チャダ君？」
チャド：「ええッ？Σ（。Д。）」
一呼吸置いて答える。
エドワーズ：「オルクス商会が、鉄華団と契約取り交わすような所じゃないような気がするんだわ。何か「裏」があるんだよね～。」
驚く一同、しかし驚かないのはただ一人、そう、かつてＧＨにいたクランクだ。
クランク：「俺がかつてＧＨ　、前の職場にいた時、コーラルとの間に「黒い密約」がある、との噂を耳にしたことがある。まさか、こんなかたちで・・・・・・」
すると、アラート音が！
チャド：「エイハブウェーブ反応、確認!!数は・・・・　１８!?」
昭弘：「１８機だと？」
ダンジ：「多すぎない？」
エドワーズ：「張られてたか？それとも、俺たちが来ると云う情報がリークされたのか？」
昭弘：「ここにいるデブリ組はＭＷしか操れない。ここはどうすれば？」
クランク：「「３個中隊」か・・・・　出撃したいのは山々だが・・・・　エドワーズ、行けるか

？」

エドワーズ：「何時でも行けますよ。」

ダンジ：「ビームサーベル、抜かないで下さいね（＿＿＿＃）」

エドワーズ：「どうしよっかな～？抜いちゃおっかな～？（　？▽？）」

ダンジ：「ぜっったい抜く気マンマンでしょ、多分。（ーー；）」

エドワーズ：「そんじゃま、ＧＨのヤツらと戯れて来るわ、クランクさん、オペレーター役お願いします！」

クランク：「心得たッ！」

エドワーズ：「ダンジ君は砲手席に回ってくれ！」

ダンジ：「了解ッ！」

昭弘：「事態が良く見えないが・・・　これからどうなるんだ？」

クランク：「昭弘・アルトランドよ、つまりこう言う事だ・・・　この事態を打開せんが為に・・・　Ｇ―３を出すッッ！」

（イメージＢＧＭ：　無双ＯＲＯＣＨＩ２　Ｕｌｔｉｍａｔｅサントラより「行軍１　ＡＲＥＮＡ　」）

格納庫に到着したエドワーズ。無重力ゆえ、宙に浮遊している。手早くワインレッドのパイロットスーツに着替えてある為、そのままＧ―３に搭乗する。

起動シーケンスが正常に完了し、メインモニターが映る。
雪之丞:『エドワーズ、推進剤、満タン入れといたからな。後、妙な銃が置いてあったから使ってみると良い。』
エドワーズ:「ナディさん、それ「ビームライフル」ですよ。ま、牽制程度で使おうかな。」
雪之丞:『びーむらいふるゥ〜?またワケ分からん武装出てきたよ、変わり者好きだなぁ、お前さんは。』
エドワーズ:「ま、邪魔なグレイズの「群れ」片しておくから。」
雪之丞:『いまのところ、マトモに動けるの、お前さんしかいねェからなぁ・・・』良ォォし、エドワーズのG—3降ろすぞォォ、下ァ気ィ付けろォォォッ!」
雪之丞の檄が飛ぶ中、搬出アームが、G—3格納ドック後部を掴み、うつ伏せに。床だった部分が開き、G—3を射出カタパルトに移動される。
射出レールに接続後、開いた床が閉鎖される。
外では、射出カタパルトが展開。
クランク:『射出カタパルト展開。A—ロック解除。電磁射出レール、テンションMAX、射出タイミングはG—3に譲渡するッ!エドワーズ、宇宙での戦闘は初陣だが、焦りは無用・・・「軍神」にとっては朝飯前か・・・ ともあれ、冷静に対処したまえ!』

エドワーズ：「…　了解。……　エドワーズ・アーケイ、Ｇ―３行きます！」
電磁カタパルトが射出され、Ｇ―３は宇宙に解き放たれた。
チャド：「クランクさん、オペレーターもこなせるんですか？」
クランク：「ま、まぁ、な……「心得ている」からな。（^^;」
ダンジ：「クランクさん、カッコいい…　教官が「鉄華団の教材となって貰う！」と云う意味、何となく分かってくる気がする……」
時同じく、ＧＨアーレス隊は…
武官（隊長）：『良いか、物量で圧倒し、クーデリアの身柄を押さえる。手筈通りに行くぞ！』
武官（一般）：『『『『了解ッ！』』』』』
コーラル：『アルダ、分かっておろうな？』
武官（アルダ）：『『御意に……』』さぁ、「ネズミ」共、覚悟するが良い。貴様らの旅は、ココでジ・エンドだ！」

一般武官Ａ：『アルダ隊長、ＭＳが１機、我が隊に接近中！』
アルダ：「「宇宙ネズミ」共のＭＳか？」
一般武官Ｂ：『違いますッ！固有周波数リストには一致しません。エイハブウェーブ

反応ありません！』
アルダ：「なぁにィィッ！「一致しない」だとォォッ？そんな機体、この時世に存在するなどあり得ぬぞ！」
一般武官Ｃ：『アルダ隊長、黙視でなら視認、（ズギョオォォン！）ぐわぁぁッ！』
アルダ：「どうした？」
平静を失うアルダ隊。
その平静を乱している根源こそ・・・　灰色の「未確認」のＭＳだ。
Ｇ―３、アルダ隊と交戦開始。ファーストコンタクトは・・・

ビームライフルの精密射撃一閃。
エドワーズ：「案外使えんじゃんコレ。良し、これで注意がこっちに向いた訳だ。適当にやっとくか。」
アルダ：「どこから狙って来た？」
一般武官Ｃ：『２時の方向、灰色のアレです！』
アルダ：「まだ動けるか？」
一般武官Ｃ：『問題ありません！ライフルが射抜かれただけです！』

アルダ：「とにかく、あの灰色のヤツの足を止めるぞ！全機、仕掛けるぞ！」
一般武官：『『『了解ッッ!!』』』
Ｇ―３のコクピットでは・・・・
エドワーズ：「１８機」なのに何故５機しかいない？クランクさん、一体全体どうなってるワケですか？」
クランク：『恐らく、二手に分けての挟撃が有り得る。まさか！』
エドワーズ：「それじゃあ、オルガ達が・・・・」
最悪なシチュエーションが、頭を過る。
それを払拭するかのように、誰かの声が・・・
???：『困ってるようだな、私が力になろう。エルピス、起動シーケンスを！』
イサリビの格納庫では、エルヴィンがゼロ炎に乗り込もうとしている。
エルピス：「推進剤フルチャージ。デュアルリアクタードライブ、正常に稼働を確認。イサリビとのシェアリング開始。グレイズ２個中隊が、本艦に接近中。よって、ブリッジに「砲雷戦態勢、並びに戦闘配備の指示」を要求します。」
クランク：『ブリッジ了解。ダンジ君、頼んだぞ！』
ダンジ：『了解ッ！』
チャド：「俺たちよりスムーズに動けてるし・・・・」

昭弘：……（脳ミソまでガチムチの為、処理速度が追い付かずフリーズ中。）
クランク：『発進タイミングを貴侯に譲渡するッ！』
エルヴィン：”Ｉ　ＨＡＶＥ　ＣＯＮＴＲＯＬ!”　ダニエル＝グレン・エルヴィン…　フェニクス、行かせてもらうッ！」
エルピス：「ウイングガンダムゼロ炎、テイク・オフ。」
カタパルト射出、炎の鳥が飛び立った。
Ｃｈａｐｔｅｒ―４：奇襲と奇行と
一方その頃、シャトル内では…
クーデリア：「このあと、低軌道ステーションに入港して、迎えの船を待つ手筈でしたよね？」
ビスケット：「はい、オルクスの低軌道輸送船に拾ってもらって…」
タカキ：「あっ、あれがオルクスの船じゃないですか？ほら、あそこあそこ！」
トド：「へへぇ…（気付いてないなガキ共、あの時みたいには行かねぇからな！）」
オルガ：「予定より少し早いな…　お！あれは…」
オルクスの輸送船の影から出てきたのは……
ビスケット：「ＧＨのＭＳ！」
（イメージＢＧＭ：　オリジナルサントラ１より「Ｓｕｒｖｉｖｅ　ｔｈｅ　Ｂａｔｔｌ

e」）
ユージン：「おい、その奥にもまだ何かいるぞ！」
シノ：「何イッ！」
トド：「はぁッ！どうなってやがる!?（フェイクフェイク。）」
ユージン：「トド、説明しろ！」
トド：「お、俺が知るか！ＧＨなんて聞いてねぇ！クソッ！クソッ！どけッ！」
オルガらを押し退け、通信無線の所まで行く。
驚くパイロットら。

トド：「俺がオルクスと話をつける！（なぁ～んてな、ぷくくくく…）」
オルクス艦オペレーター：「トド・ミルコネンからの通信ですが……」
オルクス：「我々への協力に感謝する」と返してやれ！」
シノ：「「協力」ってのはどういう了見だぁ!?てめぇ、俺らを売りやがったなぁ！」
オルガ：「入港はいい！加速して振り切れ！」
トド：「クソー！てめぇら許さねぇぞお！（#、皿、）」
ユージン：「許さねぇのはこっちだ！（#、皿、）」
シャトルの窓越しに見える多数のグレイズを見ると…

ビスケット：「ダメだ、囲まれてる！」

シャトルのパイロット：「ＭＳから有線通信！「クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡せ」とか言ってますけどぉ～……」

クーデリアは絶句した。

トド：「ささささ、差し出せ！そうすりゃ俺たちの命までは取らねぇだろう!!」

ユージン：「てめぇは黙ってろ！（(？へ？井)」

トド：「ほ、他に助かる手があるってのかよお？」

ユージン：「グッ、それは…（|||￣ ￣;）」

アトラ：「えっと…」

クーデリア：「私を差し出して下さい！」

オルガ：「それは無しだ。」

クーデリア：「ですが!!」

オルガ：「俺らの「筋」が通らねぇ。」

トド：「バカか？状況を考え…」

シノ：「うるせえ！」

暫く沈黙が続き、そして…

オルガ：「ビスケット！」
ビスケット：「了解、いくよ、三日月！」
ユージン：「何？」
シノ：「あぁ？」
クーデリア・アトラ：「「三日月!?」」
タカキ：「何を？」
オルガ：「フッ・・・（見りゃ分かるよ！）」
シャトルのペイロードが強制排出、中からバルバトスが出てきた。
一般武官Ｄ：『小細工を・・・（ダンッ！）なっ!?』
一般武官Ｅ：『何だ!?ＭＳだと!?』
（イメージＢＧＭ：無双ＯＲＯＣＨＩ２　Ｕｌｔｉｍａｔｅサントラより「街亭の戦い　ＴＨＥ　ＣＲＥＳＴ　ＯＦ　ＴＨＩＲＳＴ」
一般武官Ｆ：『目標の確保、失敗したようです！』
コーラル：「クーデリアがそこにいるならそれでいい！」
アイン：『コーラル指令！ファリド特務三査より、「殺すな」という指示が』
コーラル：「貴様の上官はいつから「あの青二才」になった!?構わん！ファリドが来る前に船ごと撃ち落とせ！」

アイン：『は、はっ！』（そうだ、折角もらったチャンス。今はあの角の付いたＭＳを倒し、クランク二尉の仇をとることだけを考えろ！）」

コーラル：「監査官自らが参加している作戦中の「事故」ならば、いくらでも言い訳が立つ。あとはノブリスとの契約だ。華々しく散ってもらうぞ・・・ クーデリア！」

シノ：「クソッ！撃ってきやがった！（＞＿＜）」

オルガ：「進路はこのままだ！このままでいい！」

急加速するシャトル、バルバトスとの交戦が続く。

コーラル：「ああっ！くっ・・・ あいつから始末しろ！」

三日月：「よし、こっちに来い・・・」

一方、イサリビでは・・・

エドワーズ：『クランクさんにダンジ君、あと少ししたらオルガ達と合流する。例の部屋で待機を頼む。それと、目立たない範囲で、戦況注視しといてほしい。』

クランク：「御意に。」

ダンジ：「了解ッ！あのぉ・・・ 昭弘さん、教官が「そろそろ団長が着く」ようなので、ぼくたちは別任務があるので、一旦抜けますが、大丈夫ですか？」

昭弘：「構わないが・・・・・・ 最悪な状況を、ここまでひっくり返すとは思わなかった

な・・・」

クランク：「後は、君たちに託すッ！」

昭弘：「あぁ、任されたッ！」

そう言って、ブリッジをあとにして、エドワーズの部屋に戻り、戦況モニタリングを開始した。

ダンジ：「クランクさん、あのグレイズ、火星で見たヤツと色と形が違いますけど・・・・・・」

クランク：「良い所に気付いたな、ダンジ君。配属先や仕様によって、色や仕様が異なるんだ。このグレイズは宇宙仕様、背面にブースターが２基付いているだろう？」

ダンジ：「あ、ホントだ・・・　じゃあ、あの時の緑色のグレイズは？」

クランク：「あの色のグレイズは、正規の色のグレイズだ。あの時の仕様は、地上仕様。地上専用のブースターを装備するんだ。状況に応じて装備を交換できる扱いやすいＭＳなんだ。」

ダンジ：「すごーい、鉄華団にグレイズがあれば・・・・」

クランクのレクチャーを聞きながら、妄想を膨らませるダンジであった。

再び戦場では？

アルダ：『単騎でこのグレイズ９機を相手どった覚悟は誉めてやろう。しかしッ！これはどうかな？』

距離を取りながらビームライフルを放つＧ―３。ことごとくグレイズのシールドの壁に跳ね返される。

エドワーズ：「当たんねーし、グレイズがワラワラとぉ・・・・」

この間も、バトルアックスの降り下ろしを交わしつつライフル打つ、防がれて降り下ろしを交わして、の繰り返し。

エドワーズの「リミッター」もオーバードライブ寸前。

アルダ：『もオらッッたアァァッ!!』

アルダ、バトルアックスを降り下ろすべく、躍りかかる。

背後を取られたＧ―３、絶体絶命のピンチ！

Ｇ―３　が取った行動は？

ブゥオン！　ズガァァン!!

ＧＨ武官：『ぐぅおおぉわッ!?』

アルダ：『ぐわっ!!跳ね返された、だとォッ!?しかも、何だこの「長いトーチ」は？』

Ｇ―３の伝家の宝刀にして奥の手である、ビームサーベルを抜刀、アルダの奇襲を受

けとめながら薙ぎ払い、寄って集るグレイズの群れを弾き飛ばしたではないか！

当然その模様は、イサリビの一室まで届いていた。

やはり、「心の叫び」が聞こえたとか聞こえなかったとかｏｒｚ

クランク：「ダンジ君、君の予想が当たってしまったようだな、ある意味で……全く恐れ入るｏｒｚ」

ダンジ：「はわ、はわ、はわわわわ……　Σ（。Д。）

（やっぱり抜いちゃうんだ、ここでも。（ーー；）な…　な…　な……）

『何、やってんですか、きょーかぁぁん!!（＼＿＼）』

当然「心の叫び」は、ちゃんと「確信犯」にまで届いていた。

そう、エドワーズだ。
エドワーズ：「ごめん、ダンジ君。ピンチだったから……」
弾き飛ばされたアルダのグレイズは……
ピーピー
アルダ：「何、「エイハブウェーブ反応、固有周波数一致。」「フェニクス」だとォッ？ガンダムタイプが、どこにいやがる？」
アルダの眼前に迫ってくる飛行物体。そこから「フェニクス」の固有周波数をキャッチした。
アルダ：「有り得ぬ！エイハブリアクターが普及した現在、飛行機なぞ存在しないのに？しかも……」
エルピス：「ご主人様、前方に「障害物」発見。ＭＳのようです。撃墜を強く推奨します。」
エルヴィン：「分かってる、取り合えず邪魔だッ！」
アルダ：『（ズバキュュゥン!!）何だコイツはァァァッ!?』
ボガァァァン。
アルダ機のグレイズ、正体不明の飛行物体による攻撃により中破。アルダ自身は無事

だった。
アルダ：「何故だ？グレイズだけやられたのに、何故俺だけ？」
一方、オルガ達は？
オルクス：「ＭＳ隊は敵に釣られたか。よし、こちらで船を沈めるぞ。コーラルに恩を売る良い機会だ。引導を渡し（「ガンッ！」と鈍い音が響く。）うっ!?な、何だ!?」
オルクス艦オペレーター：「右舷上部後方！敵艦です！」
オルクス：「何イッ!?」
オルクスの船に奇襲を仕掛けたのは・・・・ イサリビだ。
シャトル内のオルガ達を見上げるかのように、イサリビが迎えに来た。
昭弘：「・・・・ 迎えに来たぜ、大将。」
オルガ：「時間通り。イイ仕事だぜ昭弘！」

エルピス：「ご主人様、オルガ・イツカら鉄華団員並びにクーデリア嬢、無事にイサリビに乗船しました。」
エルヴィン：「先ずは一安心」だな。さて、三日月と・・・・ 後から来る昭弘含めて、助けに行きますか！」
エルピス：「ご主人様、我々が介入してしまうと、改変罪に問われますが・・・・・・」

エルヴィン：「助けた恩を返さずしてどうする？それに、「エヴァンスが送った駒」も、そして、「弟（イーサン）の魂」も……」

オルガ達はシャトルからイサリビに乗り込んだ。

ブリッジに入る。

オルガ：「状況は？」

チャド：「後方からオルクスの船が、まだ付いて来やがる！」

ダンテ：「ガンガン撃って来てるぞ！」

オルガ：「こっちからも撃ち返せ！」

緊迫した状況など知らず、トドが話しかける。

トド：「おい！何でその船がここにいる？「静止軌道で合流」だった筈だ！」

オルガ：「これまでにお前が信用に足る仕事をしたことがあったか？シノ、ソイツを倉庫にでもぶち込んどけ！」

シノに連行され、トドは倉庫に放り込まれた。

倉庫の隣が、エドワーズご一行の部屋とは知らず・・・・

オルクス艦の砲撃で揺れるイサリビ艦内。

アトラ：「ひゃっ！」

クーデリア：「あっ！」
ビスケット：「クーデリアさんは危ないから奥にいて下さい！アトラも！（＞＿＜）」
クーデリア：「私はこの目で全てを見届けたいんです。」
アトラ：「あっ、三日月が！」
ビスケット：「遠距離で撃ちあっている間は大丈夫。ＭＳのナノラミネートアーマーは撃ち抜けない。」
アトラ：「でも・・・（三日月ひとりじゃ・・・）」
オルガ：「（仕方ねぇな・・・）ヤマギに「アレ」を準備させろ！」
ビスケット：「「アレ」って・・・「売り物」を使う気？」
オルガ：「ここで死んだら商売どころじゃねぇ。昭弘、頼めるか？」
オルガの依頼に、昭弘は黙ってうなずくしかなかった。
オルクスの「後詰め」を捉えたエルヴィン。
オルクス艦隊後詰めオペレーター：「エイハブウェーブ反応確認。我が艦の後ろにいます！」
オルクス後詰め艦隊長：「何、新手のＭＳか？」
突然の珍客に混乱する後詰め。
エルヴィン：「さて、少し手助けしよう。」

エルピス：「ご主人様？」

エルヴィン：「鉄華団が待ち受けるのは、後にも先にも退けない「茨の路」。「志半ばで倒れ逝く者」もいれば、「約束を果たさんが為、己が身体を捧げてまで成就せんとする者」もいる。しかし、彼らが望むべき「真の結末」、「たどり着いたその先で、みんなでバカ笑いするような世界」の為、たとえ天の意思に冒涜する行為を侵してまでも、俺が為してみせる!!そして・・・・ デイジーを・・・・ この手で仕留めるッ！エルピス！ツインバスターライフルで、オルクスの後詰めを屠るッ！」

エルピス：「宜しいのですね？・・・・ ご主人様の一存に委ねます。ターゲットマーク完了。」

エルヴィン：「受けるがいい！不死鳥の・・・ 業火をッ！」

バシュウウウン!!

ドゴォォォォン!!

イサリビに張り付いていたオルクスの後詰め艦隊が、ゼロ炎のツインバスターライフルの一撃で、火星のチリとなった。

エルヴィン：「さて、三日月・オーガスの救援に向かうか。」

バルバトスのもとへ、炎の鳥が向かった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―５：邂逅、炎の不死鳥と灰塵の軍神

コーラル：『くっそぉ、チョコマカとぉ…　援護しろ！接近戦をやる！』
接近戦を仕掛けるグレイズ。交わしながらコーラル目掛けて攻撃し続けるバルバトス。
撃ち合いに縺れる。
コーラル：『私のオッ、邪魔をするなぁっ！（ドゴォォォォン！）ぐぬぅ？』
何処からか砲撃があった。三日月が見渡す。
昭弘が乗ったグレイズ改が合流した。
コーラル：『ぐっ、何だぁ？グレイズだと？あの機体、確か……』
ガァン!!
バルバトスの攻撃がヒット、トドメさした。
コーラル・コンラッド、撃墜。
一般武官Ｇ：『コーラル三佐～！』
一般武官Ｈ：『そんな…　指令まで…』
アイン：「またアイツに？」
一般武官Ｈ：『アイン、もう１機来る！援護を！』
アイン：「なっ！この「リアクターの反応」は…　くっ、『クランク二尉の機体かァァァッ！』」

一般武官H：「待てアイン！お前まだケガが！」
アイン：『このケガくらい、何のこれしきイィッ！』
グレイズ改に向かって、アインが迫る。
三日月：『足の止まったのからやろう、援護頼む。』
昭弘：『（無茶言うな、三日月（。。；）／（――；））待てよ！俺はまだこれに慣れてねぇのに！』
三日月：『後で教官に、特別教練受けてもらったら？んじゃ、行ってくる。』
昭弘：『さらっと「援護頼む」と言うとは、三日月の野郎！こっちは阿頼耶識がねぇんだぞ！』
と、三日月に対して文句をぶつぶつ言いながらも、アインの急襲を砲撃でフォロー、三日月を何だかんだ言って助けた。
バルバトスが、グレイズを翻弄し撃墜。そこに、紫の見慣れぬグレイズが姿を現した。
三日月：『新手？』
ガエリオ：「コーラルめ。我々を出し抜こうとしてこのザマか。グレイズを既に数機失ったが…　見てくれよりは、多少は出来るようだな。」
一般武官A：『ガエリオ特務三佐、我々も加勢致します！』
ガエリオ：「ほう、生き残りか？まぁ良い。忌まわしき宇宙ネズミ共に、戦いの作法を

教えてやろう。さぁ、狩りの時間だっ！」
ガエリオの指示のもと、生き残ったアーレス隊のグレイズが鉄華団に襲いかかる。すると…
ズキュュュン！
ズバキュュゥン！
アーレス隊の残存兵を、一瞬にして多数撃墜された。
ガエリオ：「何だ、今の銃撃は？何処からだ？」
エルピス：「ご主人様、ＭＳ反応を確認。グレイズの高機動型モデル・「シュヴァルベ・グレイズ」です。」
エドワーズ：「おいおい、ここでシュヴァルベ？久々に見たよ、「上官クラス」の機体かぁ……」
思いもよらぬ助太刀、Ｇ―３とゼロ炎だ。
一方、ＧＨサイド。
オペレーターＡ：「ボードウィン特務三佐、アーレス隊の残存兵と合流し、会敵しました。」
オペレーターＢ：「更に敵側に増援、エイハブウェーブ反応がない機体が１機含まれています。」

マクギリス：「それにしても見ない機体だな…　照合出来るか？」
オペレーターA：「距離ありますが、エイハブリアクターの固有周波数は拾えています。波形解析…　データベース照合中…　出ました！」
照合結果に驚くマクギリス。
マクギリス：「「ガンダム・フレーム」だと？しかも2機？」
オペレーターA：「はい、まず1機目の固体コードは「バルバトス」。2機目は……　容姿が違いますが…　固体コードは「フェニクス」です。ただ3機目は……　データベースに対象の固体コードはありませんでした。ただし、左腕に記されているマーキングを解読した結果、灰色の固体、むしろ機体名は……
「G―3（ジースリー）ガンダム」との事です。」
オペレーターC：「マッチングエラーでしょうか？2機のガンダム・フレーム機は、厄祭戦時代の古い機体ですよ？」
マクギリス：「いや、必然、かもしれんな…」
オペレーターC：「ファリド特務三佐？」
マクギリス：「ソロモン七十二柱の悪魔（其の名）を冠する機体は、幾度となく「歴史の節目」に姿を現し、人類史に多大な影響を与えてきた。（無論、いずれ「俺」が手にする「GHの絶対的象徴」たる、始祖・「アグニカ・カイエルの魂」が宿りし「バエル」、ウォー

レン家の「アスタロト」、ナディラ家の「グレモリー」、ボードウィン家の「キマリス」、ザルムフォート家の「ダンタリオン」もまた然り・・・）火星の独立を謳うクーデリア・藍那・バーンスタインが、それを従えているのだ。だが、「Ｇ―３ガンダム」とやらは別だがな。（エイハブウェーブすら感じなかったあの機体、実に興味深い。）船を任せるぞ、「私」も出る。」

監査局士官：「ファリド特務三佐？」

ＭＳ格納デッキへと向かうマクギリス。おもむろに端末を出し、ある士官に連絡を入れた。

マクギリス：「石動か、あぁ「私」だ。実に興味深い事案が発生して・・・・　私は今、火星圏にいる。火星支部の「残務処理」を行っていてね・・・・　遂に、歴史の表舞台に蘇ったのだよ、「ガンダム・フレーム」が、悪魔の名を冠する伝説の機体がね・・・・　まだ「早めなくて良い。」・・・・・・　悟られぬよう、地道に準備を続けて貰いたい・・・・　「私」はこの辺で失礼する。

（通話を切る。）

遂に、伝説の悪魔と渡り合える！」

アグニカ賛美的な事を頭の中で妄想しながら、シュヴァルベに乗り込むマクギリス。

マクギリス：「マクギリス・ファリド、シュヴァルベ・グレイズ、出るぞ！」

（イメージＢＧＭ：「無双ＯＲＯＣＨＩ」より「ＦＵＳＩＯＮ！」）

三日月：『教官？それに、赤い鳥みたいなヤツ誰？』

エドワーズ：「三日月君、そこまで詮索しないでほしいなぁ（（（^ ＿ ^ ；）そして、アンタは何者だい？」

エルヴィン：『私は、ダニエル＝グレン・エルヴィン。訳あって「ある囚人」を追っている。救出してくれた礼も予て、鉄華団に加勢しよう。』

エルピス：「ご主人様、敵増援多数接近。数は１０。恐らく総力戦になるかと思われます。」

三日月：『あっ、また増えた。』

エルヴィン：『まさか・・・　総大将の「弔い合戦的な感じ」だろ？』

エドワーズ：「昭弘君、まだ機体に「馴染めていない」から、引き続き後方支援任せる。戦いながら慣らしていった方が、昭弘君の利にかなっているかもしれない。出来るね？」

昭弘：『教官がそう云うのであれば・・・　了解！』

エドワーズ：「三日月君は、俺と一緒に「あの紫のシュヴァルベ」を・・・」

三日月：『分かってる、ヤるんでしょ？』

エドワーズ：「そうだな。ダニエル、とか言ったな？アンタはどうする？」

エルヴィン：『お前たちのサポート、かな？』
エドワーズ：「ドライ過ぎる返事だな、オェ。」
エルヴィン：『ウカウカしてると、増援の一斉掃射来るぞ。』
エドワーズ：「そうと決まれば・・・　行動開始ッ、って、三日月君、先走り過ぎ！（＞＿＜）」
各機散開し、攻撃再開。

三日月のバルバトスは、ガエリオのシュヴァルベ・グレイズと対峙。
ガエリオ：「落ちろッ！」
ライフルを撃つも、交わしながらシュヴァルベに迫るバルバトス。
三日月：「無駄。」
メイスを振りかぶり、幹竹割りを仕掛けるも・・・
ガエリオ：「何て力任せなッ！ちィッ！」
後方に緊急回避。両者拮抗状態が続く。
そんな一進一退の攻防を、俯瞰しているマクギリスは・・・
マクギリス：「あれか・・・　ガエリオめ、ああもおかしな避け方をされてはムキになるのも分かるが・・・　こちらの照準システムに異常はない。やはり「奴」の問題か。姿勢制

御プログラム特有の回避パターンは出ない。まるで「生身のような」重心制御が、回避動作を最小限に留めている。「空間認識能力の拡大」を謳ったものだったか・・・「阿頼耶識システム」とは・・・（ピーピーピー）何ッ！」

ズキュユユン！

ボガァァンッ！

マクギリス：「何処から狙って来た？」

我に返ったマクギリス、モニターで確認。その先には？

マクギリス：「エイハブウェーブ反応がない？やはり・・・「あの機体」か？」

エドワーズ：『随分と余裕ブッこいてるようだな、「蒼嵐の貴公子」さんよォッ！』

灰色の角付きのＭＳ。Ｇ―３だ。ビームサーベルを抜き、一騎討ちに打って出る。

エドワーズ：「ご自慢のライフルが身代わりになって、良かったじゃないの？」

マクギリス：『「ビーム兵器を使うＭＳが、火星に存在する」と云う噂は、本当だったらしいな。』

エドワーズ：「アンタの事だ・・・『ビーム兵器の技術は、厄祭戦以前の、Ｂ．Ｄ．暦の技術、「モビルアーマー（以降ＭＡ）」のみ装備された兵器』と云う認識があるようで、『再現不可能の「喪われた技術」扱い』らしいな、ここではな！」

マクギリス：「何故分かる？ＧＨの一部の人間のみ知っている事を？」

エドワーズ：『さぁな!!』
両者、激しく撃ち合う。
一方、イサリビサイドは、オルクス艦隊に追いたてられ、絶対絶命のピンチに晒されている。振り切ろうとしても、真っ向から砲撃を仕掛けようとしても結果は同じ、イサリビが撃墜されてしまう。そこでオルガは、「資源採掘用の小惑星を使って、回避してみる」と云う無茶な大博打に打って出る事にした。
ビスケット：やるにしても、問題は離脱の方法だ。船体が振られた状態での砲撃はアテに出来ない。誰かがＭＷでアンカーの接続部に取り付いて、爆破するとかしかないけど・・・・」
シノ：「んなの自殺行為だ！誰がやんだよ？」
オルガ：「それは勿論（俺が・・・・）」
ユージン：「てめぇは大人しく座ってろ！」
オルガ：「ユージン？」
オルガを制止したのは、ユージンだ。
ユージン：「大将」っつうのは「でっかく構えとく」もんだろうが。「ノコノコ出ていく」なんて「みっともねぇ真似」は俺が許さねぇ！テメェらもだ!!なんでもかんでもオルガに頼ってんじゃねぇぞ！」

シノ：「んだとぉ!?（#、皿、）」

一触即発の空気が漂うブリッジ内。その空気を打ち消すかのように、誰かが入ってきた。

クランク：「君たちなりに良い作戦かもしれんな。」

オルガ：「クランクのオッサン？それに、ダンジまで？」

ダンジ：「すいません、団長。心配になって、来ちゃいました。」

クランク：「相当のリスクを背負った一撃離脱」か・・・ だが、ユージン君の言った通りだ。オルガ・イツカ、お前はあくまでも「団長」だ。団員たちを信じ、待たなければならないんだ。ここは、団員たちを信じ、委ねるんだ。かつての私の教え子のような若い命を、ここで失う訳にはいかんのだ。」

ダンジ：クランクさんが、団長の事を思って言ってるんですよ！団長、立ち止まる事も、必要なんじゃないですか？」

はっ！と我に返ったオルガ。

オルガ：「オッサンやダンジに言われちまうと・・・ まるで教官に怒られてるようだな・・・」

ビスケット：「オルガ？」

オルガ：「何でもない、独り言だ。ユージン、やれんだな？」

ユージン：「俺らに黙って船まで用意しやがって、俺にも仕事させろ！」
オルガ：「フッ、そこまで言うなら見せ場は譲ってやるよ。」
ユージン：「任せろ!!」
ユージンは、足早にＭＷ格納庫へ向かった。
オルガ：「オッサンに助けられちまったな、教官かと思ったよ。」
クランク：「時には年長者の意見も聞き入れるべきだ、そうは思わんか？」
オルガ：「あぁ、全くだ……　お前ら準備しろ！」
チャド・ダンテ：「了解ッ！」
オルクス艦オペレーター：「敵艦、高度を上げます！」
オルクス：「小惑星を盾にする気だろうが……　無駄な足掻きだ、撃ち続けろ！」
クランク：「エドワーズ聞こえるか？」
エドワーズ：『どうしましたクランクさん、今「蒼嵐の貴公子」とじゃれ合ってますけど何か？』
クランク：「何、ファリド特務三佐だと？」
エドワーズ：『それがどうかしましたか？』
クランク：「すまない、イサリビの方が今大変な事になってる。」
エドワーズ：『大変な事って？』

クランク：「今、オルクス艦隊の追撃を受けている。それを回避すべく、資源採掘用の小惑星にアンカーを撃ち込み盾代わりとし、追撃を交わすようだ。」
エドワーズ：『無茶な事を？オルガ団長は正気か？そんで、アンカーを射出して、かわすのは分かるんですが、アンカーの抜錨のフォロー、誰が出るんですか？まさか、「オルガ団長が行く」なんて：』
クランク：「ユージン君が行くらしい。」
エドワーズ：『はぁッ!?七星（ナナホシ）君がぁ？』
クランク：「今、ユージン君がＭＷに乗って準備している。」
エドワーズ：『ここで死なれては元も子もないからなぁ：：　取り合えず、団長のフォローを、こっちはこっちでかなり忙しいから、イサリビは任せます！』
クランク：「了解した、エドワーズ、御武運を！」
そして、小惑星にアンカーを撃ち込み、主砲と閃光弾を掃射、混乱するオルクス艦、その傍らでユージンのアシストもあり、オルクス艦隊は壊滅。
一方：：
ガエリオ：「チョコマカと、すばしっこいヤツめ！」
左腕のワイヤーアンカー射出。バルバトスを絡めとろうとするが、上手くかわした。
三日月：「うっ！（ガントレット「だけ」持ってかれたか。）」

マクギリス：「致命傷を避けたか、良い判断だ。」
エドワーズ：『隙がありまくりなんだけど！』
青いシュヴァルベと灰色のＧ―３が、まだ激しく打ち合っている中、バルバトスと紫のシュヴァルベは？
ガエリオ：『大人しく投降すれば、然るべき手段で貴様を処分してやるぞ。』
三日月：「投降はしない。」
ガエリオ：『ん？』
三日月：「する理由が・・・　ない！」
ガエリオ：『ガッ！』
滑空砲を放つも、回避するガエリオのシュヴァルベ。間髪入れずに、再びワイヤーアンカー射出。バルバトスの滑空砲の砲身を絡め取った。抗うバルバトス、手繰り寄せる紫のシュヴァルベ。
ガエリオ：『そのクソ生意気な声・・・　あの時のガキかぁ！』

ー「方舟」出立の前の時間まで遡る。
（イメージＢＧＭ：　オリジナルサントラ１より「Ｄｅｓｅｒｔ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｄｅｓｅｒｔ　」）

火星：クリュセ均衡にある桜農場。桜・プレッツェルが経営している農場だ。
クッキー・クラッカー：「ああっ……」
何の因果か知らぬが、身なりの良い紫の髪の毛の青年の胸ぐらを、三日月が掴んで、今から殴り倒そうとしていた。
クッキー・クラッカーが必死に弁明、彼女らが飛び出してしまった所を、間一髪の所で回避。車から降りてきた青年に対し、三日月が殴り倒そうと云う事態が発生した。
桜：「いい加減にしないか、この慌て者！」
三日月：「（はっ！）桜ちゃん!?」
桜：「カッとなるとすぐこれだ。気をつけな。」
三日月：「ごめん、桜ちゃん…」
桜：「謝る相手が違うだろ！まったく…」
彼女らの必死の弁明と、桜の制止もあり、青年の胸ぐらを離した。車の中からもう一人、金髪の青年が出てきた。
紫の青年・ガエリオに対し三日月は謝ったが、「何がすいませんだ！」と謝罪の旨を受け入れなかったが、金髪の青年に制止され、ようやく受け入れた。
青年らは、三日月の背中に施された「モノ」に目が行った。
ガエリオ：「おい、貴様…　その背中のは何だ？」

三日月：「ん？」
金髪の青年・マクギリスは呟いた。
マクギリス：「「阿頼耶識システム」…」
ガエリオ：「あらやし…？（何だったっけ？）」
マクギリス：「人の身体に埋め込むタイプの「有機デバイスシステム」だな？未だに使われている、と聞いたことはあったが……」ー
三日月は思い出した、「あの時のアイツ」だ！
（イメージＢＧＭ：オリジナルサントラ１より「Ｄｅｆｅｎｄｅｒｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｗｉｌｄ　）
三日月：『そういうアンタは……「チョコレートの隣の人」！』
ガエリオ：「ガエリオ・ボードウィン」だ！火星人は…　火星に帰れぇぇー！」
バルバトスを火星に投げ捨てようとする紫のシュヴァルベ。
ガエリオ：『あっ！気でも振れたか「宇宙ネズミ」ガッ!?ウッ!!』
ダァン！
紫のシュヴァルベの左腕に滑空砲が命中。ワイヤーアンカーがもぎ取られた。
灰色のＭＳの追撃を振り切って、青のシュヴァルベが駆けつけた。
マクギリス：「ガエリオ、大丈夫か？」

ガエリオ：『すまないマクギリス、こっちは掠り傷だ。』
マクギリス：「なら良い。正体不明のＭＳに追い詰められているようだが・・・　まだ行けるか？」
ガエリオ：『当然だ！』
青のシュヴァルベと合流した紫のシュヴァルベ。
彼らの下では、バルバトスとグレイズ改を回収したイサリビが通過して行った。
三日月：「そうか・・・　あっちは「チョコレートの人」か・・・・」
Ｃｈａｐｔｅｒ―６：未知の驚異
エルピス：「ご主人様、敵の追撃激しく、かわしきれません。」
（イメージＢＧＭ　：ガンダムビルドファイターズＯＳＴより「メイジン～通常のフラメンコの６倍の情熱～」）
エルヴィン：「仕方あるまい、こっちも打って出る！エルピス、変形だ！」
エルピス：「了解しました、ウイングガンダムゼロ炎、ＭＳ　モードに変形します。」
ＧＨアーレス隊武官：『何が始まるんだ？』
唖然と見つめる中、ゼロ炎が垂直に飛翔、瞬時に人型のＭＳ形態に変形した。
アイン：『あのＭＳ、「変形した」、だと？』

驚くＧＨ勢。「単体で人型に変形するＭＳなんてあり得ない」と云う空気が漂っていた。

ＭＳ形態に変形したゼロ炎、瞬時にツインバスターライフルを連結、狙いを定めた。

「狙われている」事を知らないＧＨ勢。

エルヴィン：「さぁて、消えてもらうよ。（カチッ。）」

ズキュュュン!!

「別の世界」では、スペースコロニーを破壊出来る位の威力を誇るツインバスターライフルのフルバースト射撃を受け、アーレス隊は瓦解するも、辛うじてアインは生き残った。

アイン：『何だったんだ、今のは？（ピーピーピー）何、ＭＳ反応？何処から？（ズキュュュン！）ウッ！そこか？』

灰色のＭＳの狙撃を喰らい、のけ反った。

アイン：『良くも同胞をォォッ!!』

エドワーズ：「クソッ！ビームライフルだけじゃ間に合わないか？」

マクギリス：「ガラ空きだぞ！ガエリオ、仕留めるぞ！」

ガエリオ：『全然状況が飲み込めてないが・・・・貴様も「火星人」か！大人しく火星に・・・・引っ込めぇぇッ！』

アイン・マクギリスはバトルアックスを、ガエリオはスピアを構えて吶喊、それぞれ

構えて接近するが……

ブゥオン！

ズガァン！

ウイングゼロ炎の剣：カレドヴルッフ炎・G―3のビームサーベル双方からの剣圧で、互いに吹き飛ばされたではないか！

アイン：『アルダ隊長が言ってた「光るトーチ」…　ビーム兵器、だと？』

ガエリオ：『マクギリス、何だアイツらは？我々が見たことのない兵器を使っているようだが？』

マクギリス：「知らなかったのか、ガエリオ。あの2機のＭＳ　、さっきお前が相手していた「バルバトス」と同じ、「ガンダム」の名を冠するＭＳだ。」

ガエリオ：『「ガンダム」だと……　厄祭戦時、初代ボードウィン卿が乗り、アグニカ・カイエルが乗ったとされるあの……』

マクギリス：「そうらしいが……　我々は今後、あのＭＳと戦う事になるだろう。特に、「G―3ガンダム」とやらには、要注意だ。刃を交えた「私」には分かる。どうやら潮時だな。ガエリオ、退却だ。残存兵も併せて回収、立て直すぞ。」

ガエリオ：『ネズミ共を逃がしたのは誤算だが、あの灰色のガンダム、油断ならんな！

（そろそろ、「あの機体」を引っ張り出す頃合いかな？）』
アイン：『「Ｇ―３…　ガンダム」か……』

退却するＧＨ。
エドワーズ：「勝った、ようだな。ダニエルとか言ったな。俺たちも、イサリビに帰還するぞ。」
エルヴィン：『そうだな…』
イサリビの方向に向かい、２機のＭＳが飛び去って行く。
そして……

その状況を、謎の「戦闘機」が見守っていた。飛び去って行く様子を確認した後、溶けるように静かに消えた。

こうして、鉄華団は、ＧＨアーレス隊・オルクス商会を撃破。「景気の良い門出」となった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―７：アレン・クランツ

イサリビに帰還したG―3とゼロ炎。
格納庫には既に、バルバトスとグレイズ改が整備ドック入りし、メンテナンス作業に入っていた。
雪之丞：「さっきまで鳥のような姿してたのが、MSの姿になるだなんてなぁ・・・」
驚きを隠せない雪之丞。一方、G―3は、と云うと・・・・・
ダンジ：「きょーかん（ーー；）？やっぱビームサーベル抜いたでしょ？　しかも3回。ちゃーんと、この目で、しっかり、見てましたよ。「証人」もいるので、言い逃れ出来ませんよ？（――#）ね、クランクさん。」
クランク：「そ、そうか？言及したい所だが、まさか「監査局」の、且つ、「名家の息子達」と「教え子」を一気に相手取るとはな・・・・　感服した。」
ダンジ：「認めるんですか、そこ（――#）」
エドワーズ：「前も言ったけど、仕方ないでしょダンジ君。要は、「勝てば良かろう！」だから、ね。今回は、「シュヴァルベと合間見えた事」が大きな戦果かな？」
ダンジ：「しゅ、「しゅう”ぁるべ」って何ですか？」
エドワーズ：「GHのMS・グレイズの高機動型「シュヴァルベ・グレイズ」、さっき俺がG―3でやりあった、青と紫のMSいたでしょ？」
ダンジ：「あぁ！さっきのですよね！」

エドワーズ：「そうそう！それが「シュヴァルベ・グレイズ」ね。『シュヴァルベに乗れるのは、エースクラスか上官クラスじゃないと授与出来ない機体』なワケさ。そうですよね、クランクさん。」

クランク：「あぁ、そうだ。エドワーズの言ってる事に間違いは無いが・・・　ちなみに、グレイズ系統のＭＳは他に何かあるか知ってるか？」

エドワーズ：「ええ、勿論！『騎士のような姿の「グレイズリッター」、グレイズの廉価版の「フレック・グレイズ」』ですよね？（それと、『阿頼耶識システム登載の試験機「グレイズ・アックス」』とかもね・・・　公表したいけどさ、ぐへへへ（　？▽？））」

ダンジ：「きょーかん、いま何か企んでたでしょー（ーー；）？」

エドワーズ：「べ、別にぃ～・・・（　３、）」

ウイングゼロ炎は、と云うと・・・・・・

エルヴィン：「何とか切り抜けられた、か。」

雪之丞：「おう、生きて帰ってきたか。救出した時は、かなり疲れきってたのに、ＭＳと同様にタフだな。」

エルヴィン：「それほどではない。だが、敵の方が案外「そうでもなかった」ような強さだったがな。」

雪之丞：「結構上から目線だな。メンテナンスしなくて良いのか？」

エルヴィン：「大丈夫だ、「ナノスキン」を登載してる故、自動修復が可能だ。自然に治る。」

雪之丞の左肩をポンと叩いて、格納庫を去って行った。

雪之丞：「な・・・「なのすきん？（@＿@）」何が何だかさっぱり分からなくなって来た・・・・・」

時同じく、トドを入れたカプセルを射出。ＧＨのビスコー級クルーザーに届けられたと云う。

イサリビの食堂では・・・・・

（イメージＢＧＭ：オリジナルサントラ２より「Ｄａｉｌｙ　ｌｉｆｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｔｅｋｋａｄａｎ」）

エドワーズ：『別の名前』を名乗ってヤツらを欺く、と云う手を使いましょうか？」

ダンジ：「教官それイイですよ！ね、クランクさん。」

クランク：「そ、そうか？本当に「バレない」、だろうな？」

シノ：「エドワーズ教官がそう云ってるから、いいんじゃねぇの？なぁオルガ。」

オルガ：「ま、まぁ、な。クランクのオッサンが「生きている」と云う事を知ってるのは俺たちだけ、だからな。」

ビスケット：「確かに・・・・・どうします？バレないような「別の名前」、何にします？」

ＧＨを欺く為の、クランクの新たな名前を決める会議が始まった。（大喜利みたいになってるがｏｒｚ）

シノ：「んじゃ～…… 『ギャラクシー・スター』（？０？）／」

エドワーズ：「ノルバ君、なにそのキラキラネーム？（。。；）＼（――；） ボツ。次ッ！」

シノ：「そんなぁ、イカしてるのにぃ～（＞＿＜）」

ユージン・ダンテ：「「誰も聞いてねぇよ（。。；）＼（――；）」」

昭弘：「『クランク・アルトランド』ってのはどうだ？」

エドワーズ：「昭弘君、ムリしてないか？オルニチン入りのプロテイン飲んで、脳ミソも超回復した方がいいんじゃない？次ッ！」

ビスケット：「『ゼント・プレッツェル』って、どうです？」

エドワーズ：「うーん…… 桜ばあ様に了解得てるの？次。」

三日月：「んー、『教官の側にいる人』」

エドワーズ：「ニュアンスは良いけど惜しいねぇ…… でも何か違う、つぎ。」

アトラ：「う～んと…… 『フランツ・ミクスタ』はどうですか？」

エドワーズ：「イイ線いってるけど、何かなぁ…… でも、アトラちゃんの発想力には脱帽ものだ。つぎ。」

フミタン：『クランク・アドモス・バーンスタイン』は、どうでしょうか？」
エドワーズ：「フミタンさん、長すぎて覚えられません、次。」
フミタン：「お嬢様の番ですよ。」
クーデリア：「ああ、次は私でしたか・・・・『フランツ・ノアキス』は？」
エドワーズ：「クーデリア嬢も、イイ線行っているようだが、何か得心行かないなぁ・・・・ 次。」
オルガ：「『ゼント・イツカ』ってのはどうだ。」
エドワーズ：「団長、一旦「止まれ」（。。 ；）／（――；）」
会議が難航する中、エルヴィン登場。
エルヴィン：「これならどうかな？エルピス、ビジョンを。」
エルピス：「かしこまりました。」
左腕のガントレット状端末から、３Ｄモニターが出てきた。そこには、『ＣＬＡＮＫＺＥＮＴ』と、クランクの名前が映し出され、一文字ずつ、右手でスワイプし始めた。
エルヴィン：「まったく、イイ案が浮かばないようだから・・・・ これでどうだ、クランクさん？」
クランク：「ああ・・・・ これでなら、バレずに済む！」
驚く一同。

そこに標示された「新たな名前」は……

『ＡＬＥＮ　ＣＬＡＮＴＺ（アレン・クランツ）』

クランクが、ＧＨに「欺く」為の、新しいフルネームだ。

ＬＯＧ―侵：第２話・謀略の宇宙（そら）

Ｃｈａｐｔｅｒ―８：蠢く何か

（イメージＢＧＭ　：Ｗｉｎｇｓ／山本彩）

マルバ：「すいません、名瀬さん！何から何まで……」

名瀬：「すまないねぇ、マルバ。「何かの縁」もあるし……　困った時はお互い様、だろ？」

マルバ：「そ、そぉですよね。あは、あは、あはははは……」

イサリビとは別の宙域に、逃げ延びたマルバ・アーケイ。

逃げた先は……

木星圏の複合企業・「テイワズ」の下部組織にして、運送業を任されてる「タービンズ」だ。その彼らの船・「ハンマーヘッド」に回収、保護されている。

そして、後にマルバは身をもって知ることとなるだろう。彼が手塩に育てた「三番組」に叩きのめされる、と云う事を……

イサリビが飛び去った火星軌道上…

アルダ：「結局……　俺は……　ここで……」

アルダの命が終わろうとしていたその時。

「空間の歪み」が発生し、その中からグレイズの頭が付いた謎のＭＳが姿を現した。

ザシュッッッ!!（アルダ：がはッッッ！）

謎のＭＳのコクピットから伸びた触手に、アルダを突き刺し、吸収した。

更に、「書き替える」ように、体を再構築。

そして、謎のＭＳのコクピットに、「彼」がこうつぶやいた……

アルダ”だった”男：「クハハハハハ……　やっと手に入れたぞ!!この「世界」に順応出来る「体」を!!さぁて……

蹂躙してやろうか。
その為に、協定を結びに行くか……

『ブルワーズ』に、な……

行こうか……

「ヴァレフォール」!!
「ヴァレフォール」なる名のＭＳは、モノアイを光らせ、アルダが乗っていたグレイズを左足でちょんと蹴飛ばし、左腕のキャノン砲を発射、チリ一つ残さず爆散させ、その場

を立ち去った。

Continue to next LOG……

第３話・激突！・鉄華団　ＶＳ　タービンズ・前編～衝突！～

ＬＯＧ―「侵」：第３話

激突！鉄華団　ＶＳ　タービンズ・前編～衝突！～

Ｃｈａｐｔｅｒ―１：嵐の前の静けさ

タービンズ母艦・ハンマーヘッドのブリッジでは……

マルバ：「頼みますよ、名瀬さん！」

名瀬：「アンタの依頼は聞いてやるが……　着の身着のまま逃げて来た、だなんて、それでも「社長の器」かよ、マルバ？」

と、白のセットアップスーツに白の帽子を被った色男、タービンズのリーダー：名瀬・タービンが、マルバに詰め寄る。

マルバ：「「社長の器」だなんて……　そりゃないですよ？」

名瀬：「ヒューマン・デブリの権利書関係は「持っていなかった」のは致し方ない、として……　手塩に育てたガキ共に会社乗っ取られるわ何やらで、ヤられ放題だなぁ……　情けないにも程があるぜ。なぁ、アミダ」

アミダ：「全くだよ名瀬。「あの時の威勢」は、何処に行ったのかねぇ？」
マルバ：「あ、アミダさん……　それだけは勘弁を……」
名瀬：「アミダ、取り合えずその辺にしとけ。ま、そのガキ共とこれから対峙する「みたい」だし。ここは任せときな。テイワズきっての武闘派の底力、しっかり目に焼き付けなよマルバ」
名瀬がそう言うと、マルバはただただ頷くしかなかった。

後に、とんでもない報復を受けるとは知らずに……

一方、イサリビでは……
ダンジ：「きょーかーん、何難しい顔してるんですかぁ～？
しかも……「三日月さんの」バルバトス眺めて……」
エドワーズ：「ナディさんや、ヤマギ君も、そんでもってオルガ団長含め、みんな知らないんだよなぁー……「ガンダム・フレーム」の稀少性と、「厄祭戦」について……」
ダンジ：「そんなに珍しいんですか、あのＭＳは？」
せっせこＧ―３のメンテをしつつ、向こうでヤマギと雪之丞が話している様子を眺めながら、エドワーズは淡々と話し始める。

エドワーズ：「確かに「この時代」じゃあ、ガンダム・フレーム機は「骨董品」扱いになるくらい、稀少価値が高いんだわ。その価値を上げるに相応しい要因となったのが「この技術」が投入されてるからだ」

ダンジ：「「この技術」って?」

エドワーズ：「ＭＳや艦船、スペースコロニーに必ずと言って良いほど積んである、半永久機関であるエイハブリアクター。ソイツを2基登載しているだけあって、並列稼働させる事が出来る、かなりスゴい機体なんだわ…」

ダンジ：「え、２基も?1基だけで充分動かせますけど?」

エドワーズ：「ま…　まぁ、な…　(((^ _ ^ ;) 厄祭戦後、ＭＳとエイハブリアクターの製造権限は、ＧＨが牛耳ってるようなものだし、火星圏や圏外圏には、ＭＳをイチから作りおこす技術や詳しい資料は、無いらしいんだわ。そりゃナディさんがアタマ抱える理由、分かるような気がする……　昭弘君のグレイズ改あるじゃない?」

ダンジ：「昭弘さんのグレイズが、どうかしましたぁ?」

エドワーズ：「あれさぁ…　リアクター1基だけで、どうにかなってるんだよねー。火星軌道上で刃重ねたシュヴァルベ・グレイズ同様、リアクター1つで何とかなってるんだわ。今の時代に出回ってるＭＳ　の「主流」かな?」

へー、と頷きながらも、推進剤補給を済ませるダンジ。

G―3の整備が終わった。部屋へと戻るエドワーズとダンジ。

ダンジ：「教官、さっき話に出てきた「厄祭戦」って何ですか？」

エドワーズ：「ダンジ君、良い質問だね！」

エドワーズは、頭に埋め込まれた記憶チップのデータを引っ張り出しながら、語り始める。

（イメージBGM：　オリジナルサントラ2より「Ｈａｓｈｍａｌ：Ｔｈｅ　Ｌｅｇｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｃａｌａｍｉｔｙ　Ｗａｒ」）

エドワーズ：『今から３００年前、Ｂ．Ｄ．　暦１００年に勃発した戦争さ。地球圏を皮切りに、月・スペースコロニー・火星圏・そして木星圏をまたにかけて勃発した、世界大戦かな？

事の発端は、地球圏で開発された無人兵器：ＭＡの暴走から始まり、地球全土に繰り出しては、ＭＡを中心に、ＭＷ　のモデルとなった、端末機がウヨウヨ暴れまくり、人間を見つけたら躊躇いなく始末する、と云う虐殺し放題、地球人類の４分の１を死に至らしめたらしい。そして宇宙は宇宙で、ＭＡと子機の群れが蹂躙、コロニーや木星圏まで勢力を伸ばしては、地球と同様、大虐殺を繰り広げたんだ。地球圏の地図を見れば分かるように、かつてオーストラリアの首都「だった」シドニーが、跡形もなく消えてしまった。今やシドニー「湾」だぜ……　恐らく、ＭＡ　２０機くらいで、シドニーを沈

めたんだろうよ。

そして長期化する戦況と、疲弊する当時の人類。どん底に陥った時、ある技術者の提案で、人類勝利のキッカケとなるモノが産まれた。それこそが‥‥』

ダンジ：「マンマシンインターフェイスシステム、通称「阿頼耶識システム」、そしてＭＳですよね？」

エドワーズ：「その通り！『ＭＡを倒す為に、人の姿を模した巨大兵器・ＭＳの開発と、それを乗りこなす為のシステムとして、「阿頼耶識」もとい、ＭＭＩが誕生したワケよ。

まぁ、ＭＡもエイハブリアクター積んでる、とは言えども、ガンダム・フレーム機とは比べ物にならない位の高出力で、且つ「封じる」システム』が、あるとか無いとか、だったかな？確か、えっと‥‥‥‥」

凝り固まるエドワーズ。ここでネタギレかと思いきや？

クランク（以降、アレン）：「『ガンダム・フレーム機に対しては相性が悪く、ＭＡに近付き過ぎると行動不能になってしまう。ガンダム側のリアクターは高出力状態になる分、パイロットに過度の負荷を与えてしまう為、安全装置が作動してしまう』のだ。「封じる」と言う例えが相応かも知れんな。『ＭＡの外見が、鳥のような姿から「天使」と比喩されるのに対しＭＳは、それらを狩る「悪魔」に準えた』ようだ」

と、補足説明をしながらクランクもとい、アレンと合流した。

エドワーズ：「クラン、じゃなかった・・・ アレンさん、どうしました？」
アレン：「ビスケット君がお前を探していたぞ？ブリッジに来てくれ、との事だ」
エドワーズ：「分かりました。ダンジ君、行くよ！」
ダンジ：「了解ッ！」
エドワーズとダンジは、急いでブリッジへと向かった。
ブリッジへと急ぐエドワーズ達を見送るアレン背後から、壁にもたれかけ、アレンの様子を伺うエルヴィンが話しかけて来た。
エルヴィン：「アレン、行かなくて良いのか？」
アレン：「うむ、そうだな。エドワーズ達に任せている。年長者は、黙って後ろから見守る立場、だからな」
エルヴィン：「フ・・・・ そうだな・・・・・」
やり取りを終えるとアレンは部屋へ、エルヴィンは格納庫へと向かった。
Ｃｈａｐｔｅｒ―２：再開と対峙
ブリッジに到着したエドワーズ。
エドワーズ：「どうした？何があったんだ？」
フミタン：「他船からの停止信号です」
オルガ：「他船？位置は？」

フミタン：「不明です」
ユージン：「ＧＨじゃねぇのか？」
ビスケット：「わからない。一体何処から？」
混乱するブリッジ内。その空気を鎮圧するかの如く、エドワーズが指示を出した。
エドワーズ：「皆とにかく落ち着け!!ＧＨだったら停止信号ではなく、向こうから停船命令の広域通信が来る筈だ。「俺らの船を知っている」と云う事は……　チャダ君、モニターに映せるかい？」
チャド：「教官、発信先の映像、モニターに映します」
モニターに映し出されたのは……
「見覚えのある顔触れ」だった。
マルバ：『ガキ共よぉ～！「俺の」船を返せ！』
ビスケット：「社長!?」
マルバ：『「人の」船を好き勝手に乗り回しやがって！』
オルガ：「マルバ・アーケイ？……　何でアイツが？」
マルバが何やら喚き散らしているようだ。
マルバ：『この「泥棒ネズミ」共が！「俺のウィル・オー・ザ・ウィスプ」を今すぐ返

せ、って……　エドワーズぅ!?Σ（。Д。）何でおめぇがここにいるんだよぉ?Σ（。Д。）』

溜め息を付いてから、画面越しの父親に向かって反論した。

エドワーズ：「結局アンタが頼って逃げる場所、と言ったら「やっぱりここだった」とはねぇ…　相変わらずだな親父、良くも悪くも…　な」

オルガ：（（（^ ―^ ；）（教官、何かキレてねぇか?）

ビスケット：（（（^ ―^ ；）（だろうね。社長が映った瞬間、何かが「吹っ切れた」ような危ない臭いが…）

エドワーズの言葉で、凍り付くブリッジ。オルガの後頭部にドデカイ冷や汗が滴り落ちる感覚と、背筋が凍る位の恐怖を感じた。勿論、ユージン・ビスケットも然り。

エドワーズ：「『親父の「亡命先」？何か見たことあるような「ブリッジ模様」なんだよね～?て事は…

「まさか」ね…

そんなワケないですよね?そこにいるの分かってますよ。

いい加減ダンマリ決めて、艦長席でふんぞり返ってないで、出てきたらいいじゃないですか?

木星圏に本拠を構えている、複合企業体・テイワズ直参組織にして、独自の運送網を

展開している運送部門：「タービンズ」の代表……

「木星の白マムシ」こと……　名瀬・タービン代表!』

（イメージＢＧＭ：　オリジナルサントラ１より「Ｔｅｉｗａｚ（Ａｃｃｏｒｄｉｏｎ　Ｖｅｒ．　）」）

驚愕する鉄華団一同とクーデリア。特にビスケットは絶句しつつ、開いた口が塞がらぬ表情に。

ビスケット：「教官、いま「テイワズ」って言いましたよね？あの「テイワズ」ですよね？」

エドワーズ：「あぁ、言ったよ。（　？▽？）「仁侠的なニオイが充満する」木星圏の「勝ち組」組織ね♪（　？▽？）」

更にドン引く一同。その一言を聞いた時点で誰しも思った事だろう。

「教官、何度も言うがいい加減に「止まって」くれ」と。

そんな事など気にも止めず、モニター越しの「白マムシ」が返答する。

名瀬：『……　ハハッ!俺の「臭い」を引き当てるとは……　流石「煉獄帰りの軍神」、

マルバの息子だ。息子と話したいからちょっとどいとけ。その代わり・・・・ 女共に手ェ出したら、承知しねぇからな・・・・』

マルバ：『あ、ああ、スイマセン・・・ アイツらを上手く説得させてやって下さいね・・・・』

マルバが名瀬にお願いし、立ち去った後、名瀬が映し出された。

（イメージＢＧＭ： オリジナルサントラ1より「Ｂｒａｉｎｓｔｏｒｍｉｎｇ 」）

名瀬：『これはこれはエドワーズ君、久しぶりだねぇ。つい先日あったくらいかな？』

エドワーズ：ご無沙汰です、名瀬代表。どうしたんですか？親父が・・・・ マルバ・アーケイがあなた方の船・「ハンマーヘッド」に乗船されている」じゃないですか。コレは、何の冗談ですか？」

名瀬：『冗談も何も・・・・ キミも知っての通り、一緒に仕事した事があってさぁ・・・』

エドワーズ：「その節は、親父共々お世話になりました。お礼をしたかったのですが・・・・」

名瀬：『律儀過ぎるなー、キミは。どこまで話したっけ・・・・ あ、そうそう！たまたま火星に立ち寄る用事があって、久々にマルバに会ったら・・・・ えっらいボロボロになってて、そんで「ＧＨと揉めて困ってるから、助けてやって欲しい！」と泣きついて来た訳だわ』

エドワーズ：「成程……　話の筋と、親父が考えている事が分かりました。つまりこう言う事ですよね、名瀬代表？」

火星以来の「口撃」が始まった。

エドワーズ：『「親父が名瀬代表に助けを求めた」すなわち……「テイワズに保護して貰う」と云う事。あのＧＨでさえも、介入出来ない位の技術力を保有している上に、独自でＭＳ持ってますからねぇ』

オルガ：「マジかよ!?Σ（。Д。）」

エドワーズ：『まさか親父がこんなこと言ってませんでしたか？「ＣＧＳの所有財産等を、全部タービンズで預かってほしい」って云う事を』

名瀬：『あー、「手助けの駄賃」として何とか、とマルバが言ってたわ。それで調べてみたら、ＣＧＳは廃業、全資産は「鉄華団」とかいうのに委譲されているようじゃねぇか。こりゃたまげたわ。一通り見させて貰ったが……　手続きも手馴れたモンだし、書面上に不備もなく成立してるし、抜け漏れも無い。ソコはイイんだけどねぇ……』

エドワーズ：『要するに……　親父に代わって鉄華団が持ってるものを全て返すように要求。言い方を変えれば「取り上げに来た」と云う認識として、捉えていいんですね？』

名瀬：『察しが早いねぇ、エドワーズ君。火星での彼らの戦闘、見させてもらったよ。

ガキにしちゃあ大したもんだし、勿論お前さんもな。資産の返還に快く応じてくれれば、悪いようにはしねぇし、うちの「傘下」で真っ当な仕事を紹介してやる。命を張る必要のねぇ、真っ当な仕事斡旋してやるから…　さ?』

エドワーズ：「評価して戴き誠に光栄ですが……　我々鉄華団には、大事な案件を遂行していまして……」

名瀬：『「クーデリア・藍那・バーンスタイン：「革命の乙女」の護送」の件ね。あぁ、この件は複雑でな、「マルバの資産」名義になってるけど?』

オルガ：「「資産」?どういう意味だ!?」

エドワーズ：オルガ団長、ここは落ち着け。取り乱してすいません、名瀬代表。何故にクーデリア嬢を?

確かに「CGS」として受けた依頼として、正式に引き受けたんですが……　そちらに保護して貰っている「クソ」親父がトンズラかましたせいで、引き受けざるを得ない事になりまして……　何か抜け漏れとかありましたか?ざっと目を通されたかと思われますが、何か不服な点あります?これだと話が拗れそうなので、自分がそちらに行きますので、対応お願いしますね」

名瀬：『あ、ああ……　考えておくが、その前にマクマードの親父にも確認しねぇとなぁ……』

エドワーズがブリッジを去ろうとすると……

オルガ：「教官、どこへ？」

エドワーズ：「最悪の事態」も有り得るから…　団長、対応は「冷静に、且つ慎重に」な」

意味深なアドバイスをオルガに告げた後、エドワーズはブリッジを去り、格納庫へと向かった。

格納庫へと向かう道中、立ちすくむエルヴィンとすれ違う。

エルヴィン：「エドワーズ、どうやら「交渉」は「決裂」したようだ。一戦交える事となったぞ。名瀬・タービンとやらが、こう言っていたぞ。

「生意気の代償、高く着くぞ。」とな……」

エドワーズ：「やっぱり…　な。」

エルヴィン：「分かっていたのか？」

エドワーズ：「まぁ、な。オルガ団長の事だから…　彼には彼なりの「信念」と「筋」は持っているからね……　でもそれが…　時として裏目に出てしまう場合があるんだよなぁ…　そして、三番組時代の「落とし前」、清算する意味合いもあるからな……ダニエル、お前も出るのか？」

エルヴィン：「戦力は多い方がいい。俺も出よう」

エドワーズ：「助かるぜ・・・　何せ相手はテイワズの「看板」背負ってるんだ。ＧＨとは違うニオイすらしてならないからな・・・・・」

その頃、鉄華団・タービンズ双方に動きが。

タービンズの船、ハンマーヘッドでは・・・

名瀬：「悪りぃアミダ、こうなっちまった」（，～、；）「」

アミダ：「ヤンチャする子供を叱ってやるのは大人の役目だよ」

名瀬：「ほォんと、イイ女だよ、お前は。欲を云えばさぁ、エドワーズ君とナシつけたかったのになぁ・・・・・」

アミダ：「マルバの息子にホレてんのかい、名瀬？ま、今はどうでもいいけど・・・・・」

名瀬：「ど、「どうでもいいけど」って・・・　ｆ（＾＿＾；」

アミダ：「ラフタにノーマルスーツを着るように伝えな！」

エーコ：「はい！姐さん！」

アミダ：「総員戦闘準備だ！全員持ち場に付きな！アジー、あたしと出て貰うよ！」

アジー：「はい。いつでも」

名瀬：「あ、そうそう。「固有周波数にヒットしない謎のＭＳ」もいるみたいだから・・・・・　気を付けなよ」

アミダ：「分かってるって、名瀬。適当にあしらっておくよ」
名瀬：「「楽しんで」来なよアミダ。火遊びは……　程々にな（＊?▽?）ノ」

そして、イサリビでは…
ビスケット：「慎重に」って言ったじゃないか!交渉の余地はあった筈だ!さっき、教官に言われたばかりなのに……」
オルガ：「分かってるけどな…　通すと決めた「筋」は曲げられねぇよ」
諦めたのか、観念したか定かではないが、ふぅ、と溜め息をつくビスケット。
オルガ：「敵艦にケツを取られちゃいるが、鉄華団の力を見せ付けるには、むしろ好都合だよな…　お前ら!」
ユージン：「あたりめぇだろ!」
シノ：「おう!目にもの見せてやろうぜ!」
オルガ：「テイワズとの渡りをつける千載一隅のこのチャンス、ものにするぞ!」
いきり立つユージンとシノ。
チャド：「エイハブウェーブの反応、確認!敵艦、加速して距離を詰めて来る!」
オルガ：「よぉし、ブリッジ収納!速度は維持して１８０度回頭!砲撃戦に備えろ!」
チャド：「了解、ブリッジ収納!!」

オルガが指示を出すと、チャドが指示通りにブリッジ収納シークエンスを行った。
艦内放送（フミタン）:『これより本艦は、戦闘状態に突入します。艦内重力を解除。総員、１２０秒後の回頭に備えて下さい』
オルガ：「昭弘、出てくれるか？」
昭弘：『ああ！任せろ！』
オルガ：「ミカァッ！」
三日月：「勿論！（クーデリア、そこ）邪魔」
クーデリア：「あっ、ごめんなさい。」
クーデリアを交わしながら、三日月は格納庫へ。
オルガ：「頼むぜぇ！（そんでもって…）シノも準備してくれ！」
シノ：「おうよ！待ってました！」
張り切るシノ。そしてユージンも……
ユージン：「俺も行くぜ！」
オルガ：「いや、ユージンは「残って」くれ」
ユージン：「はあ？（何言い出すんだよオルガ。俺も行きたかったのに……）」
オルガ：「「船を任せたい」んだよ。ここを頼めるのはお前しかいない」
照れくさそうな表情でオルガに返答するユージン。

ユージン：「お、おう・・・　仕方ねぇな（「貸し借り無し」な、オルガ）」
フミタンが、クーデリアに駆け寄るように近付く。
フミタン：「お嬢様は、中枢ブロックに避難を。お手伝いしますので、先ずはノーマルスーツを・・・・」
遮るように、クーデリアがつぶやく。
クーデリア：「ここにいては・・・・・　邪魔になりますね？・・・・　いえ、一人で大丈夫。フミタンは皆さんの力になってあげて下さい。」
フミタン：「お嬢様がそう仰るのなら・・・・・　では、お嬢様もお気をつけて」
淡々と返すフミタン。祈るように目を瞑り、デッキを立ち去るクーデリア。
オルガ：「悪かったなビスケット」
ビスケット：「もう退けないんだろ？」
オルガ：「あぁ、だから力を貸してくれ」
ビスケット：「分かってる」
「一度決めた事は、何としてでもやり通す」と云うオルガの「筋」を理解しているビスケットにとって、最早手に取るように分かっていた。参謀として、そしてオルガの、鉄華団の良心として・・・・・

時同じく、エドワーズの部屋では……

アレン：「方位１８０度、距離６２００から３１００まで詰め寄ったとは、相対速度の一致とは……　手慣れた詰め方だな」

ダンジ：「アレンさん、そこで感心しないで下さいよぉ…　（ーー；）」

エドワーズ：「アレンさん、ダンジ君。頼まれて欲しいんだが……」

ダンジ：「何ですか、教官？」

エドワーズ：「二人とも、ノーマルスーツ着て貰って、ＭＷでイサリビの護衛任せてもらいたいね！」

アレン：「まさか…　一戦交えるとでも言うのか？ＧＨでも迂闊に手を出す事すら出来なかったテイワズ、とやらに？」

一呼吸置いて、アレンの問いに答えるエドワーズ。

エドワーズ：「あぁ、どうやらそのつもりらしいです。取り合えず「ブリーフィング」しますか。ダンジ君、俺のタブレット持ってきてくれる？」

（イメージＢＧＭ：　真・三國無双４サントラより「Ｉｎｔｅｌｌｉｇｅｎｔ　Ｂｏｙｓ」）

エドワーズにタブレットを渡すダンジ。タブレットを起動、ブリーフィング画面を開

き、３Ｄで状況が映し出された。
エドワーズ：「さてさて……　これが今の状況。俺たちの船・イサリビは１８０度回頭し、タービンズの船・ハンマーヘッドと相対する形となろうとしているね？」
ダンジ：「そう言えば、艦内放送で言ってますね」
エドワーズ：「まずは敵の戦力。保有ＭＳは……　っと！（ハンマーヘッドの立体ホログラフィーをタップすると、「保有ＭＳ」の情報ページにアクセス。）おいおい冗談だろ？「今の俺たち」の状況では、難しい相手みたいだ…」

頭を抱えるエドワーズ。「今の鉄華団」の錬度、頭数では困難を極める位である事が明白であった。画面を見て驚くアレン。
アレン：「何だ、この圧倒的な戦力差は？」
エドワーズ：「気付きましたか、アレンさん。俺も正直驚きました…　これが、タービンズの「戦力」です。
ＭＳは５。指揮官１に対して一般が３、そして哨戒が１かぁ…　どれどれ？（機体情報の詳細をタップ。）
哨戒機が……　ＳＴＨ―１４ｓ…　通称「百里」か。高機動型で足が速いヤツ……シュヴァルベと渡り合える位、かな？

そんでもって……　ＳＴＨ―０５：通称「百錬」、テイワズで運用されてる汎用型の主力ＭＳか。成程、流石のＧＨも圏外圏に手が出せないのは、このＭＳの存在あればこそ、だな」

画面を見ながら頷くエドワーズ。その横でフリーズするダンジ。全然ついていけない状態だが、ダンジが質問してみた。

ダンジ：「教官、その下に出ている「ＳＴＨ―０５／ＡＣ」って、さっきの「百錬」とか言うＭＳと、同じ型番みたいですけど？」

エドワーズ：「良く気付いたねダンジ君……　って、オイッッ！百錬の型番の横に「／ＡＣ」だとォッ？

その百錬……　ソイツ手強い相手だぞ、「今の錬度」ではな。ＧＨ　以上に手強いヤツだ。」

（イメージＢＧＭ：　真・三國無双４サントラより「Ｓｍｉｌｅｌｅｓｓ」）

青ざめた表情と化したエドワーズ。型番から見て彼は「理解」していた。それを察したかのように、アレンが問い掛ける。

アレン：「まさかエドワーズ、「異名持ち」か？」

イヤな汗を流しながら、エドワーズが答えた。

エドワーズ：「そうなんです……　「／ＡＣ」の「Ａ」で、且つ「テイワズ」と云えば……

真っ先に思い浮かぶのは、この「異名」なんですよ。

「真紅の蛇姫」こと・・・・　アミダ・アルカ!!」

ダンジ：「えーっ？（ここで「異名持ち」キターｏｒｚ）」

アレン：「「蛇姫」だと？木星圏にもエースパイロットがいるとでも？」

エドワーズ：「ええ、そうですよアレンさん。火星圏にこのような狂歌があるんです。

「テイワズに　過ぎたる物は　二つあり　仁侠カタギと　真紅の蛇姫」と。

まさか、あの音に聞く「蛇姫」と一戦交える日が来るとはな・・・・　今日は何てイイ日だ！（　？▽？）」

ニヤニヤ笑い出したエドワーズ。当然の事ながら、それを察したダンジ。

ダンジ：「きょーかん？まーた何か企んでませんか？タービンズに対しても・・・・・・

「ビームサーベル」抜くわけ・・・・　無いですよねぇ～？（ーー；）」

エドワーズ：「どうだか？さっきブリッジでさ、親父と名瀬代表と話してたし、あの時の戦い、誉めてたみたいだぞ？

「ガキ共にしちゃあ、大したものだ」ってね。ブリーフィングは一旦切り上げて、俺たちも行きますか！」

ダンジ：「適当に切り上げて……　教官？大丈夫ですか？」
アレン：「不安しかないが…　大丈夫か？」
エドワーズ：「大丈夫デスヨ。ソコハナントカスルンデー（　？▽？）」
そう云うと、ダンジの「心のリミッター」が外れ、心の中でこう思ったかもしれない。
「教官、絶対ビームサーベル抜くだろう」と。

イサリビ、速度を維持して１８０度回頭。ハンマーヘッドと対峙。
鉄華団対タービンズの戦いの幕が、切って落とされた。

Ｃｈａｐｔｅｒ―３：開戦!!
タービンズサイド・ハンマーヘッド格納庫。
アジー：「姐さん、先に行かせてもらいます」
アミダ：『ああ』
青い百錬が、カタパルトに下降され、出撃態勢に。
アジー：「アジー・グルミン、行きます！」
（イメージＢＧＭ：オリジナルサントラ１より「Ｄｉｆｆｅｒｅｎｔ　Ｄｅｆｉｎｉｔｉｏｎ　」）

ジジジ、と言う摩擦音を響かせ、アジーを載せた百錬が射出された。
ハンマーヘッド整備員：『次ィ～、姐さんの百錬、下ろすよォォッ!』
エーコ：『姐さん、敵の船ですが、速度を落とさずに１８０度回頭してきました～』
アミダ：「教科書通り」、速度は殺さず、艦首だけをうちに向けてきたか・・・・ 先ずは「合格点」だよ」
ハンマーヘッドオペレーター：『カタパルト準備完了。出撃どうぞ!』
アミダ：「アミダ・アルカ、百錬、出るよ!」
アミダの赤い百錬が出撃した後に、青い百錬がもう２機出撃した。

対する鉄華団、イサリビでは・・・・・
雪之丞：「すまんねぇ三日月。結局、リアクターは調整不足のままだ。「こんな状態」でおめぇを出したかねぇんだが・・・」
三日月：「まあ、動くんなら何とかするさ」
雪之丞：「（「動くんなら何とかする」ってオイ、無謀な事言うじゃねぇかよｏｒｚ）寝覚めがわりィから、死ぬなよ」
三日月：「おやっさんより長生きする「つもり」」

雪之丞：「調子良いこと言いやがってぇ。じゃあ、気いつけてな。（バルバトスハッチ閉まる。）おーい！昭弘のグレイズが出次第、バルバトスも出すぞお!!」

整備班員：『うーすッ！』

バルバトスの起動シークエンスに入る三日月。

三日月：「うっ!?・・・・　リアクターだけじゃなく、各モーターに変な負荷が掛かってる。ま、やれるだけやるさ」

ブリッジから通信が入る。

フミタン：『目標より、ＭＳの出撃を確認。数は４です』

三日月：「わかった・・・・・・　おやっさん！」

雪之丞：「よォし！バルバトスを下ろすぞ！下ぁ気いつけろよ!!」

射出カタパルトに移動するバルバトス。

フミタン：『Ａロック作動。カタパルト、ハッチ開放します。カタパルト・・・　スタンバイ。いつでもどうぞ』

三日月：「んじゃあバルバトス・・・　三日月・オーガス、出るよ！」

バルバトス射出。

後部にマウントされた滑腔砲を展開、先に出た昭弘のもとへと向かう。

次は・・・・・・

雪之丞：『次は・・・　おめぇさんか・・・　推進剤だけで大丈夫なのか？』

エルヴィン：「心配はない。「デュアルドライブ」ゆえ、もしエイハブリアクターがダメになっても、「コイツ」は動けるから、大丈夫だ」

雪之丞：『へ？「でゅあるどらいぶ」ぅぅ？何じゃそら？（ーー；）』

エルヴィン：「エルピス、相手はどう来てる？」

エルピス：「ＭＳが４機出撃された模様。しかし、敵艦船よりＭＳ　反応２機確認。うち１機は正体不明です」

エルヴィン：「切り札」か、それとも・・・・・　雪之丞さん、お願いします！離れるように指示を！」

雪之丞：『わぁったよ。』次ぃ!!「フェニクス」下ろすぞ！吹っ飛ばされねぇよう、一旦離れろぉ!!」

エルピス：「フロアハッチ展開を確認。一旦ホバリングします」

機体が一時的に浮き、カタパルトアームに固定されるゼロ炎。

エルピス：「シューター固定完了、カタパルトへ移動開始。フロアハッチ閉鎖。カタパルト移動完了。Ａロック解除、射出カタパルト並びにハッチ展開を確認。電磁レールテンション最大、射出権限の認可、確認しました。「Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ＣＯＮＴＲＯＬ」です、ご主人様」

エルヴィン：．良し、「Ｉ　ｈａｖｅ　ＣＯＮＴＲＯＬ　!!」ダニエル＝グレン・エルヴィン、フェニクス、行かせてもらうッ！」
エルピス：「ウイングガンダムゼロ炎、テイク・オフ」
ネオバードモードのまま、ゼロ炎は射出。そして……
エドワーズ：「バズーカ砲あったから、取り合えず積んでみた。相手はタービンズの精鋭。生きて帰れる補償は…　どうだかな？」
雪之丞：『出撃前に、不安そうな愚痴こぼしてどうする？ま、三日月を前線で黙らせる事出来るの、おめぇさんしかいねぇからなぁ……』
やれやれ、と云う表情を見せながら雪之丞が離れていく。
エドワーズ：「ハイパーバズーカ」中々使えそうな気がするなコレ（？▽？）さてさて…　ダンジ君にアレンさん、準備は出来たかい？」
ダンジ：『教官。既にイサリビ上部で待機してますよ～』
アレン：『何時でも行けるぞ！』
エドワーズ：「これで「最終防衛ライン」完成、と。後は俺だけか……　ナディさん!!Ｇ―３を!!」
雪之丞：「『帰って来いよ！』最後ォォッ、Ｇ―３下ろすぞぉ！下ぁ気ぃ付けろよ!!」
射出カタパルトに下ろされるＧ―３。

フミタン：『射出タイミング、Ｇ―３へ委譲します、何時でもどうぞ』
エドワーズ：「エドワーズ・アーケイ・・・　Ｇ―３　、行きます!」
Ｇ―３射出。三日月達の元へ合流する。
昭弘：『あ・・・・・・』
三日月：『お待たせ』
昭弘：『カツ・・・・　待っちゃいねぇよ』
三日月：『「赤い鳥の人」と、教官も出るんだ』
エルヴィン：『戦力は、多い方に越したことはないだろう・・・・・・「軍神」サマのお出ましだ』
エドワーズ：「これで全員だな。相手はかなりの手練れ。火星軌道上でやりあったＧＨ以上に強ぇからな。三日月君に昭弘君、決して深追いと無茶はするんじゃないぞ。特に「赤いＭＳ」には気を付けろよ」
三日月：『何かわかんないけど・・・・　気を付けてみる』
昭弘：『了解!』
エルヴィン：「エルピス、敵の様子は?」
エルピス：「ご主人様、まもなく会敵します」
エルヴィン：『そろそろ来るぞ、エドワーズ』

三日月：『あれか…』
エドワーズ：「さぁて……「叩き」ますか！」
一方、タービンズサイドは……

アミダ：「アジー、船の射線に入るんじゃないよ」
アジー：『ラジャー』
アミダ：「アンタ達「にも」言ってるんだから、気を付けなよ」
タービンズ一般兵：『はい！姐さん！』
アミダ：「さあ……「躾の時間」だ。坊やたち……」
ハンマーヘッド、イサリビ双方からの砲撃を合図に、開戦。
イサリビ甲板上部で構えているＭＷでは……
アレン：「始まった」… ようだな？」
ダンジ：「そう、ですね。ぼくたちも、ウカウカしてられませんよね！（ピーピー）ＭＳ反応キャッチ。アレンさん、砲撃を」
アレン：「分かっている。ダンジ君はＭＷの操縦に集中してくれ。阿頼耶識持ちのキミが頼りだからな！」
ダンジ：「了解。アレンさん、酔わないようにしてくださいね!!」

Ｃｈａｐｔｅｒ―４：挫く戦意

（イメージＢＧＭ：「真・三國無双４」より「合肥―ＧＲＥＡＴ　ＲＥＤ　ＳＰＩＲＩＴ―」）

開戦してから数時間経過。ハンマーヘッドからの砲撃を受け、防戦必死のイサリビ。

ユージン：「ちっとは回避できねぇのか!?」

ビスケット：「下手に舵を切れば、距離を詰められて、対艦ナパーム弾の射程に捕まる！」

ユージン：「くっ・・・（何か良い対抗策は・・・）」

フミタン：「ミサイル接近」

ハンマーヘッドからのミサイルを撃ち落とす。ブリッジで焦るユージン。オルガに「船を任せる」と頼まれた以上、無下にする訳にはいかない。

ミサイルを撃ち落としても、対艦砲撃の雨は止まない。

イサリビクルー全体に、被弾の衝撃が伝わる。

イサリビクルー：「ぐっ!!!」

ビスケット：「あれを続けてもらえば、ナノラミネートアーマーでも溶解するんだ！今は迎撃可能な距離を維持して！」

再び被弾。

チャド：「このままでもマズイって！」

時同じく……

アレンの精密射撃、ダンジの絶妙なＭＷ捌きで、ハンマーヘッドの砲撃を撃ち落とし、何とかイサリビを守り切っていた。

ダンジ：「対艦ナパーム？アレンさん、撃ち落とせますか？」

アレン：「造作もない。ダンジ君、捕捉出来ているのか？」

ダンジ：「大丈夫ですよ」

生身の人間のように、フレキシブルに動き、砲撃を撃ち落とし、守りに専念するダンジとアレン。

ホバリングし、ハンマーヘッドからの砲撃を交わしつつ撃ち返すという、ヒットアンドアウェイの戦法を取り、防戦必死の状況。

ダンジ：「教官から任されたミッション、しっかり果たしてみせるッ！」

ＭＷのアクセルに、いつも以上に力が入るダンジ。そして、的確に撃ち返すアレンの射撃の腕。互いのスキルが混じり合い、見事なまでの連携でイサリビを防いでいる。

アレン：「ダンジ君、再びミサイル接近」

ダンジ：「了解ッ！間に合え!!」

阿頼耶識もとい、ＭＭＩと直結されているダンジには、状況が手に取るように把握し

ている。まさに人機一体。
タービンズサイドは・・・・
エーコ：「敵艦、進路維持!」
ビルト：「意外と胆が据わってるんだぁ・・・」
戦況をモニタリングしながら、納得するエーコとビルト。
その状況を聞き、艦長席でふんぞり返る名瀬が指示を出す。
名瀬：「長引きそう」なのかぁ?なら、ラフタに出てきてもらったらどうだぁ?」
エーコ：「了解♪」

ＭＳ　サイドは・・・・
エルピス：「ご主人様、敵機２機接近。恐らく先発かと・・・・」
エルヴィン：「ようやくお出ましか・・・・「性能の違い」とやら、見せてやるか」
ゼロ炎、百錬に対し威嚇射撃のファーストインパクトを仕掛ける。
分散して回避。
百錬パイロットＡ　：『何なの?あの機体。「百里」より足が速いようだけど?』
百錬パイロットＢ：『とにかく、撃ち落とすよ!』
ゼロ炎に向かって、ライフル掃射。銃弾の雨の中をひらりと交わし、百錬らの「大上

段」まで上昇。「彼女ら」の頭上でＭＳ形態に変型、そして……

ダンッッ!!

百錬パイロット：『ぐぁっ!!?』

ハイパーカレドヴルッフ二刀流で、百錬を退けたではないか！

百錬パイロットＡ：『うちらの銃撃をかわし、更には死角からの奇襲。何なの、あのＭＳ？』

百錬パイロットＢ：『「武闘派のタービンズ」が・・・・こんな見ず知らずの赤い鳥のヤツに遅れを取るワケには・・・・（ダァァン！）あがァァッ!?』

ゼロ炎の左の肘鉄を右腕に喰らい、ライフルカノンを弾き飛ばされつつのけ反る百錬。もう1機の方は、「がら空き」の背中目掛けて、輪胴式グレネードランチャーを発射。

百錬パイロットＡ：『よくもウチらの仲間をォォッ、墜ちろォォッ！』

アラートが鳴るゼロ炎のコクピット。

エルピス：「ご主人様、背後から狙撃されてます！」

エルヴィン：「間に合うかッッ？エルピス、苦肉の策だ。ブースター逆噴射で焼き払う！」

エルピス：「了解。ブースターユニット、左右に展開。ブースター、逆噴射！」

グレネードの流れ弾を、逆噴射されたブースターの火力で消滅。狙撃してきた百錬の視界を奪った。

百錬パイロットＢ：『ちいッ！視界がッッ!?』

爆風の煽りを受け、機体周辺の視界を奪われ、見失ってしまった。

百錬パイロットＢ：「どこ消えたんだ、あの赤いＭＳは・・・？」

ピーピーピー！

警告音が鳴った次の瞬間！

ガァンッ！

百錬パイロットＢ：「ぐあァッ！」

弾幕の中で「鳥の姿」に変形し体当たりを仕掛け、突き飛ばしながら飛び去って行き再度変形。「彼女ら」を、見下ろす赤いＭＳ。後ろに懸架されている片刃式ブレードに右手を添えている事を悟られぬよう身構えているが・・・・

エルヴィン：『アンタらには、私を斬ることも、ましてや、「油断を装っての袋叩きにする」事も・・・・お見通しだ。抵抗しても無駄だ。アンタら、いや・・・「貴女たち」の刃から・・・・純粋なまでの戦意すらも感じられない。甘すぎる、それでも貴女たちは「戦士のつもり」か？』

百錬パイロットＡ：「同情のつもりか？」

百錬パイロットB　：「舐めた真似を!!」
赤いMSは、徐に両翼に備え付けられた「ライフル」を両手に握り、銃口を向ける。
エルヴィン：『これは「警告」だ。貴女たちのような……　純粋無垢で、可憐な乙女たちが「立ち入る」ような場所ではない。それでも抗うのなら……　宇宙のチリとなって貰おうか？』
凍り付く百錬のコクピット。貴女たちは後で気付く事となるが、「経験した事の無い位の身の危険」を体感していた、と云う事を。

百錬パイロットA：「ねぇ……　うちら、どうなってるの？」
百錬パイロットB　：「追い立ててるつもりが逆に……「睨まれてる」ようで……こわいよぉぉッ（´；ω；｀）」
百錬パイロットA：「泣いてどうする？ウチだってぇ、えぐ……　う〝ち〟だ　っ〝でこわいよぉぉっ！（T０T）」
百錬パイロット『『だずげで、だぁぁりぃぃん！ｏ（T□T）ｏｏ（T□T）ｏ』』
そして……

エルピス：「ご主人様、敵機体双方より「降伏信号」を受信。戦意を喪失された模様。宜しいのでしょうか？」

エルヴィン：「ああ……　彼女達の戦意を砕くには、この位の事をしなければ……「力無きモノが搾取される」こんな時代、子供達は愚か、まさか女達も駆り出されるとはな……

あの「女狐」め、この世界で何をしようと？」

悲壮感漂うゼロ炎のコクピット内。エルヴィンは、敢えて戦う乙女たちの戦意を挫き、「二度と戦わないように」と云う願いを込めながら、彼女たちを見守っていた。

Ｃｈａｐｔｅｒ―５：急襲、そして衝突！

ユージン：「何の光だ？」

艦橋モニターを観て、状況を確認するユージン。

しかし、時既に遅し。

ビスケット：「「上」だッッ！」

ハンマーヘッドから出撃した哨戒機：百里が奇襲を仕掛けて来た。

ラフタ：「まぁだ爪乾いてなかったのにぃ……」

足をばたつかせながら愚痴をこぼすラフタ。彼女が駆る百里がイサリビ周辺を飛び

交う。
ユージン：「別のＭＳ!?対空砲とＭＷ　じゃ追い付かねぇぞ！」
アレン：『ブリッジ聞こえるか！足の早いＭＳが１機、こっちに急襲してきた。俺とダンジだけでは持ちこたえられん！前線に出ているのを誰かしら下げた方が良いぞ。』
ビスケット：「アレンさん、申し訳ないです……　アドモスさん、前線に出ている三日月たちに連絡取って下さい！ＭＳ　を戻さないとやられる！」
ビスケットの指示を聞き、フミタンは直ちに前線に展開している４人に指示を送った。
前線では…　？
滑腔砲を放つバルバトス。
三日月：「もう１機いたのか？」
がら空きである事を気付いたアミダ。アサルトライフルを乱射する。
アミダ：「余所見ッッ！」
エドワーズ：『余所見してんのは、何処のお姫さまだい？逆にがら空きなんだよぉッッ！』
ズガァン！ズガァン！
灰色のＭＳ　が放ったバズーカ砲（Ｇ―３のハイパーバズーカ）を２発喰らい、のけ

反るピンクの百錬。そのコクピットの中、アミダがモニターで状況を確認する。
アミダ：「ちいいッッ・・・・　あの灰色のＭＳが、さっき名瀬が言ってた・・・　アジー、気を付けな。あの灰色のヤツは、アタシがやる!」
アジー：『姐さん、先行したステイシー・シアンビーの双子が、謎の赤いＭＳ　にやられた模様。戦意喪失しています。』
アミダ：「うちの斬り込み役をそこまで追い詰めるとは・・・・・・　中々出来るヤツがいるんじゃないのかい?」
関心するアミダ。

エドワーズ：「あの赤いＭＳ　・・・「蛇姫」は俺がやる。三日月君と明弘君は、一旦イサリビに下がって防衛を頼む!」
明弘　：『了解』
三日月：『わかった』
エドワーズの指示で、イサリビの防衛の為に二人を下げた。
モニター越しのＧ―３と対峙しながら、アジーに指示を出す。アサルトライフルを左に持ち換え、片刃式ブレードを抜刀する。
アミダ：「つれない真似をするじゃない?アンタ一人でこの「蛇姫」の相手が出来るか

い？アジー、逃げたヤツらを追いつつ、ラフタのカバーに入りな」
アジー：『ラジャー』
アミダ：「名瀬、聞こえる？アジーだけじゃ心許ないし、
斬り込み役が心へし折られて戦意喪失状態。増援寄越してほしいけど、大丈夫かい？」
名瀬：『アミダがそう言うんだったら…　良いぜ。イケる子たち何人か向かわせるよ。双子も回収しとくから、安心しな』
（イメージＢＧＭ：　Ｗｉｎｇｓ／山本彩）
アミダ：「助かるよ、名瀬。さぁて……　アタシを楽しませてくれるかい、「軍神」さん？」
逆手持ちのブレードを真横に構え、Ｇ―３に躍りかかるアミダの百錬。
エドワーズ：「来い！」
シールドを前に構え、防御姿勢を取るＧ―３　。
エドワーズ：「さあ来い、蛇姫。「燻製」にしてくれるわ！」
アミダ：「「煉獄帰りの軍神」の異名が本当なのかどうか……　見定めてやるよ！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ＬＯＧ……

第４話：　激突!鉄華団　ＶＳ　タービンズ・中編～劣勢～

ＬＯＧ―「侵」第４話
Ｃｈａｐｔｅｒ―６：イサリビ防衛：仕込み
（イメージＢＧＭ：「真・三國無双４」より「合肥―ＧＲＥＡＴ　ＲＥＤ　ＳＰＩＲＩＴ―」）

エドワーズ：「さあ来い、蛇姫。「燻製」にしてくれるわ！」
ハイパーバズーカを構えるＧ―３。
アミダ：「「煉獄帰りの軍神」の異名が本当なのかどうか……　見定めてやるよ！」
右に片刃式ブレード・左にアサルトライフルを構え、躍りかかる赤い百錬。
一騎討ちが始まる！
Ｇ―３、ハイパーバズーカ発射。砲撃の雨をすり抜けながら間合いを狭め、更にアサルトライフルで撃ち返す赤い百錬。
アミダ：「どこ狙ってんだい？当ててるつもりなのかい？」
バズーカの弾を撃ち落としながら接近、そして…

アミダ：「でぇぇいッッ！」
ガァンッッ！
エドワーズ：「ぐぅッッ!?」
右手で持っていたハイパーバズーカを弾かれ後退。弾かれた反動で爆発四散。
エドワーズ：「バズーカがッッ・・・・ ならこれでッッ！」
すかさず、ランドセルに備え付けておいたバトルアックスに持ちかえる。
エドワーズ：「はぁぁッッ！」
百錬に向かって仕掛けるＧ―３。Ｇ―３に向かってライフルを放つ。銃弾の雨をシールドで防ぎながら詰め寄る。
アミダ：「中々タフなようだねぇ。さっさと墜ちて、ぐっ!?何処から?」
流れ弾を受け、のけ反る百錬。センサーを確認するアミダ。映されたのは・・・・
アミダ：「なんだい、あの「赤い鳥」は?」
エルヴィン：『エドワーズ！助けに来たぞ！』
エドワーズ：「おいおい、せっかくイイ所だったのにｏｒｚ・・・・」
エルヴィンのゼロ炎が助太刀に来た。
第４話：
激突！鉄華団　ＶＳ　タービンズ・中編

～劣勢～

エルヴィン：『先見隊のＭＳは、適当にあしらっておいた。どうする?』

エドワーズ：「俺は良いから兎に角イサリビの防衛に、三日月君と明弘君のフォロー頼むわ」

エルヴィン：『分かった、そうさせて貰う。』エルピス、イサリビの状況は?」

エドワーズに託し、イサリビの方向へ飛び去るゼロ炎。

そのコンソール上では戦況が映し出され、エルピスが淡々とガイドを始める。

エルピス：「今現在イサリビは、奇襲に遭われている模様。バルバトス・グレイズ改の両機は、防衛の為後退を開始。（ピーピー）タービンズ艦・ハンマーヘッドより増援出撃を確認。数は３。２機は百錬。もう１機は……」

解析を急ぐエルピス。

エルヴィン：「どうした、エルピス?まさか!?」

コンソールを眺めるエルヴィン。そこに表示された型式番号・機体データを観た瞬間、絶句した。

エルピス：「もう１機のＭＳは……「エヴァンス様が解き放った”駒”の一つ」、異世界から呼び寄せたＭＳです」

エルヴィン：「何、だと?機体名は?」

エルピス：「機体型式番号：ＸＸＸＧ―０１Ｗ。通称：ウイングガンダムです」
エルヴィン：「ウイング、ガンダム」だと？」
（イメージＢＧＭ：新機動戦記ガンダムＷ　ＯＰ「ＪＵＳＴ　ＣＯＭＭＵＮＩＣＡＴＩＯＮ／ＴＷＯ―ＭＩＸ」、と行きたい所だが、佐咲紗花Ｖｅｒ．　を推奨、フルで流します。）
モニターの先に映ったのは……
濃い青と白の機体色に、赤・白・黄色のトリコロールカラーで彩られた、二枚羽根を持つ、鉄の鳥の如きＭＳだった…
ー時を遡る事半刻前、タービンズ母艦：ハンマーヘッド。
アミダ：『名瀬、聞こえる？アジーだけじゃ心許ないし、斬り込み役が心へし折られて戦意喪失状態。増援寄越してほしいけど、大丈夫かい？』
名瀬：「アミダがそう言うんだったら…　良いぜ。イケる子たち何人か向かわせるよ。双子も回収しとくから、安心しな」
アミダ：『助かるよ、名瀬』
矢継ぎ早に指示を出す名瀬。

名瀬：「エーコ、ビルト、出撃可能（イケそう）なコたち適当に募っておいてくれない？」

エーコ：「らじゃ～、適当に募っときま～す（＊?▽?）ノ」

出撃要請のメールを、ハンマーヘッド各定点に着いている「百錬操縦可能メンバー」に送信し始めた。

そんな中、マルバの背後に「ある気配」を感じた。

マルバ：「な、名瀬さん?”指南役”の先生が、お話しがしたい、と仰ってますが・・・・」

流石のマルバも、血相を変えて話す位だ。何しろタービンズ御抱えの「戦術指南役」だ。

名瀬：「マルバ、何か言いたげだから、通してやんな」

はい、とマルバが返事をして、ブリッジのドアが開くと同時に、「指南役の先生」なる男が入室。

???：「入るよ、タービンの旦那。ぶちわやな事になっとるみたいだのぉ。「武闘派」の名前で知れ渡っとるあんたたちタービンズが、見知らんひとらに負けて、どうする?稽古付けちゃった事を無駄にしてぇ、どうするん?」

中国系の拳法家のようや出で立ちの武官が、マルバを軽く突き飛ばし、血相を変えてズカズカと入ってきた。

名瀬：「すいませんねぇ、ヤン”先生”。ウチの斬り込み役の双子が・・・ 先生が手塩にかけて育てたお弟子さんが、いとも簡単に戦意喪失、心をバッキバキにへし折られたようでしてねェ・・・ ちょうど困ってた所だったんですよォ」（；～、；）「」

名瀬が”先生”と呼んで、一目置いている武官。

ーＧＨ木星支部から「出向」と云う形で、タービンズの戦術指南役を務めているエースパイロットー

ー『カイエル四衛将』の一角・『青龍』の称号を受け継ぐ、ＧＨの「喪われた名家」の一つ・ヤン（楊）家の嫡男にして、『木星の青龍』の異名で畏れられている異名持ちー

「スティーブ・ヤン」が、腕を組みながら姿を現した。

スティーブ：「へぇ、それで、旦那の連れもわやな事に、大分苦戦しとるようで？出撃要請のメール、確認させてもろぉたよ。「わしにも出て欲しい」ゆぅてのぉ。メールにやぁ、『ＭＳ戦に慣れとらん「こーへぇーげなしごんぼう共」の癖して、何かおかしい上に・・・・・ 守りの壁が薄いのに、手厚いような「錯覚」を感じて、迂闊に手も足も出せんとぉに、手こずっとる状況』だとか？

それに・・・・・ 『「煉獄帰りの軍神」に、「今まで観たことも聞いた事もないいなげな兵器を使う、赤い鳥に変形するＭＳがいる」』との文面があったようだのぉ。冗談じゃろ、これ？今まで、ゆい訳した事もないアミダも、流石にお手上げ、となるワケだ・・・ そ

りゃぁそれで良しとして、アジーたちゃぁどうなっとる?」
矢継ぎ早に名瀬に質問するスティーブ。
名瀬:「アジーたちは、ガキ共の艦落としに向かってますよ。ちょうどラフタがプレッシャーかけに行ってるようで‥‥」
スティーブ:「成程、そうゆうことのぉ。それで、ステイシーとシアンビーは大丈夫なんか?自分の力で帰還出来るんか?」
名瀬:「それが‥‥　立ち直れずにいる状態なんですよ。なので先生、出撃ついでに回収、お願いしますよ」
目配せして、スティーブにお願いする名瀬。
スティーブ:「まったく‥‥　ぐうの音も出んわ‥‥　しゃぁない、行って来るとしょぉで。ビルト、出撃メンバーはわしが決める!そうじゃのぉ‥‥　アスカとサラの二人に声かけちゃってくれんか?あの二人なら、アジーのケアに最適じゃけぇね!わしゃぁ‥‥‥「拾い物のＭＳ」で、あのしごんぼう共を、ぶちまわしたるわ!」
名瀬:「頼みますよ、先生。アミダが塞がってる中で、頼りになるのは、先生しかいませんから‥‥」
と、スティーブを椅子越しに手を振りつつ、見送る名瀬。
スティーブは、ブリッジを後にして、格納庫へと向かう。

スティーブ：「クックックッ、大人の怖さァ、身をもって教えちゃるけぇ、覚悟しときんさいやァッ！」
と、ヤベーイ笑みを浮かべながら呟き、足早にＭＳデッキへと向かった。
エーコ：「だーりん、先生の指示通り、アスカとサラに出撃するように、伝えましたぁ～」
ビルト：「先生が言うのであればと、喜んでましたよ～」
名瀬：「良いんだ、これで……（ヤン先生、何を考えているのか、さっぱり分からん気がするし… それにしてもあのガキ共も、ビルトが言ってたように、ホントしぶといなぁ……）」
戦況を注視しつつ、艦長席で思考を巡らせた。
そして、ＭＳデッキでは……
タービンズ整備クルー：『先生のシュヴァルベ・グレイズ、間に合いませんでした。調整に調整を重ねないとムリなようで……』
スティーブ：「気に止む必要はないよ。げによう頑張ってくれた。そりゃぁそれでええから、とにかく、整備はこのまんま続けてほしいんじゃ。今の段階で、出撃可能な機体は、この拾い物しかありゃぁせんけぇのぉ。かなりピーキーな機体だし… 頭に埋め込まれた「コイツ」を頼りにして、この戦況、覆しちゃろうかァ!?」

射出カタパルトへと移動する「機体」。
ハッチ展開、射出タイミングが移譲された。
スティーブ：「ほいじゃぁ、行くとしようか。スティーブ・ヤン、「ウイングガンダム」行くよ！覚悟しんさいや・・・・　しごんぼう共が!!」
ハンマーヘッドからウイングガンダム（以降Ｗ）が飛び去ってから数刻後、アスカとサラが操る青い百錬が、後を追うように出撃した。
（イメージＢＧＭ：　新機動戦記ガンダムＷ　ＯＳＴより「黒い風が死へ誘う」）
スティーブ：「分かっとるね、二人とも。ラフタとアジーのフォローをかけつつ、こーへぇーげなしごんぼう共に、やいとを据えるだけじゃ！向こうはまだ「戦いの作法」を知らん素人じゃ。日頃の成果、見せ付けちゃろうか！」
アスカ：『了解、先生！』
サラ：『その前に、ステイシーとシアンビーの回収、忘れてませんかぁ？（；・ω・）？』
スティーブ：「あー、そうじゃったそうじゃったんじゃ。双子の回収が先じゃったね、忘れとったよ・・・・　恐らく無事じゃけぇ、丁寧に対応しときんさい。心バッキバキにへし折られとる状態だと、何かの拍子で、フラッシュバック引き起こして、手が付けらりゃぁせん状況になるからの。すぐメディカルチェックを受けた後、カウンセリングを

受けるよう手配してくれんか？」

アスカ：『分かりました、先生。だーりんに伝えておきまーす。サラ、行くよ！』

サラ：『あいよっ、アスカちゃん！』

二機の百錬が、青い放物線を描きながら、双子の回収へと先行していった。ーーー

時間軸を戻し、戦闘宙域。

（イメージＢＧＭ：「真・三國無双４」より「合肥―ＧＲＥＡＴ　ＲＥＤ　ＳＰＩＲＩＴ―」）

エルヴィン：「まさか、テイワズが「駒」を持っていたとでも？（それにしても「あの女狐」の媚びに毒された空気すら微塵にも感じなかったのに、何故？）」

コクピット上、焦るエルヴィン。

エドワーズ：『ダニエル、大丈夫か？』

エルヴィン：「何でもない」

エドワーズ：『「蛇姫」は、俺がココで食い止める。三日月君と昭弘君のフォローを頼む！』

エルヴィン：『言われるまでもない、任せろ！』エルピス、捕捉出来ているか？」

エルピス：「既に捕捉済みです」

タービンズの猛攻を防ぐ為に、各々が修羅に入ろうとしていた。

Ｃｈａｐｔｅｒ―７：イサリビ防衛：煽り煽られ振り回されて…
その頃イサリビは、タービンズのＭＳ・百里の銃撃の雨の真っ只中にいた。
百里からの射撃を撃ち落とし、単機で孤軍奮闘するＭＷ。
脆弱ながらも、防戦必死の状態だ。
対する百里は、ヒットアンドアウェイの離脱戦法を取りながら、隙を伺っている。
ユージン：「アレンさんとダンジ二人っきりに任せっきりじゃ、どのみち持たねぇぞ！」
チャド：「相手のＭＳが、やけに速すぎて捉えきれない！」
イサリビ周辺を飛び回る百里。
ラフタ：「”エビ”だけに、かっったいなぁ～…（ダンッッ!!）ヒャッ!?いっったいなぁ、もー（ピーピーピー）何なの、あの「赤い鳥」？」
苦戦するラフタ。その直後に、何が被弾。赤い鳥のようなＭＳに背後を取られた。
その戦況を注視していたスティーブが、ラフタにこう言った。
スティーブ：『「”エビ”だけにかっったいなぁ～」って、ぽんすーか、ワレぇ！しっかり狙えてるんかよ、ラフタ……と云うか何じゃ、あの赤い鳥は？（ひょっとして、噂の「厄祭戦」を終わらせた伝説のアレなんか？「固有周波数」は、一致しとるんに……「喪われたＭＳ（ロスト）」か、それとも……）』

赤い鳥のようなＭＳ：エルヴィンのゼロ炎が、全速力で反転、イサリビ防衛の為に戻って来た。
更にＭＳ形態に変形、ツインバスターライフルを右手に携え射撃、砲撃の雨をひらりと避けながら距離を詰める。
スティーブ：「ほぉ～……　危ない危ない。あの赤い鳥、人の形に「変形」するんじゃと？びっくりしたなぁ……　って、ここで驚く「ワケ」ないじゃろうが、ワレぇ！　わしのこの機体も、あんたが乗っとる機体と同じように……「変形」出来るんよ。さて、教え子にカッコええトコ見せて、生意気なしごんぼう共に……　やいとぉ据えたるわ！」
そう話すとグリップを操作、人型の姿：ＭＳ形態へと変形を始めた。
右手にバスターライフルを携え、ゼロ炎に向かって砲撃開始、更に距離を詰める。
エルピス：「御主人様。ウイングガンダム、接近してきます！」
エルヴィン：「撃ち合いだけでは埒があかない！接近戦で迎え撃つ！」
エルピス：「了解、装備を「ハイパーカレドヴルッフ」に切り換え…」
スティーブ：『胴体がら空きなんでぇぇ！隙ありィィッッ！』
バスターライフルを即座に「格納」し、シールド下部からグリップを取り出しビームサーベルを抜刀、ゼロ炎に斬りかかる。絶体絶命のピンチ。次の瞬間！

ダァンッッ!

Ｗのビームサーベルの勢いを相殺するかのように、後方から、ガンダム・バルバトスの滑腔砲が炸裂。どうやら間に合ったようだ。

三日月：「俺たちの艦（ふね）に勝手に手を出すなよ!」

昭弘：「教官に任されたんだ!ここで止まる訳には、行かねぇんだァァッ!!」

バルバトス・グレイズ改の両機がイサリビに間に合った。

奇襲を仕掛けるタービンズ勢に反撃を仕掛ける。

スティーブ：「ここで真打ち登場？　あの機体が、ウワサのＡＳＷ―Ｇ―０８「ガンダム・バルバトス」：「厄祭戦」を終わらせた７２機のガンダム・フレームの１機、か。更に、ありゃあ・・・　色がちぐはぐで妙ちくりんなグレイズか？「急いで間に合わせましたよ」感バレバレだって。マトモな調整もしとらん上に、あたかも初心者丸出しの後方支援（バックアップ）・・・・・　げに、腐りきった火星支部を出し抜いた上に、更に名家の嫡男と一戦交えた、ゆうて聞いたがなぁ・・・・

まぁ、そがぁなこたぁどうでもええとして・・・・・

ラフタは目の前の角を生やしとるヤツを、アジーは、色がちぐはぐなグレイズを懲らしめちゃってくれんか？わしゃぁ赤い鳥のヤツと戯れてくるよ。徹底的にしごいちゃりな!」

ラフタ：『はいはーい♪』
アジー：『ラジャー』
バルバトスには百里（ラフタ）を、グレイズ改には青の百錬（アジー）を、それぞれ充てるよう指示を飛ばしたスティーブ。戦線は分散し、「青龍」の独壇場となった。
スティーブ：「これで主戦力と敵本陣との分断に成功、
っと。次は、孤軍奮闘しとるＭＷを楽にしちゃろうかと・・・（ダァァン！）ガフゥッッ！何しよーるん？」
前方のモニターを注視。どうやらＭＷからの流れ弾を喰らったようだ。
そのＭＷ　では・・・・・
ダンジ：「アレンさん！当たったみたいですよ！」
アレン：「敵の注意を向ける事は出来たが・・・・　頼みの綱である主力が分散され、ピンチである事に代わりはない」
ＭＷ　砲手席のモニターを注視しながら、ダンジに状況を伝えるアレン。弾薬が底を尽きるまで後少し、補給で一旦下がらないとマズイ状況だ。
ダンジ：「このままだと、僕たち犬死にですよぉ～、アレンさんどうしますかぁ～？」
単機だけでイサリビを護りきったのは良いが、ＭＳ数機がよって集って潰しにかかる、と云う事態に。エドワーズに託された任務を全うしようかとした矢先の事であっ

た。

ブリッジから通信が入った。

ユージン：『ダンジにアレンのオッサン、一旦下がってくれ。ここから討って出る。後は俺たちに任せろ！』

アレンが冷静に返す。

アレン：「討って出る」……　君たちは正気か？敵艦に「特攻する」とでも言うのか？無茶な事を云うんじゃ……」

ユージン：『前線に出てる三日月や教官たちだけに、イイカッコされてたまるかよ！俺たちなりの…　「宇宙ネズミ」なりのやり方で、アイツらに見せ付けてやりてぇんだ。俺たち鉄華団の…　「筋」と云うヤツを』

少し黙るアレン。彼はふと思い返した。かつてＧＨにいた時、アインとロッカーで語ったあの日の事を…　ーーーーー

ーーーーーＣＧＳ夜襲後にまで遡る。

コーラル：『何、「失敗した」だと!?どういう事か説明して貰おうか、ゼント二尉！』

モニター越しのコーラルが、クランク（アレン）を詰める。

クランク：「指揮官であるオーリス・ステンジャが死亡、三割の兵とグレイズ１機を失

い、やむを得ず撤退を余儀なく……」

コーラル：『ふざけるなッ！（机を叩く）「独立運動の旗頭であるクーデリアが”戦死”を遂げ、火星は”今以上”の混乱に陥り、地球への憎しみを強くする」：そういうシナリオ（手筈）だったのに……　貴様も知っていようが、後日本部から監査局が、視察に見えられるんだぞ？分かって言ってるのだろうな？それで……　誰にオーリスがやられたと云うんだ？』

躊躇いながら言葉を返す。

クランク：「相手は……　子供でした…　二十歳にも満たぬ…　子供でした……」

コーラル：『「子供」？雁首揃えてガキ共に……　してやられたと？』

クランク：「実際に感じて思った事だが……　子供を、否！少年兵を相手に戦争など出来ません！彼らが自らの意思で戦っているとは思えない！ＧＨの「清廉潔白たる正義」の御旗のもとに集いし護り手が、なぜこのような事を…」

コーラル：『甘い事を抜かすな、ゼント二尉！相手が子供だろうと関係ない！事が明るみにならぬよう、一人残らず駆除しろ、いいな！これは命令だ！絶対に失敗は許されんぞ!!』

ブツンッ！と、一方的に通信が切れた。

拳を握り、歯ぎしりをしながら、やり場のない怒りを堪えるクランク。一路、ロッカー

へと向かう。
ロッカールームに入ったクランク。アイン・ダルトンが座っていた。
クランク：「アイン、お前にこれを預ける」
アインに向かって投げ渡した物ーＧＨの紋章：角笛に月桂樹をあしらったバッジだ。
アイン：「クランクさん?どうしましたか?コーラル司令に詰められたようで・・・」
クランク：「アイン、お前も先の作戦で痛いほど感じたろう・・・・・　我々の知らない所で、年端も行かぬ子供達が、武器を手に取り戦っている現状を・・・・・」
アイン：「ええ・・・・　私も感じました。ですが、あいつらはオーリス隊長を手に掛けた、それに我が隊のＭＷまで・・・・　許す訳にはいきません!」
クランク：「無論、そうだな・・・「本来なら」な。しかし蓋を開ければ、相手は「子供だった」と云う事実。罪の無い子供を相手になど、辛いものがある。アインのように、これからのＧＨを担うお前達に、「兵士としての汚名」を着せたくはないのだ」
アイン：「しかし!」
アインの肩に手を置くクランク。まるでアインを諭すかのように・・・・・・
クランク：「「戦いたくはない」それが俺の本心だ・・・・・・　だが、戦わずには済まされないのなら・・・・　それがＧＨが長年提唱してきた・・・「清廉潔白たる正義」の正道に反し

ているか否か・・・・ 今一度、己自身に問うといい・・・・・・」
アイン：「クランクさん!!」
アインの静止の声も届かず、クランクは独り、ＭＳ格納庫へと向かい、「決闘」へと赴いたーーーーーー
時を戻し、イサリビ甲板上では。
ダンジ：「アレンさん？一旦退きますよ」
ダンジが声をかける。
アレン：「ああ、スマン。昔の事を思い出していた・・・・ 艦に下がろう」
そう云うと、二人を乗せたＭＷが撤退した。
スティーブ：「へぇ、降参かのお？それにしても何かおかしゅうないか？（まるで勝利を確信したかんような退き口。何を考えとるんじゃ、あんなぁらぁ？）」
エルヴィン：『前線で物見とは・・・・ 戦上手にも程があるとはな・・・・』
（イメージＢＧＭ：「真・三國無双４」より「合肥―ＧＲＥＡＴ ＲＥＤ ＳＰＩＲＩＴ―」）
敵ＭＳ：ゼロ炎のバルカン掃射にたじろぐＷ。
スティーブ：「ぐっ・・・・・ 寝首を掛かれる所じゃったよ・・・・・ 戦い慣れしとるようじゃのぉ、ちぃと手合わせしようか、のォッ！」

ビームサーベルとシールドを携え、ゼロ炎に躍りかかるＷ　。
バチバチバチバチと、蛍光グリーンの光の刀身がそれぞれ交わり、スパークしている。
鍔迫り合いだ。力は互角。互いの意地が刃に乗り、一歩も譲れない状況だ。
エルヴィン：「中々”出来る”ようだな。修羅場慣れしているようだが？」
スティーブ：「そうゆうワレも、案外骨のある、かなりええ線行っとるようじゃのぉ。刃にのしかかって来る「重さ」が、いっつも稽古つけとるのと違うようじゃがァァッ、押し負けてしもぉた！」
ゼロ炎が競り勝ち、のけ反るＷ　。ビームサーベルをシールドに納刀し、バスターライフルを「召喚」し、体勢を立て直す。
スティーブ：「それじゃったら……　これでどうだ！」
バスターライフルを放つ。その雨の中を縫うように回避しつつ、Ｗの懐に接近する。
エルヴィン：「エルピス、回避出来るか？」
エルピス：「回避可能、相対速度維持で回避します」
そして……
ガァァン!!
スティーブ：『相対速度を落とさず、鮮やかに回避。同時に背後を取ってトドメの間合

い、か……　流石のわしでも恐怖を覚えたよ……　あんたァ……　アミダより、ぶち強そうじゃけぇの。「勝ち」は、ほうじゃのぉ……　ワレに譲っちゃるよ。逆鱗に触れのぉて……　えかったのォ』

エルヴィン：「見応えのある戦ぶりだった……「使いこなせて」いたようだな……敵ながら見事、称賛に値するな……」

スティーブ：『「称賛に値する」か……　大袈裟な事言いよる。わしの事を誉めとるんか、それとも、貶（けな）しとるんか……　ハッキリ言いんさいや、濁すようにゆわれると、どんように解釈すりゃぁええんか、わしゃあどうも分からのぉて……』

翼を持つＭＳ同士の対決は、不死鳥の心臓（フェニクスのリアクター）を宿したゼロ炎に軍配が上がった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―８：イサリビ防衛：劣勢濃厚、そして……

Ｗとゼロ炎の両機の戦闘が始まるのと同時に、戦線は分断。イサリビ劣勢の空気の中、昭弘・アルトランドが駆るグレイズ改は、単機で青い百錬と対峙していた。

昭弘：「ぐぬぅう……　この状況、どう切り抜けれりゃあ……」

アサルトカノンの銃撃を耐え凌ぎつつ、反撃のチャンスを伺う昭弘のグレイズ改。

ナノラミネート装甲材を外装甲としているＭＳとは云えども、執拗なまでの銃撃に晒

され続けている上、何れ「傷口」が出来る。銃弾の雨など、ただのかすり傷同然だ。
昭弘：「そぉこだッッ!」バシュゥウン!!
アジー：「ぐぅぅぅッ!」
グレイズ改が放った一撃が、百錬のアサルトカノンに命中、その場で爆発四散した。
アジー：『やってくれる・・・　なら、これならどうだい!?』
すかさず片刃式ブレードを抜き、躍りかかる。
昭弘：「抜かれて、たぁまぁるぅかァァッ!」
躍りかかる百錬に対して、ライフルで応戦するグレイズ改。
次の瞬間!
ガキィィィッ!!
昭弘：「ごがあァァァッ!」
強烈な前後からの不意打ちとスタン状態に陥る昭弘。どうやら、「青龍」があらかじめ増援として出撃させた、アスカとサラが間に合い、電磁ナックルで挟撃。グレイズを黙らせた。
アスカ：『アジー姉さん、遅くなりました』
サラ：『良ければこれ、使って下さい』
サラから、アサルトカノンを渡されるアジー。これで挽回出来そうな気がしてならな

い。

アジー：「（まさかヤン先生、このような展開になることも、お見通しだったのか？）ありがたい、一気に盛り返すよ！」

アスカ：『了解！』

サラ：『遅れた分、きっちり返しますよ！』

グレイズ改に、鮮やかなサマーソルトキックをかまし、体勢を立て直すサラの百錬に対し、アスカの百錬は、ナックルガードを納めてアサルトカノンをグレイズ改の右手に向かって照射、マシンガンを弾き飛ばした。

昭弘：「グッ、マシンガンがッッ！ならこれでぇぇッ！」

左腰に帯刀しているバトルアックスを抜く。

昭弘：「教官に任されたんだ。退く訳には、行かねぇぇんだよォォ！」

勢いのまま、突撃を開始！

サラ：「ふーん、「力任せの単機突撃」・・・・　なんか暑苦しいんじゃないの、アスカちゃん？」

アスカ：『そうね、ぶきっちょなんじゃないの？あの「ちぐはグレイズ」のパイロットさん』

アジー：「相手は、バトルアックスを抜いて来たようだ・・・　近接戦で追い込むよ。アス

カ、サラ、「プランＣ」で行くよ!!」
アスカ：『了解ッッ!』
サラ：『「予習通り」ってヤツね。アジー姉さん、サクッと済ませましょ!』
各機、グレイズ改に踊りかかる。
昭弘：「グゥゥゥゥッ・・・・（捌ききれるか、この状況よぉ・・・・・・）」
「木星の青龍」の薫陶を受けただけの事はある為、対応はスムーズに行けたようだ。
２機の僚機で敵を追い込みつつ挟撃し、メインの機体でトドメを差す。
ＭＳ　の機動性を充分に活かした戦法：プランＣだ。
時同じく、バルバトスと百里との戦況は?
三日月：「くっ・・・・　コイツ、足が速すぎる。捉えきれない」
狙いを定めて滑腔砲を放っても、上手く回避しつつ反撃の隙を伺う百里。
三日月：「んぐぅッッ!!」
百里のライフル被弾。
ラフタ：「ビィィンゴ～♪」
バルバトスを翻弄し続ける百里。それに食らいつくバルバトス。一進一退の攻防が続く。鬼ごっこのような展開となる。
三日月：「くっそッッ!速い!」

ラフタ：「推進力が違うっての！」
態勢を立て直すバルバトス。百里から見れば、格好の的だ。
ラフタ：「遅い遅い遅い!!」
旋回しながらのライフル連続掃射。バルバトスが受けるダメージは、ひとたまりもないだろう。
華奢な体躯に相反する大型のバックパック、それに積んであるのは3基の大型ブースターと両足のブースターの計5基で実現出来た高推力を生かした一撃離脱の高機動性。
シュヴァルベ・グレイズより扱いが難しいピーキーなＭＳ　を、いとも簡単に操るラフタ・フランクランドの技術は、侮れないだろう。
三日月：「んぐうッッ！今のでスラスターが・・・　それにしても、このままじゃ埒が明かない」
三日月も昭弘と同様、苦戦を強いられていた・・・・・・
一方イサリビでは、「次の作戦」の準備に取りかかっていた。
シノ：「よう、ヤマギ！」
ヤマギ：「あっ・・・（シノ・・・・・）」
シノ：「準備はどうだ？」
ヤマギ：「今終わったとこだよ」

シノ：「そっか・・・　いっつもわりいな！」
互いに見つめあい、暫く沈黙が続いた。
シノ：ん？（何か言いたげだぞ、どうした？）へっへへ！遠慮なんかすんじゃねぇよ！ほら、よっと！」
整備クルーのヤマギ・ギルマトンに手を伸ばすノルバ・シノ。茫然とした表情のヤマギを引き上げ、同時にＭＷ　に乗り込むシノ。そんな中、雪之丞の檄が飛ぶ。
雪之丞：「整備班！手ェ空いたのからとっとと上がれェ！すぐにエアロック閉じるぞお!!」
シノ：「お前ら、準備はいいよな？」
共に行く団員を鼓舞した。準備は出来た。
シノ：「ブリッジ！こっちは準備出来たぞ!!」
ブリッジでは、ビスケットとユージンが待機していた。
ビスケット：「ユージン！」
ユージン：「ああ、わかってんよ！」
そう言うとジャケットを脱ぎ、コンソールを操作し、「あるモノ」を現出させた。何かのコネクターのようだ。
現出させたコネクター・・・　すなわち、イサリビと「阿頼耶識」で繋いでＭＷと同じよ

うに操船する為のコネクターである。

鉄華団はタービンズに、ひいては、かつての社長：マルバに一矢報いる為の策に討って出ようとしているのだった。

ユージンの脳裏に、開戦前のやり取りが過った。

（イメージＥＤ　：Ｗｉｎｇｓ　／　山本彩）

ーーオルガ：「あんたの要求がどうだろうと、俺たちにも通さなきゃいけねぇ筋がある」

名瀬：『ああ…　俺たちと「戦う（やり合う）」って意味で良いんだよな？』

オルガ：「ああ…　俺たちが「ただのガキじゃねぇ」って事を教えてやるよ。マルバ！てめぇにもな」

マルバ：『はぁ？』ーーーーー

イサリビと「繋がる」前、モニターを見ながら、ユージンはこう呟いた。

オルガ・ユージン：『「死んでいった仲間のケジメ、キッチリつけさせて貰うぞ!!」』

To be continue the next LOG……